

平成 2 9 年度
ファカルティ・ディベロップメント活動報告書

玉 川 大 学

大 学 F D 委 員 会

大 学 院 F D 委 員 会

は じ め に

—FD の組織的推進をめざして—

玉川大学は、ファカルティ・ディベロップメント（FD）をマイクロ、ミドル、マクロの三層の立場から推進しています。マイクロ・レベルの FD の目的は、教員個々の授業と教授法の開発にあります。通常、多くの大学で FD の名のもとに行われるのがこうした活動です。本学でも、大学 FD 委員会が中心になって行う FD 活動はマイクロ・レベルが中心です。一方、ミドル・レベルは教務主任等によるカリキュラム・プログラムの開発が目的です。教務委員会における全学カリキュラムの見直しや各学部の教務担当者会における専門分野のカリキュラム改善のための作業がこれに該当します。さらに、マクロ・レベルは、管理者による大学組織の教育環境および教育制度の開発が目的です。こちらミドル・レベルと同様に、そのための具体的な FD 研修会等が開催されるわけではありません。現行の大学部長会や大学院研究科長会の一環として定期的に行われる教育研究活動等点検調査委員会などの作業が FD 活動に相当します。

ミドル・レベルとマクロ・レベルの FD 活動は、その性格上、全学的な視点と学部的な視点が要求されますが、マイクロ・レベルの FD は、長いあいだ各教員の努力義務のように理解されてきました。したがって、ワークショップや研修会の参加についても教員の自主性に委ねられ、学部や全学が一体となって授業や教授法の開発に取り組んできたと言い難い状況にありました。しかし、平成 19 年以降、本学では、複数の学部で、また教学部教育学修支援課が中心となって積極的に授業改善に取り組んでいます。特に、平成 26 年度以降は文部科学省の教育再生加速プログラム（AP）の採択を受け、アクティブ・ラーニングやルーブリック等に関する研修会やワークショップを開催し、アクティブ・ラーニングの推進と学生の学修成果の可視化に努めています。また、ティーチング・ポートフォリオのメンターを各学科に 1 名配置する計画が平成 29 年度のワークショップをもって完了し、これまでに 17 名のメンターを認定することができました。平成 30 年度以降はメンターの支援を受けながら全教員がティーチング・ポートフォリオの作成を進めていく予定です。

今後も引き続き、個々の教員がファカルティの一員として有機的に FD にかかわれる体制を堅持していきたいと考えています。

大学 FD 委員会・大学院 FD 委員会委員長
教学部長 稲 葉 興 己

目 次

I 大学 FD 活動状況と今後の計画

1. 大学 FD 委員会	
(1) 委員会の目的	1
(2) 委員構成	1
(3) 今年度の活動計画および課題	1
(4) 活動状況	2
(5) 活動の成果	4
(6) 今後に向けて	5
2. 学部の活動.....	6
3. 教師教育リサーチセンターの活動.....	62
4. ELFセンターの活動.....	65
5. ユニバーシティ・スタンダード科目の「授業評価アンケート」	75

II 大学院 FD 活動報告

各研究科の活動	104
---------------	-----

III 教員研修

新任教員研修会

(1) 研修プログラム内容	112
(2) 配付資料・参考資料	114
(3) 実施の成果	115

参考資料

1. 大学 FD 委員会の議事内容	118
2. 「授業評価アンケート」用紙.....	120
3. 玉川大学 FD 委員会規程	122

※本文中の記載内容について

- ・本文中の文字表記については、原文のままとした。
- ・役職名称は、平成 29 年度当時の記載とした。

I 大学 FD 活動状況と今後の計画

1. 大学 FD 委員会

(1) 委員会の目的

本委員会は、本学教員の教育研究活動の向上・能力開発に関して恒常的に検討を行い、その質的充実を図ることを目的としている。また、FD 活動を行う目的を、以下のとおり明確にしている。

- ① 玉川大学の教育理念を実現するため。
- ② 21 世紀の玉川教育を支える教員を育成するため。
- ③ 大学大衆化時代に対応するため。
- ④ 競争優位性（受験生の大学選択等）を確保するため。

(2) 委員構成

委員等	所属	氏名
委員長	教 学 部 長	稲 葉 興 己
委員	FDer	小 島 佐 恵 子
委員	文 学 部	北 原 博 雄
委員	農 学 部	宮 田 徹
委員	工 学 部	黒 田 潔
委員	経 営 学 部	伊 藤 良 二
委員	教 育 学 部	高 平 小 百 合
委員	芸 術 学 部	田 中 敬 一
委員	リベラルアーツ学部	小 嶋 正 敏
委員	観 光 学 部	小 林 直 樹
委員	ELFセンター	ミリナー、ブレット
事務担当	教学部教育学修支援課	山 崎 千 鶴
事務担当	教師教育リサーチセンター	高 橋 正 彦
事務担当	教 学 部 教 務 課	光 森 多 佳 子
事務担当	教育企画部教育企画課	金 子 勲
事務担当	人 事 部 人 事 課	後 藤 洋 子

(3) 今年度の活動計画および課題

昨年度に引き続き、Tamagawa Vision 2020 の Action Plan 2017 に沿って取り組んだ。すなわち、

1. 各分野の学問分野に応じた教授法の研究開発の開始

アクティブ・ラーニングをテーマとした研修会を開催する。さらに、研修会を学

外にも公開していく。また、ティーチング・ポートフォリオ作成研修会を定期的に開催し、メンターおよびスーパーバイザーの養成を確かなものとする。

2. 双方向型授業、問題解決型授業（PBL）の研究会発足
2016 年度に公開した事例集を更新する。また、ハンドブックとしても活用できるよう、内容を検討する。
3. 全授業科目の成績評価分布を公表する
シラバスの成績評価基準のみならず、シラバス作成マニュアルを更新する。
4. FDer の養成プログラムの作成と実施
各学部の FDer 候補者を選定し、学内にて FDer 養成講座の開催を検討する。
5. 玉川大学教職員 Credo の草稿の作成
引き続き、本学 Credo の素案を検討する。

（４）活動状況

＜平成 29 年度＞

4 月 4 日	教員対象 Blackboard@Tamagawa 操作説明会を開催（28 日まで 9 回）
4 月 27 日	ティーチング・アシスタント(以下、TA)研修会「効果的に授業を支援するための TA の役割」（講師：教育学部 小島佐恵子）開催
4 月 28 日	第 1 回 大学 FD 委員会 開催
5 月 17 日～19 日	第 8 回教育 IT ソリューション EXPO に職員派遣
5 月 26 日	TA 研修会「ハラスメントのない大学に」（講師：本学顧問弁護士 桑島英美）開催 千葉大学アカデミック・リンク・セミナー/ALPS セミナー「グローバルな視点から見た日本のラーニングコモンズ」に職員派遣
6 月 10 日～11 日	大学教育学会第 39 回大会「教養教育の再考」（広島県 広島大学）に職員派遣
6 月 23 日	株式会社 SIGEL 主催「第 7 回 教育支援セミナー～これからの高等教育について考える～」に職員派遣
6 月 30 日	第 2 回 大学 FD 委員会 開催
8 月 4 日	第 12 回神奈川大学高大連携協議会「主体的・対話的で深い学びの実現に向けてーアクティブ・ラーニングの実践と学習評価ー」に職員派遣
10 月 20 日	ループリック ワークショップ「ループリック評価スタートアップー評価の原則から組織での活用まで」（講師：高知大学 俣野秀典）を開催
11 月 4 日	第 3 回ティーチング・ポートフォリオ 作成ワークショップ（前半）を開催
11 月 22 日	東北大学大学教育支援センター主催 PD セミナー「発達障害学生の実態の理解と支援の取り組み」に職員派遣
11 月 24 日	第 3 回 大学 FD 委員会 開催
11 月 30 日	首都大学東京 FD 委員会主催 FD セミナー「アクティブ・ラーニ

12月1日	ングにおける反転授業とeラーニング教材の活用」に職員派遣 大学教育学会 2017 年度課題研究集会「大学教育は“役に立つ”のか」(兵庫県 関西国際大学)に職員派遣
12月7日	千葉大学アカデミック・リンク・セミナー/ALPS セミナー「大学教育の質的転換と教育・学修支援—アクティブラーニングと学修成果の可視化についての先進的実践事例から—」に職員派遣
12月16日	第3回ティーチング・ポートフォリオ 作成ワークショップ(後半)を開催
1月18日	科目担当者対象アクティブ・ラーニング ワークショップ「教育活動と IR をどうつなげるか—アクティブ・ラーニングの観点から—」(講師:熊本大学 川越明日香)を開催
1月26日	第4回 大学FD委員会 開催
2月9日	産業能率大学教育開発研究所主催 第3回公開FD研修会「大学教育におけるアクティブラーニングと学修成果の可視化」に職員派遣
2月15日	東京電機大学主催 大学教育再生加速プログラム(AP) フォーラムに職員派遣
2月22日	平成29年度 大学教育力研修 開催 基調講演「大学入試における新共通テストの課題と高大接続の今後」(講師:大学入試センター 山地弘起) 分科会① アクティブ・ラーニング ワークショップ「授業外学修を促す学修課題の組み立て方」(講師:愛媛大学 中井俊樹) 分科会② ルーブリック ワークショップ「ルーブリック評価スタートアップ—評価の原則から組織での活用まで」(講師:高知大学 俣野秀典) 分科会③ ELF センター教員によるコンテンツ科目の英語化ワークショップ「Introduction to Gender in Japanese Society」(講師:ELF センター 岡田トリシャ 他) 分科会④ 発達障がいのある学生の支援に関する講演「大学における発達障害学生の理解と対応—大学に求められている支援とは」(講師:信州大学 篠田直子) 分科会⑤・⑥「アクティブ・ラーニングについての各学部事例報告」
2月26日	大阪府立大学・大阪市立大学・関西大学 AP 合同フォーラム「第3期認証評価に向けて:学生の成長に寄与する内部質保証システムの構築」に職員派遣 ティーチング・ポートフォリオ研修会(講師:東京大学 栗田佳代子)を開催
2月28日	Ja Sakai コミュニティ、Aperio Foundation 主催「Ja Sakai/AXIES/IMS 合同カンファレンス 2018」に職員派遣

3月7日	玉川大学 AP フォーラム 2017「教職課程におけるアクティブ・ラーニングと学修成果の可視化」を開催
3月8日・9日	平成 30 年度新任教員研修会 開催
3月22日	非常勤教員対象研修会 開催

その他、学生による授業評価アンケート、第三者によるシラバス確認など、例年どおりに実施した。授業評価アンケートは、US 科目については教育学部教育学修支援課が、各学部開講科目については開講学部が実施した。第三者によるシラバス確認は平成 16 年度開講科目より実施しており、ある程度定着したと考えてよいであろう。シラバスを前半（履修登録に資するために公開するもの）と後半（履修登録をした学生のみ見られるもの）に分け、前半については科目開講年度の前年度 1 月に全科目を確認、後半については春学期科目は前年度の 3 月、秋学期科目は当該年度の 8 月に確認している。また、科目の特性により確認する点が変わることから、教育職員免許状取得に関わる科目については教師教育リサーチセンターが、また、それ以外の科目については教育学修支援課が確認を担当した。

また、10 月のルーブリック ワークショップおよび 2 月の大学教育力研修は、平成 26 年度に採択された「文部科学省 大学教育再生加速プログラム (AP)」の取組として実施した。当該研修の午後には分科会を行っているが、今年度は 6 件の分科会を開催した。なお、すべての分科会を撮影し、学内限定にて動画を配信している。これにより参加できなかった分科会についても内容を確認することができるだけでなく、振り返りとして活用することができると考えている。

非常勤教員のみを対象とした研修会も AP の取組の一環である。当該研修会は一昨年度より実施しているものであるが、それまでは本学の教育方針や今後の方向性などは専任教員に対してのみ情報共有が図られてきた。しかし、非常勤の教員であっても本学の教育方針に基づいた教育および授業を行うことを求めており、今の本学の取組について説明する機会を設けた。

なお、これまでも実施しているものであるが、Blackboard の一層の活用を目指して、教員を対象にその操作説明や活用方法の相談の機会を多く設けた。同時に、ICT 教育に関する学外でのセミナー等に参加する機会を増やした。今後の取組の参考としたい。

（５）活動の成果

今年度の活動計画に基づき、活発な取組をすることができた。昨年に引き続き、他機関が開催する関連研修会等には職員も多く参加し、教職協働を実現すると同時に、教員と職員が同じスタンスに立って FD 活動を推進することができた。

また、前項のとおり、AP に沿って複数の研修会等を開催した。これらは、アクティブ・ラーニングの活用と学修成果の可視化を目的とするものであり、一定の理解は得られたものと考えている。2 月に開催した大学教育力研修については今回から学外にも公開し、25 名の参加があった。

ティーチング・ポートフォリオについては作成ワークショップを昨年に引き続き開催し、複数のメンターを養成、全学科に配置できた。平成 30 年度からの活用に向けて全専任教員を対象にした研修会も開催し、学内における理解を図ることができた。

また、FDer の養成については、候補者を各学部から 1 名選定し、次年度に養成講座を開

催するべく、時期を定め、講師と内容の調整を図った。

（６）今後に向けて

次年度においても、他機関主催の関連研究会等には積極的に参加し、関係教職員への情報提供を行いたい。また、学内で開催する研修会等についても AP の取組を中心に、アクティブ・ラーニングをテーマとしたワークショップ、ルーブリック指標による評価に関するワークショップ、非常勤教員対象研修会等は継続して開催していく。大学教育力研修については次年度以降も学内の教員のみを対象とするだけでなく、学外にも公開する予定である。

また、FDer の養成についても、次年度中に養成講座を開催し、平成 31 年度までに各学部
に FDer を配置できるよう進める。

詳細については、Tamagawa Vision 2020 の Action Plan 2018 に沿って進めていく。

2. 学部の活動

平成 29 年度における各学部 FD 活動の状況を一覧にする。

	各学部 FD 委員会 の構成人数	各学部 FD 委員会 の開催回数	学生による授業評価アンケートの実施			学部研修会
			実施時期	専任 対象	公表	
文 学 部	7 名	2 回	春学期終了後 秋学期終了後	全員	学内外 (Web)*1	学内外実施
農 学 部	7 名	2 回	春学期終了後 秋学期終了後	全員	学内外 (Web)	学内実施
工 学 部	6 名	2 回	春学期終了後 秋学期終了後	全員	学外(Web) 学内(冊子) *2	学内実施 各学期終了後
経営学部	5 名	2 回	春学期終了後 秋学期終了後	全員	学内外 (Web)	学内実施
教育学部 (通信教 育部含)	8 名	2 回	春学期終了後 秋学期終了後	全員	学内	学内実施
芸術学部	7 名	3 回	春学期終了後 秋学期終了後	全員	学内	学内実施
リハビリアーツ 学部	5 名	2 回	春学期終了後 秋学期終了後	全員	—	学内外実施
観光学部	5 名	2 回	春学期終了後 秋学期終了後	全員	学内	学内実施

*1: 文学部における学生によるアンケート結果の公表は英語教育学科で実施する予定である。

*2: 学生による授業評価アンケート結果については、学外向けには総括内容を大学 HP (Web) で、学内向けには全内容の詳細を冊子として 8 号館玄関ロビーにて、それぞれ公表している。

※ユニバーシティ・スタンダード科目についての学生によるアンケートは別途実施している。

§ 文学部

1 FD 活動への取組理念・目標

大学に対する社会からの期待とニーズの多様化と、大学生の学力低下という現実に対応すべく、FD による教育力の向上によって、時代に即した、そして普遍性を兼ね備えた大学教育を実現すべく努力することを、文学部の FD 活動への取組理念とする。就労意識の変化に対応した学生へのキャリア教育ないし就職指導も、大学にとって重要性を増しているのに加え、文学部では比較文化学科が英語教育学科に、人間学科が国語教育学科に移行する過程にあり、FD の重要性はより増している。

このような現状の下、一人ひとりの教員が学部ディプロマ・ポリシーに則り FD 活動に臨み、教員全員が主体的に FD 活動に参加し、組織的な FD 活動を実現することを目標としている。

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

文学部長および主任会（教務主任、学生主任、国語教育学科・人間学科主任、比較文化学科・英語教育学科主任）のもとに、文学部 FD 委員と、国語教育学科・人間学科、比較文化学科・英語教育学科の FD 担当（国語教育学科・人間学科は文学部 FD 委員が兼務）の合計 7 名で文学部 FD 委員会を組織している。

3 平成 29 年度の活動内容

（1）研修会「国語教育学科新入生の国語力の現状」（国語教育学科）

① 概要（目的を含む）

国語教育学科への平成 29 年度入学者の国語力を向上させるために、学科所属の教員全員が、5 月に実施した「日本語運用能力テスト」の結果およびその出題意図を知る。

② 到達目標

平成 29 年度入学者の国語力のレベルを、国語教育学科所属の教員の間で共有する。

③ 活動内容

5 月 18 日（木）の 16:00 から 1 時間 20 分にわたって、平成 29 年度入学者が受験した試験を作成した基盤学力総合研究所および Z 会から二人を招き、出題意図の説明をきき、さらに、他学と比較しながら試験結果の説明を受けた。

④ 評価

「聞く」「読む」「書く」能力では、全体の構造・構成を考えて聞いたり読んだり書いたりすることを不得意とする学生が多い。この点に関しての 3 能力での不正答率は順に、31.9%、31.9%、26.4%である。語彙の能力も、高校レベル以上のものが定着していない学生が、正答率 60%未満は 41.6%、正答率 20%未満は 5.6%いた。このような現状を認識し、主に「言語表現入門」という授業で不得意分野の克服をさせるような教材を作成し学修させた。平成 30 年 1 月 25 日に同じレベルの試験を受験させた。

(2) 授業設計・成績評価ミーティング（国語教育学科）

① 概要（目的を含む）

複数教員が授業担当をする科目であり、学科創設一年目の初年次教育の科目である「一年次セミナー101・102」について、まとめ役を座長として授業の計画・内容・成績評価に関する合意形成を目的とした会議を毎回1時間ほど、毎月2回行った。

② 到達目標

授業担当者間において、科目の教育目標達成のための合意形成を得る。

③ 活動内容

それぞれの教員の授業内容の報告とそれに対する意見交換、授業改善の提案、成績評価に関する検討、他科目との連携の可能性の検討、などを行った。さらに、授業の成果の一部をコスモス祭で展示・発表するための準備や、文学部の4年生（教員内定者、民間企業内定者、定年退職後の学生）と大学院生を招いてのキャリアについてのワークショップの準備についてどう学生を活動させるかについて議論した。

④ 評価

学生による授業評価のアンケートによれば、春学期に関しては、大学、学部・学科、クラスになじむのに効果があったようだ。平成30年度は、『大学生活ナビ』の内容理解のサポートとして外部講師を依頼したり、教員志望の学生が多いためTAPによるリーダー講習なども取り入れたりすることを考えている。大きい課題としては、大学共通カリキュラムを基本に、学科独自の内容へとどのようにアレンジしていくかという点、授業時に学生たちをいかに主体的に学修させるかという点について、今後も検討を要する。

(3) 授業評価アンケート（比較文化学科・英語教育学科）

① 概要（目的を含む）

比較文化学科および英語教育学科で開設している授業について、授業評価アンケートを実施した。個々の教員が、担当する授業を点検し、改善するための指標を得ることが目的である。

② 到達目標

教員の意図と学生の受け止め方の間にどのような差があるかを検証し、次の学期あるいは次の年度の授業改善に具体的に生かす。

③ 活動内容

実施時期：秋学期

対象科目：学科科目のうち、セミナー、US、FYEを除いた全科目を対象とした。

ただし、4年生は比較文化学科の最終学年であるためアンケート対象とせず、英語教育学科の2年生も留学中であるため、これも対象としなかった。そのため実施クラス数は15クラス、履修者数は388名という規模になった。

集 計：業者に委託して、各クラス別、カテゴリー別、全体の3レベルで集計する。集計結果は平成30年3月末に完成する予定である。

フィードバック：

各授業担当者にはアンケート原票、クラス別の集計結果、およびカテゴ

リー別と全体の集計結果をフィードバックし、全体の集計結果は大学ホームページ上に公開する予定である。

④ 評価

アンケートおよび集計は予定通り実施したが、結果については前述のごとくまだ出ていないので、平成 30 年 4 月以降、総括を行いたい。なお、今後の課題として、英語教育学科では 4～5 セメスターに留学をすること、そして比較文化学科時代と科目内容が変わることから、アンケート内容と実施方法の見直しが必要である。

(4) 留学カリキュラムの効果についての検証（英語教育学科）

① 概要（目的を含む）

英語教育学科では、2 年次秋学期から 3 年次春学期の間に留学することを卒業要件の一つとして定めている。そこで、留学制度の効果を実証するために、留学前後の英語運用能力の変化を把握する必要がある、4 技能（聞く・話す・読む・書く）の的確な効果測定として IELTS の受験を実施している。IELTS（International English Language Testing System）とは、アメリカ、イギリスを含む世界 140 ヶ国 10,000 機関が認定する海外留学に最適な英語能力判定テストを言う。IELTS の受験にあたり、平成 29 年度は学部等改革推進制度の支援を受けている。事業名は、「留学後の英語運用能力の向上に関する実態把握」である。

② 到達目標

- ・留学前の学修が、留学先大学での学びにどのように役立っているのかを把握し、学科の授業改善に生かす。
- ・IELTS を受験することによって 4 技能について留学前と留学後ではどのように変化するのかを客観的にとらえる。
- ・留学後、留学先大学での学びが維持されているかを把握し、学科の授業改善に生かす。

③ 活動内容

留学前である 1 年次の秋学期（平成 27 年）と、留学後の 3 年次の帰国後の 7 月（平成 29 年）に IELTS を受検させた。教員は留学前と留学後の IELTS のデータを比較し、4 技能の伸びについて分析した。

④ 評価

平成 27 年度入学生の留学前と留学後の IELTS スコアの検証結果から、4 技能のすべてにおいて留学後の方が平均点が高くなるに高い。イギリスの名門と言われる大学の留学基準のスコアが 5.5～6.0 であるが、5.5 以上の学生は、留学前が 1 名だったのに対し、留学後は 45 名である。今後は、留学の効果を踏まえ、学科の授業改善に努めたい。

(5) 学外セミナー等への教員派遣

① 概要（目的を含む）

他大学での FD 活動の取組方法やその成果についての情報を収集し、文学部の FD 活動に活かすため、学外で開催されるセミナーに教員を派遣する。

② 到達目標

文学部専任教員の 20%を何らかの学外 FD 研修会に派遣する。

③ 活動内容

1. 大学コンソーシアム京都主催 教育 IR フォーラム

開催日：平成 29 年 7 月 30 日

派遣：1 名（人間学科）

2. IDE 大学協会近畿支部主催 人工知能と教育－人工知能と人間の共働化を促進する教育とは－

開催日：平成 29 年 8 月 25 日

派遣：1 名（国語教育学科）

3. 第 24 回大学教育研究フォーラム

開催日：平成 30 年 3 月 20～21 日

派遣：4 名（国語教育学科・英語教育学科）

内 2 名がポスター発表。（日時：3 月 20 日 9 時 30 分から 13 時まで）

本学文学部の教員 5 人、目白大学・広島大学の教員 1 名ずつ合計 7 名による研究であり、発表のタイトルは「Kit-build 方式概念マップを用いた 5 年間の授業実践」。

④ 評価

参加者数延べ 6 名は学部専任教員の 23%であり、数値目標は達成した。また、聴衆にも関心を持っていただけた内容の研究発表も行うことができ、内容的にも達成度は高かった。今後は、派遣先で得た知見を学部、学科の FD 活動に還元していきたい。

（6）授業参観

① 概要（目的を含む）

文学部教員の授業力向上のため、授業参観を実施した。授業公開をする教員は、参観者からの意見を聞き、互いに議論することによって授業方法の改善に役立て、参観した教員は、他の教員の授業方法を参考にして自分の授業改善に結びつける。

② 到達目標

参観を通して授業実施者と参観者のそれぞれが自らの長所、短所を自覚し、授業力を向上させる。

③ 活動内容

実施時期は秋学期であり、比較文化学科と英語教育学科の全授業を公開対象とした。

④ 評価

授業参観の実施授業は 2 件で、参観者数は 3 名であった。参観後は担当教員との率直な意見交換があり、今後の参考に資するところが多かったが、昨年度同様、参観者が少ない。これは、教員各々が参観の時間をやりくりするのに困難な状況にあることが主たる原因である。時間設定の工夫をするか、さらには他の方策を考える必要がある。

4 昨年度（平成 28 年度）に提案された予定・課題の達成度について

今年度の目標は、ほぼ達成することができた。ただ授業参観がごく一部にとどまるなど、FD が机上で議論されるレベルで終わっているという感は否めない。今年度は新学科である国語教育学科が立ち上がったが、初めての「一年次セミナー101・102」について、担当者4名が何度も授業内容と授業方法を議論して進めていったことはまさにFD活動である。

5 今後（平成 30 年度以降）の予定・課題について

来年度以降に関しても、まずは従来の活動の継続とその活性化が基本である。それに加えて、新たな環境に対応した、ないしは対応するためのFD活動も行っていく必要がある。具体的には以下の通りである。

- 1) 学内外のFD関連の研修会への参加、そしてそこでの研究発表
- 2) 学生一人一人の基礎学力の正確な把握
- 3) 新入生に対する大学での学修へのスムーズな導入
- 4) 適切な授業方法と成績評価方法の検討
- 5) カリキュラムの点検

また、文学部でこれまで行ってきた授業改善とともに、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業改善や、ルーブリックを取り入れた成績評価、さらにはメンターを中心としたティーチング・ポートフォリオの研修などにも積極的に取り組んでいきたい。

§ 農学部

1 FD 活動への取組理念・目標

玉川大学の教育理念に基づいた教育を実現するため、大学 FD 委員会と協調しつつ、学生理解の向上、授業改善、研修会への積極的な参加を促す。農学部では実験実習科目が多く、講義科目との連携によって、学生が主体的に学修できる教育環境の充実を考える。専任教員および非常勤講師は学生による授業評価を実施し、授業改善への意識を高める。さらに授業評価の結果に基づき授業参観を実施し、教員間での授業改善への理解を共有できるようにする。学部内では、主任会メンバーを中心に各教員との情報交換を行い、学修環境の向上に努める。これらを通して、教員は自らの教育力向上に対する意識を高め、社会に貢献できる卒業生を農学部として育成するために組織的な FD 活動を推進する。

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

農学部長、生産農学科主任、環境農学学科主任、先端食農学科主任、学生主任、教務主任、および農学部 FD 担当の計 7 名が中心となり、目標達成にあたる。

3 平成 29 年度の活動内容

(1) 研修会

① 概要（目的を含む）

学部内での研修会は 1)「農学部-ハラスメント防止研修会(桑島英美弁護士)」、2)「農学部-障がい者に対する合理的配慮についての研修会(桑島英美弁護士)」、3)「農学部-メンタルケアを必要とする学生のための研修会(塩澤拓真看護師)」を実施した。

全ての研修は農学部、農学研究科全教員を対象とし、教職員の業務環境の最適な維持ならびに学生、大学院生への研究と教育活動における適切な接し方、障がいや心に不安を抱えた学生への配慮や適切な指導について学ぶことを目的に実施した。

② 到達目標

1)については、教員と学生間または教職員間のハラスメント防止、2)については、障がいのある学生への合理的配慮と対応、3)は、障がいを含めたメンタルケアを必要とする学生の理解と支援のために行った。

③ 活動内容

1)は、大学で起きているアカデミックハラスメント、パワーハラスメントの具体的な事例を中心に講義をしてもらった。大学という環境は、教員の方が学生より立場が上となることから、ハラスメントは生じやすい。大学教員から学生に対する暴言、暴力、強要、などの事例紹介があった。大学教員のハラスメントの特徴として、本人が自覚していない、厳しい指導がためになると思っている、大学の中にハラスメント的な風潮があるなどが挙げられる。学生は教員に対し、断ることや意見することが出来にくいため我慢することになりやすい。教員が学生の様子をよく見ながら適切な教育、指導が出来るように心掛ける必要があることを聞いた。

2)は障害者差別解消法、障害者雇用促進法の制定、施行までの歴史的背景と、それらの法律によって定められている内容、障がい学生への支援の具体例を聞いた。合理的配慮とは障がいのある人となない人にとって平等な機会を確保するために、サービス

を提供することで、施設、設備の変更や授業方法、試験方法の変更などがある。障がいのある学生は年々増加しており、私立学校の合理的配慮の提供は、努力義務になっている。大学生活における障がいのある学生への支援は多岐にわたり、コミュニケーション上の配慮や、学修内容を含めた情報を平等に得られるようにする配慮、学修に参加できない場合の配慮、試験および成績評価の公平性、心理・健康面への配慮などがある。これらの支援は大学入学前または入学後の申し出に応じて、必要な支援を本人や保護者、担当者間で相談することから始まる。障がいの症状や程度により対応がそれぞれ異なるため、支援の仕方は一様ではない。担任や授業担当教員、学科や学部など配慮を必要とする学生が所属している部署だけでは対応は困難で、大学全体で取り組む必要があり、私立大学には法的義務はないが無関係ではなく、差別は民事訴訟の対象になることを聞いた。

3)では、獨協大学で精神衛生相談員、国立精神・神経医療研究センターで精神的問題をもつ学生の症状を研究している塩澤先生にメンタルケアを必要とする学生への対処方法を聞いた。発達障がいなど精神的な障がいのある大学生が増加する中、授業や学修の支援をする大学が増え、履修や出席へのサポートをする大学もでてきている。大学では講義だけでなく、実習やインターンシップなどの活動を伴う学修があり、精神的な障がいは影響を及ぼすことが多い。コミュニケーションが困難だったり、指導者の指示が理解できない、レポートの作成が遅いなどで、本人が困るケースもあるが、指導者やまわりの学修者が困ることもある。実習内容やルールの詳細な説明を行い、それらの内容を明文化しておくことが良い。合理的配慮に関しては基本的に学生からの要請に基づいて進められるものであるが、学修環境が困難な状況になることは避ける必要があり、支援のニーズを自覚させる方策も構築する。これらの問題は担当教員などの対応だけでは解決できず、大学内に医師、看護師、カウンセラーなど専門の知識をもった人材を配置し、情報を共有しながら進めなければいけない旨の話を聞いた。

④ 評価

1)については、毎年同様の研修を行っている。全国の大学でハラスメントに関する不祥事はなくならず、しばしば報道されているのを目にする。より具体的なハラスメントの事例を聞き、教員と学生間でのハラスメントについて知った。特にアカデミックハラスメント、パワーハラスメントについて、教員の研究優先思考、より厳しく指導した方が学修効果がある、自分たちはこのように指導されたといった、先入観から生じているケースが多いように感じた。現在の学生がどのような教育環境で中学、高校を過ごし、大学にどのような学びを期待して通学しているか、学生の現状を理解することが重要であると思った。教職員が常にハラスメントについての意識をもてるよう、ハラスメント防止研修の継続を確認した。2)は、上に挙げた法律が施行されたことにより、障がいのある学生が入学してきたときの対応方法について聞くことが出来た。3)の研修とも関連し、基本的には支援を要請されたときの対応になるが、必要な支援は障がいの程度によって異なるため、具体的な支援策の情報収集が必要である。文部科学省や学生支援機構が公表している資料、他大学の事例が紹介され参考になった。この問題は担当教員や学部のレベルで対処できることではなく、大学としての取り組み方を構築する必要がある。

(2) 学生による授業評価アンケート

① 概要（目的を含む）

授業改善のために、農学部開講科目の担当教員（専任および非常勤講師）に協力を求め、講義科目と実験・実習科目の受講生 30 名以上の必修科目を中心に、授業評価アンケートを実施した。

② 到達目標

授業の状況把握により講義技法や情報伝達の仕方、教育設備の向上に活用し、授業改善を達成する。また、大学 HP 上に結果を公開することで受験生および関係者に対し、授業の健全性をアピールする。

③ 活動内容

春学期 52 科目、3,611 名、秋学期 45 科目、3,157 名に対して授業評価アンケートを実施した。

授業評価アンケートを集計後、結果をアンケートの原本とともに各教員に送付した。アンケートの振り返りを行うため、アンケート項目のチェック、改善内容について記載してもらった。さらに、大学 HP に学部、学科単位での集計結果を公開した。

④ 評価

アンケートは各学科の必修科目を中心に講義科目と実験・実習科目で実施した。領域の実験・実習科目は 30 名以下の場合もあった。全体的に授業外での学修時間(設問 2)が、講義科目において低かった。実験・実習科目ではレポート課題があるため、2～3 時間の学修時間が確保されていた。課題などを出さないと自主的に勉強をしない実態が見えた。教員の授業に対する取組(設問 13～15)は、科目によって低いものもあったが概ね良好であった。分野 III(設問 18～21)および総合評価の分野 IV(設問 22)はいくつかの科目で低いものもあったが、概ね評価が高く、全体として良好であった。講義科目の中で、必修科目は選択科目に比べて評価が低くなる。それは受講学生数が増えるほど、低くなる傾向を示した。学生の学力には差があり、大人数の授業では個々に対応するのが難しい実態を示している。全体として講義科目に比べ、実験・実習科目での総合評価が高かった。授業改善に向けた取組として、アンケート結果のチェックと改善内容の記述をしてもらった。

表. 平成 29 年度の授業評価アンケート集計結果 (6 学科のアンケート実施科目すべて)

(春学期-講義科目)

分野	設 問	平均値	強くそう思 う	ややそう 思う	どちらとも言 えない	あまりそう思 わない	全くそう思わ ない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 あなたはこの授業に意欲的に取り組みましたか	3.9	24.7%	47.8%	24.3%	2.9%	0.5%	1
	2 あなたがこの授業1回分の授業外に学習(予習・復習・課題)した時間はどれくらいですか	3.0	9.4%	19.7%	36.8%	26.6%	7.4%	4
	3 この授業のシラバスはあなたの受講に役立ちましたか	3.5	15.8%	31.4%	42.1%	8.0%	2.7%	6
	4 あなたはこの授業の目標を把握できていましたか	3.7	20.2%	40.2%	32.8%	5.1%	1.8%	6
II	5 授業はシラバスに沿って進められましたか	3.9	25.9%	38.6%	32.1%	2.4%	0.9%	7
	6 授業の進行速度は適切でしたか	3.7	25.1%	35.3%	26.5%	11.0%	2.1%	35
	2)早かった 1)遅かった					91.0%	9.0%	99
	7 授業内容の難易度は適切でしたか	3.6	20.9%	33.3%	28.9%	14.1%	2.8%	34
	2)難しかった 1)易しかった					98.1%	1.9%	143
	8 教員の声や話し方は明瞭で聞き取りやすかったか	3.9	32.7%	35.7%	25.2%	5.1%	1.3%	8
	9 教科書、プリント、参考文献などが授業の理解に役立ちましたか	4.0	34.7%	36.1%	24.0%	3.5%	1.7%	13
	10 映像視覚教材(パワーポイント、ビデオなど)や板書が授業の理解に効果的でしたか	4.0	35.1%	34.0%	24.3%	4.7%	1.9%	5
	11 授業内容は系統的によく整理され準備されていましたか	4.0	33.4%	35.7%	25.8%	3.9%	1.2%	18
	12 課題、レポートの量は授業内容を理解する上で適切であったか	3.8	27.6%	33.9%	32.4%	4.7%	1.5%	35
	2)多かった 1)少なかった					88.4%	11.6%	52
	13 教員は効果的に学生の参加(質問、発言、自主学習)を促しましたか	3.8	27.9%	35.0%	31.3%	4.0%	1.8%	5
	14 教員は受講生の反応を確かめながら授業を進めていましたか	3.9	29.8%	35.1%	28.5%	4.6%	1.9%	4
	15 教員は熱意を持って授業していましたか	4.1	39.0%	33.8%	24.1%	2.2%	1.0%	14
III	18 この授業の内容をよく理解できた	3.7	21.3%	40.3%	29.8%	6.5%	2.2%	6
	19 この授業の内容に興味・関心が持てた	3.9	29.9%	36.1%	27.0%	4.7%	2.2%	6
	20 自分で調べ、考える姿勢が身についた	3.8	24.3%	37.1%	31.7%	5.6%	1.3%	8
	21 この授業を通して新しい知識や考え方が習得できた	4.0	32.3%	39.1%	23.8%	3.5%	1.2%	10

総合評価		平均値	強くそう思 う	ややそう 思う	どちらとも言 えない	あまりそう思 わない	全くそう思わ ない	無効 回答数
IV	22 この授業を受講して有意義であった	4.0	33.5%	35.7%	25.7%	3.5%	1.6%	11

(春学期-実験・実習科目)

分野	設 問	平均値	強くそう思 う	ややそう 思う	どちらとも言 えない	あまりそう思 わない	全くそう思わ ない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 あなたはこの授業に意欲的に取り組みましたか	4.3	42.3%	45.9%	9.5%	1.6%	0.6%	0
	2 あなたがこの授業1回分の授業外に学習(予習・復習・課題)した時間はどれくらいですか	3.3	21.0%	21.4%	30.6%	23.2%	3.8%	1
	3 この授業のシラバスはあなたの受講に役立ちましたか	3.6	20.9%	33.2%	35.3%	6.9%	3.7%	4
	4 あなたはこの授業の目標を把握できていましたか	3.9	24.9%	48.2%	23.9%	2.5%	0.6%	3
II	5 授業はシラバスに沿って進められましたか	4.0	32.5%	40.1%	23.7%	2.7%	1.1%	4
	6 実験・実習内容の量は適切でしたか	3.8	27.0%	41.6%	20.9%	9.2%	1.3%	13
	2)多かった 1)少なかった					94.9%	5.1%	30
	7 実験・実習内容の難易度は適切でしたか	3.8	23.8%	40.2%	26.3%	8.8%	0.9%	16
	2)難しかった 1)易しかった					95.3%	4.7%	39
	8 実験や実習の方法や作業の説明は明瞭で分かりやすかったか	3.9	29.0%	43.5%	21.5%	4.9%	1.1%	5
	9 教科書、プリント、参考文献などが授業の理解に役立ちましたか	4.0	32.7%	40.6%	22.9%	2.4%	1.3%	1
	10 映像視覚教材(パワーポイントなど)や実験材料が授業の理解に効果的に活用されていましたか	3.9	30.1%	37.3%	26.3%	4.0%	2.3%	5
	11 実験・実習がスムーズに進められるよう、材料や器具が十分準備されていましたか	4.2	44.7%	36.4%	16.0%	1.6%	1.2%	4
	12 課題、レポートの量は授業内容を理解する上で適切であったか	3.7	24.6%	37.4%	26.0%	10.6%	1.5%	17
	2)多かった 1)少なかった					100.0%	0.0%	46
	13 教員は効果的に学生の参加(質問、発言、自主学習、実験・実習への取り組み)を促しましたか	4.1	36.9%	40.1%	20.4%	2.2%	0.4%	3
	14 教員は受講生の反応を確かめながら授業を進めていましたか	4.1	35.5%	43.7%	18.3%	1.8%	0.7%	4
	15 教員は熱意を持って授業していましたか	4.3	43.3%	40.1%	15.2%	1.3%	0.1%	4
III	18 この授業の内容をよく理解できた	4.0	26.4%	50.5%	20.0%	2.7%	0.5%	0
	19 この授業の内容に興味・関心が持てた	4.1	38.5%	41.0%	17.7%	2.1%	0.7%	1
	20 自分で調べ、考える姿勢が身についた	4.1	36.0%	42.8%	19.2%	1.6%	0.3%	2
	21 この授業を通して新しい知識や考え方が習得できた	4.3	43.9%	43.6%	11.7%	0.6%	0.2%	2

総合評価		平均値	強くそう思 う	ややそう 思う	どちらとも言 えない	あまりそう思 わない	全くそう思わ ない	無効 回答数
IV	22 この授業を受講して有意義であった	4.3	45.4%	38.4%	13.4%	2.1%	0.7%	3

(秋学期-講義科目)

分野	設 問	平均値	強くそう思 う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう思 わない	全くそう思 わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 あなたはこの授業に意欲的に取り組みましたか	3.9	22.8%	47.2%	26.0%	3.3%	0.7%	2
	2 あなたがこの授業1回分の授業外に学習(予習・復習・課題)した時間はどれくらいですか	2.9	7.3%	18.7%	37.0%	29.6%	7.4%	2
	3 この授業のシラバスはあなたの受講に役立ちましたか	3.5	15.6%	33.2%	42.5%	6.2%	2.3%	8
	4 あなたはこの授業の目標を把握できていましたか	3.8	19.6%	42.9%	32.4%	4.0%	1.2%	6
II	5 授業はシラバスに沿って進められましたか	3.8	23.6%	41.0%	32.5%	2.1%	0.8%	4
	6 授業の進行速度は適切でしたか	3.7	23.6%	39.1%	26.8%	8.8%	1.7%	31
	7 授業内容の難易度は適切でしたか	3.6	20.4%	35.5%	30.4%	11.4%	2.3%	36
	8 教員の声や話し方は明瞭で聞き取りやすかったか	4.0	34.4%	38.0%	22.2%	3.8%	1.6%	12
	9 教科書、プリント、参考文献などが授業の理解に役立ちましたか	4.1	37.3%	37.2%	20.9%	3.5%	1.1%	7
	10 映像視覚教材(パワーポイント、ビデオなど)や板書が授業の理解に効果的でしたか	4.0	36.9%	35.5%	22.7%	3.4%	1.6%	9
	11 授業内容は系統的によく整理され準備されていましたか	4.1	35.0%	39.5%	22.2%	2.4%	0.9%	7
	12 課題、レポートの量は授業内容を理解する上で適切であったか	3.9	27.9%	36.2%	31.9%	2.7%	1.3%	43
	13 教員は効果的に学生の参加(質問、発言、自主学習)を促しましたか	3.8	26.3%	38.2%	29.5%	4.1%	1.8%	8
	14 教員は受講生の反応を確かめながら授業を進めていましたか	3.9	30.4%	38.8%	25.9%	3.5%	1.4%	7
	15 教員は熱意を持って授業していましたか	4.1	38.1%	39.2%	19.9%	1.9%	1.0%	5
	18 この授業の内容をよく理解できた	3.8	21.8%	40.9%	30.0%	5.5%	1.8%	4
	19 この授業の内容に興味・関心が持てた	3.9	27.4%	39.9%	26.5%	4.4%	1.8%	4
	20 自分で調べ、考える姿勢が身についた	3.8	22.1%	39.0%	32.8%	4.6%	1.6%	5
	21 この授業を通して新しい知識や考え方が習得できた	4.0	28.9%	42.8%	24.5%	2.8%	1.1%	4
総合評価		平均値	強くそう思 う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう思 わない	全くそう思 わない	無効 回答数
IV	22 この授業を受講して有意義であった	4.0	32.2%	39.8%	24.0%	2.9%	1.2%	14

(秋学期-実験・実習科目)

分野	設 問	平均値	強くそう思 う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう思 わない	全くそう思 わない	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 あなたはこの授業に意欲的に取り組みましたか	4.3	46.0%	43.5%	9.4%	1.1%	0.0%	1
	2 あなたがこの授業1回分の授業外に学習(予習・復習・課題)した時間はどれくらいですか	3.5	26.2%	24.4%	29.7%	16.5%	3.2%	2
	3 この授業のシラバスはあなたの受講に役立ちましたか	3.7	22.2%	32.5%	36.2%	6.8%	2.2%	4
	4 あなたはこの授業の目標を把握できていましたか	4.1	32.5%	46.1%	19.7%	1.5%	0.2%	3
II	5 授業はシラバスに沿って進められましたか	4.1	39.3%	38.8%	19.8%	1.4%	0.7%	3
	6 実験・実習内容の量は適切でしたか	4.0	30.6%	43.4%	19.2%	6.3%	0.5%	6
	7 実験・実習内容の難易度は適切でしたか	4.0	29.9%	43.1%	20.2%	6.5%	0.4%	11
	8 実験や実習の方法や作業の説明は明瞭で分かりやすかったか	4.1	35.6%	43.5%	18.1%	2.6%	0.1%	4
	9 教科書、プリント、参考文献などが授業の理解に役立ちましたか	4.2	41.3%	40.1%	15.8%	2.6%	0.1%	2
	10 映像視覚教材(パワーポイントなど)や実験材料が授業の理解に効果的に活用されていましたか	4.1	36.0%	40.3%	20.7%	2.6%	0.4%	2
	11 実験・実習がスムーズに進められるよう、材料や器具が十分準備されていましたか	4.3	49.6%	35.8%	12.5%	2.0%	0.1%	3
	12 課題、レポートの量は授業内容を理解する上で適切であったか	4.0	32.5%	40.9%	19.7%	6.2%	0.7%	6
	13 教員は効果的に学生の参加(質問、発言、自主学習、実験・実習への取り組み)を促しましたか	4.2	41.9%	38.8%	18.1%	1.1%	0.1%	0
	14 教員は受講生の反応を確かめながら授業を進めていましたか	4.1	38.5%	40.0%	19.3%	1.7%	0.5%	0
	15 教員は熱意を持って授業していましたか	4.3	49.1%	36.6%	13.5%	0.5%	0.2%	2
	18 この授業の内容をよく理解できた	4.1	34.5%	48.0%	15.3%	2.1%	0.1%	1
	19 この授業の内容に興味・関心が持てた	4.2	41.5%	40.4%	15.1%	2.6%	0.4%	1
	20 自分で調べ、考える姿勢が身についた	4.3	44.4%	39.1%	15.0%	1.6%	0.0%	1
	21 この授業を通して新しい知識や考え方が習得できた	4.4	48.5%	41.0%	9.9%	0.6%	0.0%	1
総合評価		平均値	強くそう思 う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう思 わない	全くそう思 わない	無効 回答数
IV	22 この授業を受講して有意義であった	4.4	52.0%	35.4%	11.3%	1.2%	0.1%	2

(3) 教職員を対象とした公開授業

① 概要（目的を含む）

教員の講義力・教育力向上を目指し、授業参観を実施した。今年度は秋学期の8科目を対象とした。授業参観の後、報告書を作成してもらった。

② 到達目標

公開授業の実施意義を各教員が理解するとともに、教授方法などを参考とする。授業内容や授業規模に対する設備施設活用を考える。

③ 活動内容

教員相互の授業参観を実施すべく、全学の専任および非常勤の教員に対して授業を公開した。

④ 評価

授業参観への参加数は、生産農学科2名、環境農学科2名であった。参観した教員数は極めて少数であった。教員相互の啓蒙的意識を高めることが必要であり、実施に際しての周知、実施方法の検討が求められる。

4 昨年度（平成28年度）に提案された予定・課題の達成度について

農学部では今年度「ハラスメント防止研修会」「障がい者に対する合理的配慮についての研修会」「メンタルケアを必要とする学生のための研修会」を実施した。参加率は全ての研修会で約80%であった。参加率をさらに向上させる必要がある。ハラスメント防止研修は毎年実施している。年々ハラスメントに関する意識は向上しているように感じる。今後もハラスメント防止研修会を継続して行うことが確認された。障がい者に対する合理的配慮やメンタルケアを必要とする学生のための研修会は、発達障がいや精神障がいの学生が増えているという現状に対応するために行った。対応の仕方や注意点について理解できたが、授業担当教員や学部での対応だけでは困難で、大学全体として専門スタッフの配置や情報伝達経路、相談部署の構築が必要であると思われた。学生センター、健康院、教学部、入試広報部との連携を進めたい。その他、学内または学外の研修会参加数は多くない。学部さらには大学全体のFD活動推進のためにも研修会への参加を促す必要がある。

学生による授業評価アンケートは、春学期および秋学期の学期終了時に実施した。学生の授業外での学修時間が、講義科目において低かった。また受講学生数の違いによってアンケート評価にばらつきがあった。総合評価は全体的に良好であった。今年度から授業評価アンケートの集計結果をチェックし、授業改善について記述してもらった。学生の書いた記述欄の内容も含めて、アンケート結果を見直し、授業改善に向けた取組が進められるかが今後の課題となる。

今年度、授業参観への参加数は極めて低かった。授業改善の一つの方法として、授業参観への参加は教授法を学ぶ良い機会と考える。さらに教員間の情報交換の場としても機能するため、参加率を上げて組織的な授業改善が望まれる。

農学部改組の1年目で旧カリキュラムとの同時進行で毎学期行っている授業評価アンケートを基に、授業改善に対する学部としての取組を再検討していく必要がある。

5 今後（平成 30 年度以降）の予定・課題について

- ・ 各種研修会（学内、学外）への参加の啓蒙的活動
- ・ 基礎学力不足の学生の把握と分析
- ・ 入学後の学生の適切な指導対応
- ・ 新カリキュラムの適切な運営と点検
- ・ 授業評価アンケートの授業への還元方法の検討
- ・ 教員相互の授業参観の組織的な取組と授業改善
- ・ 大学院 FD 委員会との連携強化

§ 工学部

1 FD 活動への取組理念・目標

工学部全教員が Tamagawa Vision 2020 を共有し、「全人教育の下、人間力を備えたモノづくりの実践的技術者を育成する」との工学部の理念・目標に向けて、教育内容・教育環境の向上をはかることを従来通り継続している。

昨年度まで報告しているように、平成 25 年度入学生に適用されたカリキュラム改定では、入学生の学力不足対応のため、1 年次には専門科目を入れずに基礎教育を 3 学科共通で用意した。同時に平成 25 年度入学生から 16 単位キャップ制および GPA による警告制度・卒業要件が適用された。さらに、平成 26 年度入学生に適用されたカリキュラムでは開講科目数が削減された。また、平成 27 年度にはエンジニアリングデザイン学科が新設され学部 4 学科体制となり、平成 29 年度には情報通信工学科が新設され学部 5 学科体制（一部教員は学科併任）となった。

昨年度まで報告しているように、学科の新設やそれに伴うカリキュラム数の増加、また各年度に更新されたカリキュラム更新という複雑な状況下において、工学部全教員が、学生の学修の現状を適切に理解すること、例えば 16 単位キャップ制および GPA 警告制度における学生の学修状況の分析、その結果と課題の把握と共有、次期へ向けてより効果的で充実した指導の在り方の議論・検討、等は工学部の理念・目標の検討・具現化のために非常に重要である。これらの取組は工学部の過去と現在と未来において最重要課題であるとともに FD 活動の目標であり、主たる FD 活動である「工学部 FD 研修会」、「授業評価検討会」、「授業評価アンケート」および各学科で常に行われている種々の会議体等において恒常的になされるものである。

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

昨年度まで報告しているように、工学部 FD 活動の多くが ISO9001 教育クオリティマネジメントシステムの運用・継続によるものである。平成 26 年度からは、機械情報システム学科、ソフトウェアサイエンス学科、マネジメントサイエンス学科の工学部 3 学科で ISO9001 運用を実施することとなった。また、平成 27 年度にはエンジニアリングデザイン学科が新設されたことにより、ISO9001 運用は学部 4 学科へと拡張され、平成 28 年 10 月に全学科が ISO9001 認証継続を受けた。さらに、平成 29 年度には情報通信工学科が新設されたことにより、ISO9001 運用は学部 5 学科へと拡張され、平成 29 年 10 月に全学科が ISO9001 認証継続を受けた。このように、平成 29 年度においても、ISO9001 教育クオリティマネジメントシステムは運用・継続中である。

以上のように、工学部では全学科において ISO9001 運用の中で FD 活動の多くが実施・継続されている。そこでは、学生による授業評価アンケート、教員による授業改善計画・実行・点検、授業参観、工学部 FD 研修会の実施などが、各学科会、各学科授業評価検討会、教務担当者会、工学部授業評価検討会、主任会等の組織構成によって相互に確認・補完し、運営されている。ISO9001 運用にかかる組織構成と役割は、工学部発行「教育クオリティマニュアル」において記述されているが、そこに掲載されている組織図は昨年度も本報告書で報告しているため、今年度は割愛する。

現状では、毎年のカリキュラム改定、16 単位キャップ制・GPA 警告制度への移行・新

学科学生動向等、教育システム上見逃せない課題が多いため、工学部全専任教員参加による工学部 FD 研修会の年 2 回開催を平成 24 年度以来継続しており、このことが工学部の最重要の FD 活動となっている。

3 平成 29 年度の活動内容

平成 29 年度工学部 FD 活動計画にそって、その詳細について以下のように記述する。

(3-1) 工学部 FD 研修会

① 概要

工学部最重要 FD 活動の一つである。春学期（第 1 回）・秋学期（第 2 回）にそれぞれ開催された工学部 FD 研修会のまとめ冊子（工学部長・各学科主任・教務主任・学生主任・工学研究科長・FD 委員において保管）の目次を図 1 および図 2 に示す。テーマと目的は図 1 および図 2 に記載のとおりである。

② 到達目標

工学部教員団が、全学科の学生成績および学生への対応方針を共有し、工学部各学科の今後の組織的展開と、学生への教科指導に効果的に反映できるようになること、教員の自己省察に資する内容となること、が到達目標である。

③ 活動内容

報告内容はまとめ冊子（工学部長・各学科主任・教務主任・学生主任・工学研究科長・FD 委員において保管）を参照されたい。ここでは各報告の概要について簡単に記述する。

第 1 回

1. 本年度春学期学修状況分析結果報告（GPA・単位取得率・経年比較 等）

- (1) 機械情報システム学科：教室内の座る位置と成績の関係
- (2) 情報通信工学科：春学期 16 単位制下の学修状況
- (3) ソフトウェアサイエンス学科：春学期入学生の分析と警告者の動向
- (4) マネジメントサイエンス学科：入学者と警告者の状況～出身高校の偏差値から見て～
- (5) エンジニアリングデザイン学科：2017 年度入学生等春学期成績
- (6) 数学研究室：新入生数学確認テストの動向と事例報告
- (7) 物理研究室：2017 年度・春学期 物理学学力確認テストの結果
- (8) 学部全体の状況：教務主任：春学期学修状況分析結果報告

2. 授業評価アンケート結果：授業評価アンケートの全体結果報告（後述、図 4）

第 2 回

1. 本年度秋学期学修状況分析結果報告（GPA・単位取得率・経年比較 等）

- (1) 機械情報システム学科/情報通信工学科：2017 年度秋学期 16 単位制下の学修状況、成績比較
- (2) ソフトウェアサイエンス学科：2017 年度秋学期入学生の分析と警告者の動向、GPA 比較、警告者数推移
- (3) マネジメントサイエンス学科：平成 24～29 年度入学生の初期試験と一年次春・秋・累積 GPA
- (4) エンジニアリングデザイン学科：2017 年度入学生等秋学期成績、GPA 比較

- (5) 学部全体の状況：教務主任：学部全体の状況と今後、「警告」の条件の変更の影響、2 セメスター終了時の累積 GPA、2017 年度入学生春セメで警告を受けた学生の動向、累積 GPA の低い学生の履修指導

2. 最近の専門科目受講者動向

- (6) 機械情報システム学科/情報通信工学科：ラズベリーパイマウス（ロボット）を用いたチャンピオンシップ、内容、学生の様子、今後の課題、等
- (7) ソフトウェアサイエンス学科：「工学基礎 I」の授業について、内容、講義の流れ、講義上の留意点、振り返り、今後の課題、等
- (8) マネジメントサイエンス学科：「キャリアデザイン」の授業について、内容、発見事項、単位未修得者の動向、等
- (9) エンジニアリングデザイン学科：「CAD」受講者の理解度評価、授業方法の検討、内容、学生の理解度、授業方法の検討、今後の課題、等

3. 授業評価アンケート結果：授業評価アンケートの全体結果報告（後述、図 5）

④ 評価

昨年度までの報告と同様に、各学科の総合的学修状況分析結果、専門科目学修状況分析結果、およびそれらの今後の対応方針を共有し、工学部のあり方や指導に効果的に反映できたと考えられる。工学部では FD 研修会終了後に「発表資料＋発表者による解説」から成る記録冊子を作成しているが、詳細なデータは当該冊子に記載されており、必要に応じて学部内にて主任を経由して閲覧可能となっている。

教務主任による総括では、以下のことが報告された。

新しい警告制度の下で春セメスターでの警告受理者はほぼ倍増したが、秋セメスターでの受理者が減ったため、1 年修了時の警告受理者の延べ人数は両年でほぼ同じであった。また、両年の学生の特性として、春、秋の当該学期 GPA、累積 GPA および春、秋修得単位数、累積修得単位数を比較し、これらのデータからは両年度入学生に大きな差がないことがわかる。

2017 年度入学生のうち 1 セメスターで警告を受理した学生のうち 66.6%が 2 セメスターで 2 回目の警告を受けている。また、2 回目の警告を受けていない学生の 1 セメスター終了時の GPA は 1.4 以上である。

2017 年度入学生がどれくらいの割合で 3 セメスターにて警告を受ける可能性があるかを、2016 年度入学生の 2 セメスター終了時と 3 セメスター終了時の累積 GPA から類推したところ、2017 年度入学生のうち全体の 1 割弱の学生が 3 セメスターで 3 回目の警告を受けることが予測される。

2 セメスターまでに履修した F 評価科目を再履修することが GPA の改善に有効であり、履修指導においてこの特徴を利用することが求められる。

これらの分析により、警告を受ける学生を減少させ、ひいては退学者を減少させ、学生が学修に専念できる環境作りが重要であると考えられる。

教授会メンバーはほぼ全員が出席しており、警告を受けた学生への指導対応・対策が提示され、認識・共有できた。

⑤ 予算措置

工学部 FD 予算に計上し、項目は「資料印刷費」であった。

2017 年度（平成 29 年度）第 1 回 工学部 FD 研修会

【解説／まとめ付】

日時：平成 29 年 9 月 21 日（木）9 時 00 分～9 時 55 分

場所：8 号館 第 2 会議室

テーマ：GPA・単位取得率による成績動向の把握による教員の指導方針共有

目的：① 1 年生においては GPA・単位取得率による成績の過去との比較

② 2 年生以上においては主たる専門科目の成績動向の過去との比較

③ 以上により、教員団が工学部生の成績に対し従来との比較を鑑みつつ、
現状に関する共通の認識を持って教科指導の充実をはかること

内容：① 学習状況分析結果報告（学部・各学科・数学/物理学・各学科専門科目）

② 授業評価アンケート結果報告

到達目標：全学科の学生成績および学生への対応方針を共有し、工学部各学科の今後の組織的展開と、学生への教科指導に効果的に反映できるようになること。

プログラム

1. 本年度春学期学習状況分析結果報告

- | | | |
|------------------------|------|-------|
| （1）機械情報システム学科 | 学科主任 | 岡田 浩之 |
| | 教務担当 | 大森 隆司 |
| （2）情報通信工学科 | 教務担当 | 宮田 成紀 |
| （3）ソフトウェアサイエンス学科 | 教務担当 | 大竹 敢 |
| （4）マネジメントサイエンス学科 | 学科主任 | 菅原 昭博 |
| （5）エンジニアリングデザイン学科 | 教務担当 | 黒田 潔 |
| （6）数学系 マネジメントサイエンス学科 | | 三木 秀夫 |
| （7）物理学系 エンジニアリングデザイン学科 | | 水野 貴敏 |
| （8）学部全体の状況 | 教務主任 | 山崎 浩一 |

2. 授業評価アンケートの結果から FD 委員 黒田 潔

以上

図 1 春学期開催工学部 FD 研修会プログラム

2017 年度（平成 29 年度）第 2 回 工学部 FD 研修会

【解説／まとめ付】

日時：平成 30 年 3 月 22 日（木）13 時 00 分～14 時 00 分

場所：8 号館 第 2 会議室

テーマ：GPA・単位取得率による成績動向の把握による教員の指導方針共有

目的：① 1 年生においては GPA・単位取得率による成績の過去との比較

② 2 年生以上においては主たる専門科目の成績動向の過去との比較

③ 以上により、教員団が工学部生の成績に対し従来との比較を鑑みつつ、

現状に関する共通の認識を持って教科指導の充実をはかること

内容：① 学習状況分析結果報告（学部・各学科・数学/物理学・各学科専門科目）

② 授業評価アンケート結果報告

到達目標：全学科の学生成績および学生への対応方針を共有し、工学部各学科の今後の組織的展開と、学生への教科指導に効果的に反映できるようになること。

プログラム

1. 本年度秋学期学習状況分析結果報告

（1）機械情報システム学科/情報通信工学科 教務担当 大森 隆司

（2）ソフトウェアサイエンス学科 教務担当 大竹 敢

（3）マネジメントサイエンス学科 教務担当 佐藤 健治

（4）エンジニアリングデザイン学科 教務担当 黒田 潔

（5）学部全体の状況 教務主任 山崎 浩一

2. 最近の専門科目受講者動向

（6）機械情報システム学科/情報通信工学科 「チャンピオンシップ」 森 文彦

（7）ソフトウェアサイエンス学科 「工学基礎Ⅰ」 樋田 栄揮

（8）マネジメントサイエンス学科 「キャリアデザイン」 根上 明

（9）エンジニアリングデザイン学科 「CAD」 齊藤 純

3. 授業評価アンケートの結果から

FD 委員 黒田 潔

以上

図 2 秋学期開催工学部 FD 研修会プログラム

(3-2) 社会発信手法研修会

① 概要（目的を含む）

研究・教育を広報に繋げること、高校生の志願者分析と広報に関して、工学系私大における優秀人材確保（アドミッション）の戦略を共有することが目的である。

② 到達目標

上記内容に関し、本学工学部の今後のあり方について理解を深めることが到達目標である。

③ 活動内容

平成 29 年 10 月 26 日（木）17:00～17:40 に PR クエスト社株式会社 菊池 泰功 氏により講演題目「選ばれる大学・大学院になるための広報活動」として実施された。教員 11 名、入試広報等の職員 5 名が参加した。

④ 評価

評価に関する定量的なデータは存在しないが、工学系私大の今後の在り方に関する意識が向上したと考えられる。

⑤ 予算措置

工学部 FD 予算を計上し、項目は「講師講演料・講師旅費等」であった。

(3-3) 知的財産権 FD 研修会

① 概要（目的を含む）

山口大学との連携による産業財産権、著作権を含む知的財産取扱ルール等の意識の向上が目的である。

② 到達目標

上記内容に関し、知的財産創造性の重要性の理解と他権利抵触の回避の認識を持つことが到達目標である。

③ 活動内容

平成 29 年 7 月 24 日（月）17:00～18:30 に山口大学 大学研究推進機構知的財産センター副センター長・教授 木村 友久 氏により実施された。教員 20 名、学生 7 名が参加した。

④ 評価

評価に関する定量的なデータは存在しないが、知的財産取扱いルールの知識、著作権等の取扱、産業財産権の重要性、等に関する意識が向上したと考えられる。

⑤ 予算措置

工学部 FD 予算を計上したが、実際の使用はない。

(3-4) 授業評価検討会および工学部授業評価検討会

① 概要（目的を含む）

各授業の授業評価アンケート結果と、教員が授業ごとに作成している「授業実施チェックシート」（ISO9001 運用上の教育クオリティ記録・様式 No.7301-05）を基に、学科ごとに「授業評価検討会」を実施することが ISO9001 運用上定められている。ここでは主に授業上の不具合を抽出し、次期への課題を考察する。

セメスター末の教務担当者会では、学科ごとの「授業評価検討会」においてなされ

た報告を各学科教務担当が持ち寄り、学部として「授業評価総合検討会」を実施することが ISO9001 運用上定められている。「授業評価総合検討会」は「工学部授業評価検討会」と同義である。ここでは各学科からの報告を基に、各学科教務担当が総合的に検討を加え、その結果を学部としての次期への授業改善の実施施策として各学科へフィードバックされ、各学科における改善の実施に寄与させる。

② 到達目標

授業評価と授業実施チェックシートを基にした授業改善の継続的な検討が目標である。学科の人材育成目標にかかる授業カリキュラムの継続的な検討へと常に移行できる体制の維持も二つ目の目標である。

③ 活動内容

工学部授業評価検討会実施日：春学期 平成 29 年 9 月 14 日

秋学期 平成 30 年 3 月 22 日

④ 評価

学生による授業評価アンケート・教員による授業チェックシート・ISO9001 運用上の科目別教育クオリティ目標一覧表 評価（様式 No.7301-04）・各学科による授業評価検討会によって、授業改善サイクルが定着している。

授業評価検討会は、工学部授業評価検討会の数日前の各学科会時に各学科で開催され、授業評価アンケート・授業チェックシート・ISO9001 運用上の科目別教育クオリティ目標一覧表 評価を用いて議論された。

工学部授業評価検討会では、各学科で議論された内容が ISO9001 運用上の科目別教育クオリティ目標一覧表 評価（様式 No.7301-04）・ISO9001 運用上の授業評価検討会議事録（様式 No.7302-05）を用いて説明され、その内容を構成員である教務主任各学科、教務担当および FD 担当が議した。議論された内容については、会議事録 図 3 を参照されたい。ここでの検討項目は、再び各学科へフィードバックされ、次期の授業展開へ資することとなる。（秋学期の議事録は本報告書の締め切りに間に合わず、今回は割愛する。）

⑤ 予算措置

工学部 FD 予算を計上したが、実際の使用はない。

(3-5) 研究授業（参観授業）

① 概要（目的を含む）

昨年度報告と同等である。春学期と秋学期に各学科より 1 名ずつの教員が各自の担当科目に関して参観授業を実施する。担当授業は所属学科専門科目に限る必要はなく、全学 US 科目・他学科科目でも問題としない。春学期は工学部教員に公開し、秋学期は全学教職員に公開している。各学科教員数は 8～9 名であるため、4～5 年で一巡する。本項目の実施目的は、学生による授業評価アンケートとは別の視点で、参観者（各学科教員または全学教職員）からの評価を授業改善につなげることである。

② 到達目標

参観者（工学部教員または全学教職員）からの評価を基にした授業改善の継続的な検討が目標である。

平成 29 年度春semester工学部授業評価検討会議事録

日時：平成 29 年 9 月 14 日，16:00～16:45

場所：大学 8 号館第二会議室

出席者：，山崎（教務主任），宮田（情報通信工学科教務担当），大竹（ソフトウェアサイエンス学科教務担当），佐藤（マネジメントサイエンス学科教務担当），黒田（エンジニアリングデザイン学科教務担当兼工学部 FD 担当）

議事録作成：山崎

資料：2017 年度春学期 授業評価検討会議事録（IT，IMS，SS，MS，ED）

2017 年度春学期 科目別教育クオリティ目標一覧表評価（SS）

2017 年度春学期 授業評価集計結果（IT，IMS，SS，MS，ED）

※ IT：情報通信工学科，IMS：機械情報システム学科，

SS：ソフトウェアサイエンス学科，MS：マネジメントサイエンス学科，

ED：エンジニアリングデザイン学科

各科で実施した授業評価検討会における検討結果に基づき，本semesterにおける各科の取組みについて報告が行われた（詳細については各科の「授業評価検討会議事録」参照）。全学科，不満足授業は無かった。

各科からの報告内容を以下に記す。

- ・IT，IMS：実験系科目で F を取る学生が多かった。その主な原因はレポートを提出することができないことである。
- ・SS：3 クラス開講のプログラミング I では，2 クラスで B 評価以上の学生が 60%を下回った。この科目は入学時に実施する数学プレースメントテストの結果をもとにレベル別クラスとしており，そのうちの下位の 2 クラスの成績が悪かった。学科の基幹科目のため，今後も厳しく取り組む。なお，3 クラス全体では B 以上の学生は 61%であった。また，学生によるプログラミングチューターを導入した結果，期末試験は昨年に比べて得点率が 9%程度改善した。
- ・MS：学科の報告会ではすべての科目について担当教員が報告した。直井教授担当の環境マネジメントシステムで授業アンケートを実施していないが，本科目は冬学期開講であるため 7 月のアンケート実施が困難であると FD 担当が判断しアンケート実施科目から外したためである。
- ・ED：学科の検討会では教員から意見は無かった。今期，初めて開講された 3 年生科目では特に問題は無かった。確率統計学 I で B 以上の成績を取る学生は 38%と低いが，これは科目担当者が変わっても同様の状況である。数学入門の単位取得率も低いが，全学 US の数学入門よりは良い状況である。

以上

図 3 春学期工学部授業評価検討会議事録

③ 活動内容

今年度の実施授業について表 1 に示す。

また、参観者が工学部教員である場合、「工学部教員授業参観者チェックシート」（昨年度 FD 活動報告書に提示）を参観しつつ記入した。さらにその評価を受けて、「研究授業（科目担当者票）」（昨年度 FD 活動報告書に提示）を参観授業実施者が記入し FD 委員に提出する。「工学部教員授業参観者チェックシート」は授業担当者が保管し、「研究授業（科目担当者票）」は授業担当者と FD 委員が保管している。

④ 評価

参観授業実施者が記入し FD 委員に提出する「研究授業(科目担当者票)」によれば、それぞれの教員が実施する授業に対してさまざまな評価を受けていることがわかる。参観授業実施者が記述した「今後の対処計画」について表 2 に示す。1 年あたり 8 人がこれらの授業改善を実施すれば、数年で授業の質が大きく向上すると考えられる。

⑤ 予算措置

工学部 FD 予算を計上したが、実際の使用はない。

表 1 平成 29 年度工学部研究授業(参観授業)実施概要

	学科	対象科目	担当教員	開催日時限	教室
春 学 期	機械情報システム学科 情報通信工学科	直流回路	大森 隆司	6 月 2 日(金) 1・2 時限	⑧号館 423
	ソフトウェアサイエンス学科	情報セキュリティ	山崎 浩一	5 月 8 日(月) 7・8 時限	⑧号館 323
	マネジメントサイエンス学科	微分方程式 I	新里 隆	6 月 9 日(金) 5・6 時限	⑧号館 326
	エンジニアリングデザイン学科	物理学 II	水野 貴敏	6 月 6 日(火) 1・2 時限	⑧号館 421/218
	機械情報システム学科 情報通信工学科	プログラミング I	森 文彦	11 月 9 日(木) 5・6 時限	⑧号館 322
秋 学 期	ソフトウェアサイエンス学科	コンピュータグラフィックス	塩澤 秀和	11 月 30 日(木) 7・8 時限	⑧号館 323
	マネジメントサイエンス学科	代数学 I	菅原 昭彦	10 月 13 日(金) 1・2 時限	⑧号館 422
	エンジニアリングデザイン学科	Science & Technology Visit	春日 幸生	10 月 23 日(月) 7・8 時限	⑧号館 220

(3-6) ISO9001 教育クオリティマネジメントシステム運用・継続

① 概要(目的を含む)

平成 29 年度工学部 FD 活動計画に記載がないが、予算使用により簡単に記述する。既述のように、ISO9001 による教育クオリティマネジメントシステム運用・継続が目的である。

② 到達目標

PDCA サイクルが循環し、定例の外部審査により評価を受けることが目標である。

③ 活動内容

今年度は平成 29 年 10 月 17～18 日に外部審査が実施され、認証継続を受けた。

④ 評価

評価に関する定量的データは存在しないが、外部審査による認証継続により確実に PDCA サイクルが循環していることが評価された。

表 2 参観授業実施者が記述した今後の対処計画

透視投影変換の（z 座標の）数式の根拠については、文献等で改めて調べなおしたので授業資料に反映する。
授業に集中しない学生については、巡回などで対応する。
現方式を継続する
ループリックの充実化による成績評価
特に重要な部分を説明するときには、しっかり全員の作業を止めて、集中させてから話を始める。
プログラムを読む練習問題で、1 行ずつプログラムの動きを説明してもらう時間を取る。
演習に関しては問題集での自学で補う
さらなる授業の工夫が必要であろう。
事前学修しないと GW に参加できないが、口頭で促しても効果はなく、今期から事前学修内容に関するテストを課しているが目立った効果はない。理解度・達成度にはかなりのばらつきがあり、元来の学力差を埋めるより、広げている可能性がある。事前学修でノートを取らせる方法を模索している。
授業の配布資料の中に、インタラクティブにやり取りができる材料を仕込んでおく。
配布資料を見直し、学生が混乱しそうな箇所を修正するとともに、体裁を整える。
事前に資料を準備するよう、学生への指導を徹底する。

⑤ 予算措置

工学部 FD 予算を計上したが、実際の使用はない。

⑥ 備考

ISO9001 教育クオリティマネジメントシステム運用は平成 15 年度より継続されてきて、既に 15 年目となる。現在、学部所属教員によって、日本規格協会による認証を継続するか否かの議論がなされている。15 年の重みにより、教員の FD 活動はほぼシステム化されている。今後は、重要と思われるマネジメントシステムを残した上で継続し、その評価を別の第 3 者評価に託するという案が議論されている。

(3-7) ティーチング・ポートフォリオ (TP) ワークショップへの参加

① 概要（目的を含む）

平成 29 年度工学部 FD 活動計画に記載がないが、次年度以降継続される予定なので記述する。ティーチング・ポートフォリオを作成し、授業改善における自己省察を行うことが目的である。

② 到達目標

ティーチング・ポートフォリオのメンティーとしての記述とメンターとしての支援ができるようになることが目標である。

③ 活動内容

今年度は平成 29 年 11～12 月に第 3 回ワークショップが開催され、情報通信工学科 森 文彦 准教授とソフトウェアサイエンス学科 佐藤 雅俊 助教がメンティーとして、また FD 委員（黒田）がメンターとして参加し、ティーチング・ポートフォリオを作

成・支援した。

④ 評価

評価に関する定量的データは存在しないが、工学部全学科の少なくとも1名の教員が作成を終え、メンターとしての資格を得た。今後は、4人のメンターが残る教員の作成アドバイスを実施していく。

⑤ 予算措置

工学部 FD 予算を計上していない。

(3-8) 学生による授業評価アンケート

① 概要（目的を含む）

昨年度まで報告しているように、工学部では授業内容・方法・スキルの向上等の授業改善を具体化することを目的として、平成12年度秋学期より継続して学生による「授業評価アンケート」を春学期と秋学期の定期試験前の授業において実施している。

② 到達目標

工学部各学科開講科目の全科目について担当教員の専任・非常勤の区別なく実施し、継続的な授業改善およびカリキュラム改善の検討に役立てる。学科および学部の授業評価検討会および工学部授業評価検討会における評価検討を通じた授業改善、カリキュラムの変更・改定に役立てる。

③ 活動内容

昨年度まで報告しているように、平成24年度以来、工学部学生のみを対象として設置されたUS科目授業についても授業評価アンケート実施対象として組み入れており、平成29年度についても例年通りの方法で春学期と秋学期の定期試験前の授業において実施した。授業評価アンケート用紙は昨年度報告と同一であり、本報告では割愛する。

集計結果は科目ごとのデータおよび全体集計データとともに専任・非常勤の区別なく科目担当者に届けられた。集計結果は、科目担当者が作成した「授業実施チェックシート」と併せて、科目ごとおよび学科ごとに次期の授業に反映されるよう、PDCAを実行する努力を継続中である。学外向けには総括した内容を大学HPで公開し、学内向けには各科目の詳細な内容を【玉川大学 工学部「学生による授業評価」報告書34】および【玉川大学 工学部「学生による授業評価」報告書35】として大学8号館玄関ロビー等で閲覧公開している。また、ISO9001運用上その適切な保管が定められており、ISO9001認証時には、認証担当者（学外）の閲覧に供されている。

春学期の実施は159科目で、参加学生数は延べ人数で6,403名であった。秋学期の実施は147科目で、参加学生数は延べ人数5,157名であった。実際には提出が間に合わなかった科目や、履修取り消しや欠席した学生が含まれているため、若干数この値より低い。

④ 評価

過去3年間の授業評価アンケートの参加状況について、春学期については図4、秋学期については図5においてその変化を観ることができる。アンケート用紙の学生からのコメント欄は集計をしていないが、集計後、用紙そのものを科目担当者に返却し、コメント欄を含めて授業改善に役立ててもらっている。アンケート結果により授業の

質は継続的に担保されていると考えられるが、向上可能な部分は各科目担当教員の努力に期待し、今後のより一層の発展が望まれる。

- ・工学部 FD 研修会記録冊子「発表資料＋発表者による解説」に記載された春学期授業評価アンケート（図 4）の主な評価は以下のとおりである。

項目「1.」より、各学科専任教員は全員が参加している。非常勤講師に関しては、例年通り 8 割の参加率であり、十分な数値と考えてもよいと思われる。

項目「2. 3. 4.」より、各質問項目の総合平均値も例年と大きな変化はないが、今年度は全科目が評価 5 点中 3 点以上となった。

項目「5.」より、質問項目ごとの変化に関しても大きな変化はない。卒研設備の満足度はすべての項目の中で常に評価が高く、卒研の重要性が伺える。

項目「6.」より、前回は評価の最小値が過去 3 年で最低である 2.45 点を示したが、今回は過去 6 回のアンケートで初めて 3 点を超えた。授業の質の向上が考えられる。

項目「7.」より、参加科目数について過去 3 年で大きな変化はない。

- ・工学部 FD 研修会記録冊子「発表資料＋発表者による解説」に記載された秋学期授業評価アンケート（図 5）の評価は以下のとおりである。

項目「1.」より、各学科専任教員は全員が参加している。非常勤講師に関しては、例年を大きく上回り 96%の参加率である。

項目「2. 3. 4.」より、各質問項目の総合平均値も例年と大きな変化はないが、今年度は一部科目が評価 5 点中 3 点以下となった。少々問題である。

項目「5.」より、質問項目ごとの変化に関しても大きな変化はない。

項目「6.」より、前回は評価の最小値が過去 3 年で最高である 3.03 点を示したが、今回は 2.75 点であり、例年通りにもどった。再度向上させる必要がある。

項目「7.」より、参加科目数について過去 3 年で大きな変化はない。

⑤ 予算措置

工学部 FD 予算を計上し、項目は「マークシート印刷費・分析費・資料印刷費等」であった。

2017年度（平成29年度）春学期 学生による授業評価アンケート 集計結果

工学部授業評価検討会

1. 参加状況

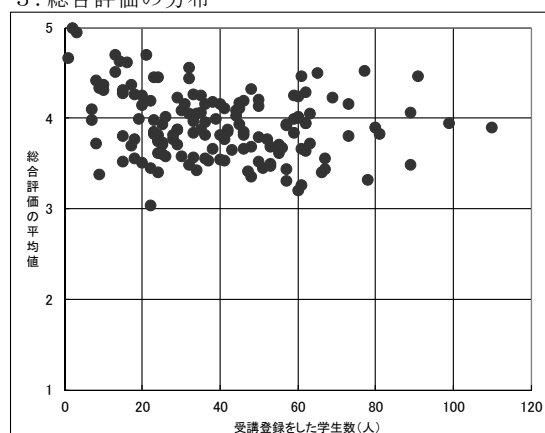
教員所属学科		参加科目数						参加教員数																	
		H26年秋	H27年春	H27年秋	H28年春	H28年秋	H29年春	H26年秋	H27年春	H27年秋	H28年春	H28年秋	H29年春												
情報通信工学科		-	-	-	-	-	-	-	-	24	92%	-	-	-	-	-	-	-	-	9	100%				
機械情報システム学科		34	97%	31	91%	31	100%	25	96%	22	100%	3	100%	12	100%	11	100%	11	100%	9	100%	8	100%	1	100%
ソフトウェアサイエンス学科		35	100%	35	97%	30	97%	35	100%	23	96%	25	100%	9	100%	10	100%	10	100%	8	100%	8	100%	8	100%
マネジメントサイエンス学科		42	98%	33	97%	24	96%	27	100%	28	100%	29	97%	15	100%	10	100%	9	100%	9	100%	9	100%	7	100%
エンジニアリングデザイン学科		-	-	23	100%	18	95%	28	97%	31	100%	30	100%	-	-	7	100%	8	100%	8	100%	8	100%	10	100%
その他学科・非常勤		42	81%	33	75%	31	78%	44	81%	32	80%	38	84%	26	81%	24	77%	20	80%	29	83%	23	82%	26	87%
合計		153	93%	155	91%	134	92%	159	93%	136	94%	149	94%	62	91%	62	90%	58	92%	63	91%	56	92%	61	94%

開講学科	H28年秋 参加科目数				H29年春 参加科目数											
	常勤	他学科常勤	他学部常勤	非常勤	常勤	他学科常勤	他学部常勤	非常勤								
U S 工学部共通	-	-	1	100%	-	-	3	100%	-	-	6	86%	-	-	8	80%
工学部共通	-	-	3	100%	-	-	2	100%	-	-	5	100%	-	-	6	86%
情報通信工学科	-	-	-	-	-	-	-	-	4	100%	3	100%	-	-	1	100%
機械情報システム学科	22	100%	10	100%	-	-	10	91%	3	100%	17	94%	-	-	5	100%
ソフトウェアサイエンス学科	23	96%	10	100%	0	0%	6	86%	25	100%	5	100%	2	67%	6	86%
マネジメントサイエンス学科	12	100%	9	100%	-	-	5	63%	17	94%	9	100%	1	100%	3	75%
エンジニアリングデザイン学科	12	100%	2	100%	-	-	6	75%	16	100%	1	100%	1	50%	5	100%
合計	69	99%	35	100%	-	-	32	82%	65	98%	46	96%	4	67%	34	87%

2. 各質問項目の平均

質問	学生について		教員について			講義	実験について		卒研	科目
	意欲	自習	興味	理解	説明	教具	設備	指導書	設備	平均
平均	4.05	3.74	3.93	3.76	3.89	3.84	3.95	3.81	4.51	3.94
標準偏差	0.85	0.99	0.95	0.99	1.02	1.01	1.02	1.05	0.76	0.96

3. 総合評価の分布



4. 科目ごとの総合評価の平均値

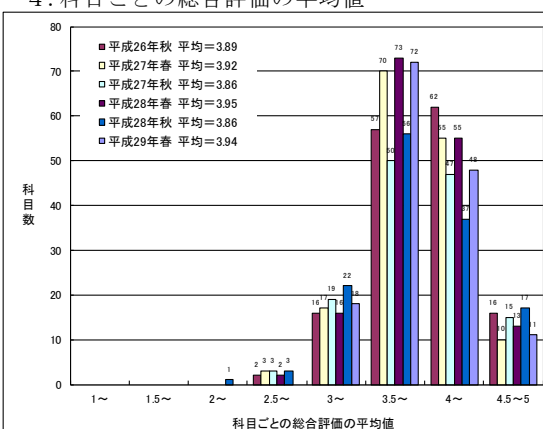
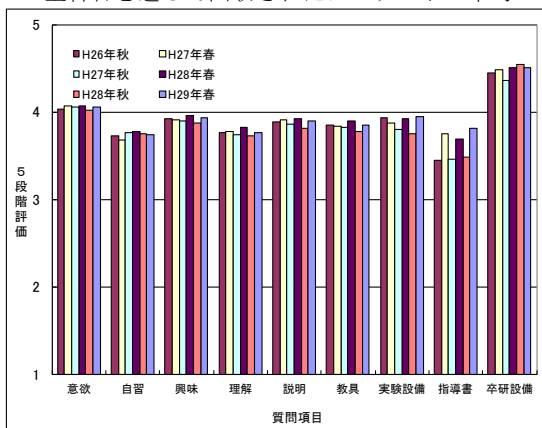
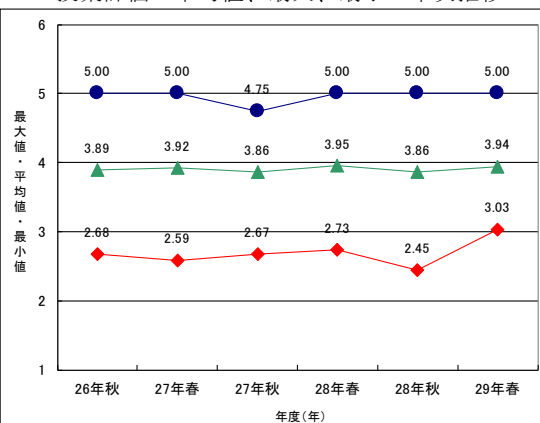


図 4-1 平成 29 年度春学期学生による授業評価アンケート集計結果

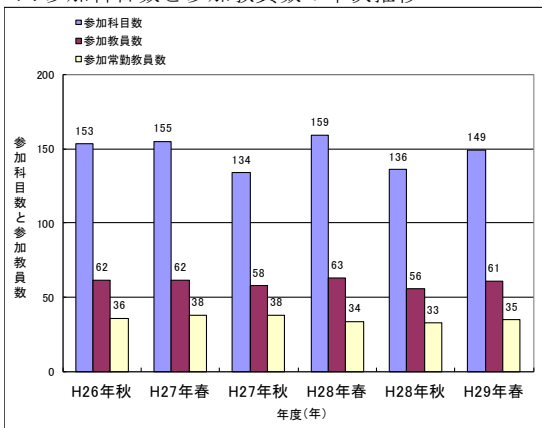
5. 全科目を通して回収されたアンケートの平均



6. 授業評価の平均値、最大、最小の年次推移



7. 参加科目数と参加教員数の年次推移



8. 質問項目と評価方法

学生の取り組み

- 1 授業には意欲的に取り組んだと思いますか(意欲)
- 2 授業に向けて予習・復習はしましたか(自習)

科目の内容

- 3 授業内容に興味は持てましたか(興味)
- 4 授業内容は理解できたと思いますか(理解)

指導方法

- 5 教員の説明(話し方など)は分かりやすかったですか(説明)

A 講義・演習

- 6 教具(OHPなど)・板書は見やすかったですか(教具)

B 実験科目

- 7 実験設備は整っていましたか(実験設備)
- 8 指導書は分かりやすかったですか(指導書)

C 卒業研究

- 9 研究設備は整っていましたか(卒研設備)

評価方法

- 5 : 強くそう思う(非常に良い)
- 4 : ややそう思う(良い)
- 3 : どちらとも言えない(普通)
- 2 : あまりそう思わない(あまり良くない)
- 1 : 全くそう思わない(良くない)

図 4-2 平成 29 年度春学期学生による授業評価アンケート集計結果

2017年度（平成29年度）秋学期 学生による授業評価アンケート 集計結果

工学部授業評価検討会

1. 参加状況

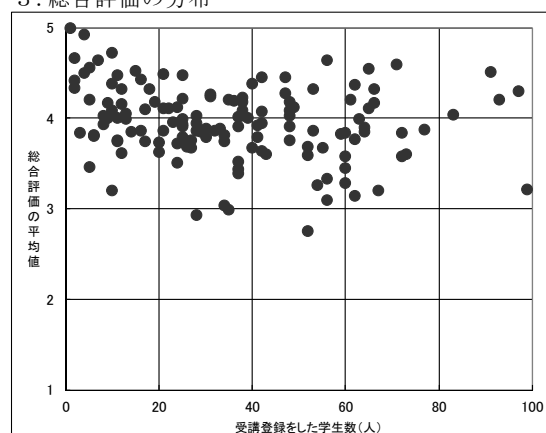
教員所属学科	参加科目数						参加教員数					
	H27年春	H27年秋	H28年春	H28年秋	H29年春	H29年秋	H27年春	H27年秋	H28年春	H28年秋	H29年春	H29年秋
情報通信工学科	-	-	-	-	24	92%	20	100%	-	-	9	100%
機械情報システム学科	31	91%	31	100%	25	96%	10	100%	11	100%	1	100%
ソフトウェアサイエンス学科	35	97%	30	97%	35	100%	25	100%	10	100%	10	100%
マネジメントサイエンス学科	33	97%	24	96%	27	100%	28	100%	29	97%	25	93%
エンジニアリングデザイン学科	23	100%	18	95%	28	97%	31	100%	30	100%	33	97%
その他学科・非常勤	33	75%	31	78%	44	81%	32	80%	38	84%	31	89%
合計	155	91%	134	92%	159	93%	136	94%	149	94%	140	95%

開講学科	H29年春 参加科目数				H29年秋 参加科目数			
	常勤	他学科常勤	他学部常勤	非常勤	常勤	他学科常勤	他学部常勤	非常勤
U S 工学部共通	-	-	6	86%	-	-	8	80%
工学部共通	-	-	5	100%	-	-	6	86%
情報通信工学科	4	100%	3	100%	1	100%	5	100%
機械情報システム学科	3	100%	17	94%	-	-	5	100%
ソフトウェアサイエンス学科	25	100%	5	100%	2	67%	6	86%
マネジメントサイエンス学科	17	94%	9	100%	1	100%	3	75%
エンジニアリングデザイン学科	16	100%	1	100%	1	50%	5	100%
合計	65	98%	46	96%	4	67%	34	87%

2. 各質問項目の平均

質問	学生について		教員について			講義	実験について		卒研	科目
	意欲	自習	興味	理解	説明	教具	設備	指導書	設備	平均
平均	4.09	3.81	3.96	3.79	3.92	3.90	3.77	3.54	4.50	3.92
標準偏差	0.87	0.99	0.98	1.01	1.04	1.02	1.10	1.18	0.83	1.00

3. 総合評価の分布



4. 科目ごとの総合評価の平均値

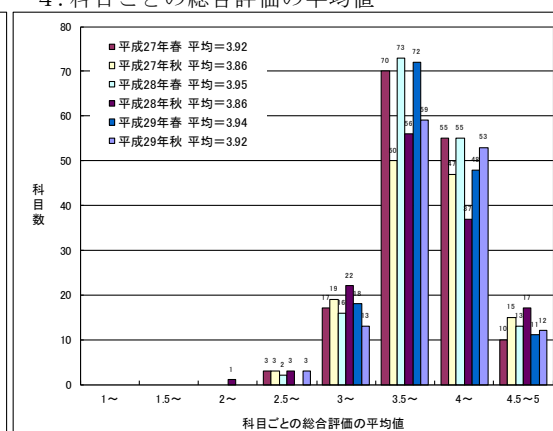
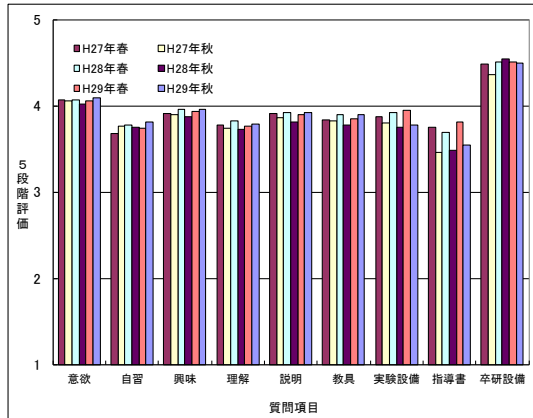
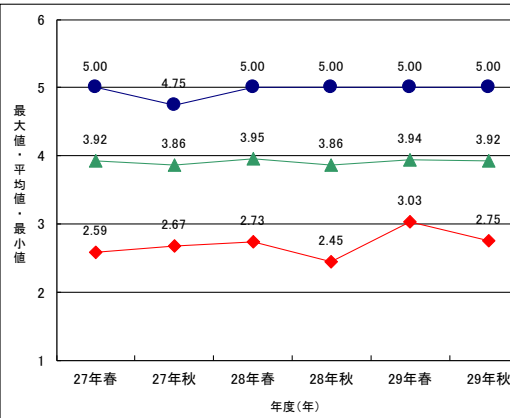


図 5-1 平成 29 年度秋学期学生による授業評価アンケート集計結果

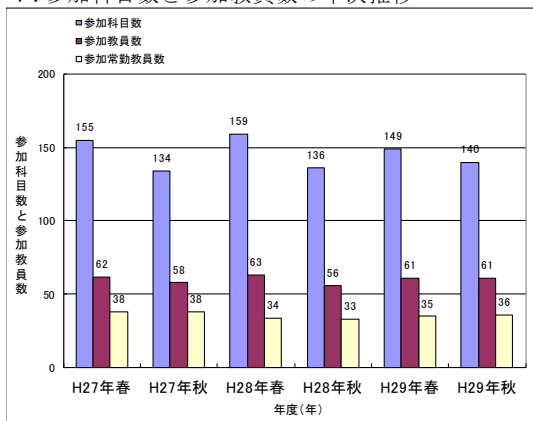
5. 全科目を通して回収されたアンケートの平均



6. 授業評価の平均値、最大、最小の年次推移



7. 参加科目数と参加教員数の年次推移



8. 質問項目と評価方法

学生の取り組み

- 1 授業には意欲的に取り組んだと思いますか(意欲)
- 2 授業に向けて予習・復習はしましたか(自習)

科目の内容

- 3 授業内容に興味は持てましたか(興味)
- 4 授業内容は理解できたと思いますか(理解)

指導方法

- 5 教員の説明(話し方など)は分かりやすかったですか(説明)

A 講義・演習

- 6 教具(OHPなど)・板書は見やすかったですか(教具)

B 実験科目

- 7 実験設備は整っていましたか(実験設備)
- 8 指導書は分かりやすかったですか(指導書)

C 卒業研究

- 9 研究設備は整っていましたか(卒研設備)

評価方法

- 5 : 強く思う(非常に良い)
- 4 : やや思う(良い)
- 3 : どちらとも言えない(普通)
- 2 : あまりそう思わない(あまり良くない)
- 1 : 全くそう思わない(良くない)

図 5-2 平成 29 年度秋学期学生による授業評価アンケート集計結果

(3-9) 学外セミナー・現況調査等への教員派遣

① 概要（目的を含む）

現状における学生教育に関する課題、あるいは今後の教務上の改正にかかわる課題に関する知見を得るため、学外のシンポジウムや研修会に参加して、その内容を FD 活動に活用する。

② 到達目標

参加研修等の内容を、本学工学部の学生学修指導に効果的に活用できるよう、その方策を検討することである。

③ 活動内容

下記学外セミナーに工学部 FD 委員（黒田）が参加・報告（共著）した。

派遣先：第 24 回大学教育研究フォーラム

日時：平成 29 年 3 月 20 日（火）個人研究口頭発表 9：00～

発表題目等：高平小百合・小島佐恵子・大谷千恵・小原一仁・黒田 潔・村山にな・伊藤良二・三村真紀子・片野 徹・山崎千鶴、
「能動的学習を促す取り組みと教員が感じた学生の変化についての研究」

会場：京都大学吉田南総合館北棟

主催：京都大学高等教育研究開発推進センター

協賛：学校法人河合塾教育イノベーション本部、関西地区 FD 連絡協議会

④ 評価

今年度は都合がつかず、出張を断念した。

⑤ 予算措置

工学部 FD 予算に計上したが、今年度は都合がつかず、執行していない。

4 昨年度（平成 28 年度）に提案された予定・課題の達成度について

(1) Tamagawa Vision 2020 の実現へ向けた課題

16 単位キャップ制および GPA による警告制度・進捗チェック・卒業要件の下、対応する改定カリキュラムにおける指導上の問題点の認識や結果の評価と効果的な改善は、確実に継続中である。

アクティブ・ラーニング等への対応については、例年 2 月に開催される学内の「大学教育力研修 (FD・SD)」においては実践的な内容が既に工学部から複数件発信され続けているように、確実に継続されている。

一方、アクティブ・ラーニングが成功するのは学生と教員の双方の努力がマッチングしたときのみである。それこそ片側からのアプローチは一方向行動を推進しかねない。学問は単にそれが経済的に有利であるから存在するものではなく、また大学という存在が社会において大学として認知されるのは、それが学問を基礎とした人間的能力の発掘の期待があるからである。であるならば、それは教員と学生が共に作り出していくべきものであり、前述したように教員からアクティブ・ラーニングを実施すればいいという思考は、確実に一方向に陥る。幅広い議論が要されるところである。

(2) 現状における課題

昨年度報告では、入学生の学力不足対応の充実化、基礎力を保持しているような学生の能力を伸ばす対応、高学年学生が能動的自主的に学修していく精神を涵養させる環境づく

り、等が課題として挙げられた。これらのより実践的な対策として、工学部 FD 研修会、授業評価検討会、授業評価アンケートが挙げられる。ここでの議論による教員同士のコミュニケーションが教員に多くの気づきをもたらす。

新設学科である情報通信工学科対応が課題として挙げられていたが、大体の様子は他学科とそう大きく変わらないことが明らかになってきた。学科所属教員による事前打ち合わせが頻繁に実施されており、達成度は継続中である。

(3) FD 活動の在り方に関する課題

最重要活動の工学部 FD 研修会に関しては、16 単位キャップ制、および GPA による警告制度に主眼を置くことはともかく、そろそろ学生の学修すべき内容自体について深く考察する時期であるとされたが、現状ではいまだ昨年度の課題が解消していない。

参観授業については、参加者が極めて少ない状況は依然として続いており、これに関してはなかなか改善しない。他の授業が入っていたり、他の活動が多かったり、多忙な教員にとって時間を空けることはそれなりに難しい。検討継続予定である。

授業評価アンケートについて、完全実施とならない現状は改善しない。最低限、専任教員が完全実施となればよいと考えている。現状はそれにほぼ近く、達成度が高いと考えられる。

5 今後（平成 30 年度以降）の予定・課題について

(1) Tamagawa Vision 2020 の実現へ向けた課題

これまで通り 16 単位キャップ制、および GPA による警告制度・進捗チェック・卒業要件の下、対応する改定カリキュラムにおける、指導上の問題点の認識や結果の評価を継続し、効果的な改善を継続する。

(2) 現状における課題

課題は昨年度とほぼ同じである。

基本的には、入学生の学力不足対応の充実化、基礎力を保持しているような学生の能力を伸ばす対応、高学年学生が能動的自主的に学修していく精神を涵養させる環境づくり、等の PDC(S)A が求められる。

(3) FD 活動の在り方に関する課題

課題は昨年度とほぼ同じである。

工学部 FD 研修会に関して、そろそろ学生の学修すべき内容自体について深く考察する時期であると考えられる。学生の学修状況の把握に努めつつ、どのような学生を育てるべきか、つまり学問として何を学ぶべきか、という根本に立ち返った議論ができるよう、内容の再検討をすべきと思われる。

授業評価検討会および工学部授業評価検討会は、学科内および学科間での教員のコミュニケーション体制として重要であり、従来どおり継続する。

学生による授業評価アンケートに関しても、従来どおり継続する。

§ 経営学部

1 FD 活動への取組理念・目標

- (1) 質の高い卒業生（経営学部のミッション・ステートメントを体現し得る卒業生）を輩出する。
- (2) 玉川の教育理念を基盤とした経営学教育を実現する。
- (3) 21 世紀社会に生き残ることのできる経営学部一少子化時代・大学全入時代にあって、運営を維持しうる体力をもった学部を形成する。
- (4) 玉川学園および玉川大学全体の評価を高める学部を構築する。

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

経営学部長、教務主任、国際経営学科主任、学生主任、FD 担当が中心となって FD 活動を実施する。教務主任と FD 担当は連携して活動計画を取りまとめ、主として研修会の運営にあたる。

3 平成 29 年度の活動内容

(1) 研修会（平成 29 年 6 月 1 日）

① 概要（目的を含む）

ビジョン、ミッション及び教育課程に沿った専門教育と学修支援のあり方を検討するために、大学コンソーシアム京都主催第 22 回 FD フォーラム参加報告を起点として研修会を実施した。

② 到達目標

学修支援、学生支援の方法を具体的に示す。

③ 活動内容

石田万由里准教授、神谷渉准教授による報告を踏まえて、学修支援、学生支援の方法について議論を進めた。報告内容は「大学の教育力を発信する～教養教育改革と現代社会～」のシンポジウム及び第 1 分科会「イマドキの大学教育と良い学び」、第 15 分科会「教養としてのライフスキル」の 2 つの分科会についてであった。

シンポジウムの報告では大学教育の危機、教養、大学教育と AI といった事項が中心であった。また分科会の報告に基づく内容として大学生に学びをどのように動機づけるか、学生にとって重要なライフスキルなどを討議した。

④ 評価

高等学校と大学の教育プログラム、学修環境といった差異に戸惑う学生がいるなかで、学生をどのように支援するか、学生の力をどのように伸ばすかについてこれまでの具体的な取組を取り上げて共有することができた。

(2) 研修会（平成 29 年 7 月 20 日）

① 概要（目的を含む）

学修状況を確認し、卒業後のキャリア形成を見据えたコース・プログラムによる支援体制を強化することを目的として研修会を実施した。

② 到達目標

外部試験の受験を含めて学修を促進するための授業方法をより具体的に示す。

③ 活動内容

検定試験合格助成制度の結果等を踏まえて英語及びコース専門分野の学修成果を確認した。3 年次までの授業に沿って、コース目標を達成するための 4 年次ゼミナール科目の授業内容及び 4 年生への学修支援の進め方を詳細に検討した。

④ 評価

3 コース制に移行して平成 30 年度で 4 年目を迎える。コース別で各年次に目標を設定しているなかで、最終学年のゼミナール科目ではさまざまな支援形態の提案があったことは評価してよいであろう。次年度以降、これまでの取組を定期的に振り返り、どのように学修を評価するか、さらに学修成果を高めるための支援方法を検討したい。

(3) 学生による授業評価アンケート

① 概要（目的を含む）

例年、各科目の継続的な授業改善に役立てることを目的として授業評価アンケートを実施している。春学期・秋学期ともに実施した。

② 到達目標

学生の学修状況を把握するとともに、各教員のさらなる資質向上を図る。

③ 活動内容

独自の方法で実施している科目及び演習科目を除く経営学部開講科目でマーク式、記述式の授業評価アンケートを実施した。マーク式の集計は外部業者に依頼し、その結果を科目担当者別に配付して FD 活動に活用するよう継続的に呼び掛けている。記述式は科目担当者が個別に活用している。

④ 評価

アンケートはこれまで通り実施できている。学生が学修時間を確保できていないことが以前から課題として挙げられている。アンケートを利用して学修時間の増加につながる仕組みづくりの検討を進めたい。

4 昨年度（平成 28 年度）に提案された予定・課題の達成度について

昨年度に計画した活動はほぼ実施できており、目標も達成できている。とくに 3 コース制の教育プログラムによる支援は学生の学修成果に結びついているようである。

検定試験合格助成制度ではこれまで多かった TOEIC® L&R 公開テストと簿記に加えて、BATIC（国際会計検定）®による申請がさらに増加した。コース各年次で設定している目標を大きく上回る学生も出てきている。他の検定を目指す学生も増加している。コース・プログラムの設計・運用によるミドルレベルの FD の成果といえるであろう。この制度は今年度で終了するが、3 コース制移行後、初の卒業生を輩出することになる平成 30 年度には学生がさらなる大きな成果を獲得できるように、FD 活動を引き続き学生支援につなげたい。

4 年次ゼミナールの支援については学修成果を見ながら引き続き検討することになる見込みである。授業の進め方・学修成果の評価が課題になっている。またアクティブ・ラーニングの実施状況や取組の報告・情報共有は全学実施の研修会が中心になっており、経営学部において FD 活動に生かしていくかも課題である。

学内業務との調整などにより、計画していた活動のうち学外セミナー等への教員派遣は実施できなかった。平成 30 年度には実施できるように準備を進めたい。

5 今後（平成 30 年度以降）の予定・課題について

平成 30 年度は平成 27 年度に開始した教育プログラムが 4 年目を迎える。Dual Language Program による教育効果の検証を目的とした取組として学部等改革推進制度の採択も受けている。ここ数年の FD 活動を振り返ることもできるものと位置づけて、FD 活動を推進する予定である。

平成 29 年度入学生から一部科目において資格取得等による単位認定を開始した。FD 活動によってこの仕組みをどのように推進するかは課題であろう。初年度は 1 年次にはそれほど多くないが、1 年次から設定しているのは段階的に学修を進めるための目安を意識することができるようにするためでもある。科目受講前あるいは受講中は資格取得には至らない場合もやはりある。しかし授業後であっても学生の目標になっており、学修意欲を高めていることは確かである。現在、上級学年の学修にも一定の効果が見られる。資格取得が目的ではない。学修の動機づけとして、また 20 歳前後である学生が経済社会を見る目を養うことにつながることをより重視している。

この単位認定制度では入学前の成果も認定している。入学 1 年後、2 年後、どのように学修が進むのか、将来自分がどのように成長するのかを知る目安にもなっている。平成 30 年度以降、より高い成果をあげられるように働きかけを続けたい。

全学の調査では学生の学修時間は増加していないようである。経営学部においても同様であるため、引き続き課題として取り組む必要がある。

§ 教育学部

1 FD 活動への取組理念・目標

本年度の FD 活動への取組理念・目標は、平成 28 年度の内容を継続し、以下の通りである。

「本学部では学校教育はもとより生涯教育、社会教育の諸分野で貢献できる教育プロフェッショナルの育成を目指し、指導に当たる教員が自らの資質と能力を向上させることにある。」

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

教育学部長（通信教育部長）、教育学科・乳幼児発達学科の両主任、教務主任、学生主任、及び FD 委員、通信教育部教務主任の 7 名で構成する。

教育学部長を委員長とし、FD 委員会が学部における FD 活動計画(企画・運営)の策定、FD 活動の年度総括などを審議する役割を担っている。また委員会決定事項については教授会で議案提起を行い、FD 活動の推進に努めている。

3 平成 29 年度の活動内容

(1) 研修会等

【通学課程】

① 概要（目的を含む）

前年度に引き続き、教員養成における課題や展望を再認識した上で日常の指導、教育実践に取り組むことを目的とし、研修会に参加した。

② 到達目標

今日の教育実践における先進的な取組や課題に触れ、研究活動および日々の授業実践に活かしていく。また日本の教育の課題と展望について学び、教員養成における指導や教育実践に活かし、また参加者同士のネットワークを築くことを目標とする。

③ 活動内容

知的財産権研修会及び自衛消防訓練を開催し、教員の知的財産権への理解や知識の提供、また避難経路の確認など防災に向けて学生の安全確保のための研修を行った。

研修名：大学と知財リスクおよび知的財産教育

講 師： 木村友久（山口大学知財センター副センター長）

実施日： 平成 29 年 9 月 20 日（水）

場 所： 大学研究室棟 B104 会議室

時 間： 13 時 00 分～15 時 00 分（約 2 時間）

研修名：教育学部自衛消防訓練（避難経路の確認と消火器使用訓練）

講 師： 坂田招彦（総務課・セキュリティ担当）

実施日： 平成 29 年 10 月 18 日（水）

場 所： 大学研究室棟 B104 会議室および大学教育棟エントランス

時 間： 16 時 00 分～17 時 00 分（約 1 時間）

④ 評価

知財研修会については、初めての試みであり、非常に重要なことを再認識した。特にネット上の情報を取得・使用に関してどのような権利が発生しうるかなどの知識を得ることができた。また、避難訓練研修においては、教員同士の協力やコミュニケーションの重要性が学生の安全確保につながり、認識できたことは望ましい成果であろうかと思う。

(2) 学生による授業評価アンケート

【通学課程】【通信教育課程】

① 概要（目的を含む）

学生による授業評価（教育学部では「リフレクションシート」と称す）を全授業で実施する。集計結果は学部全体の平均と比較できる形として各授業担当者にフィードバックされ、新学期に向けて授業改善につなげるものとする。また学部・学科・学年別の集計結果の傾向や課題を学部全体で共有することを目的とする。

② 到達目標

専任教員、非常勤講師が担当するすべての授業において学生によるリフレクションシートを実施する。ただし授業評価アンケート実施日の出席者が10名未満の授業については集計せず、各担当教員が授業改善のために活用する。実施した授業評価の集計はデータ分析と集積を行い、教員の授業改善および学生の傾向や課題の共有につなげる。

③ 活動内容

専任教員、非常勤講師が担当する教育学部すべての授業において、授業評価アンケート（リフレクションシート）を実施した。

④ 評価

授業評価のアンケート結果は各授業のみならず、学部全体の平均値と比較できるようにし、学生の傾向や課題を各教員が共有することができた。また教育学部における授業評価のアンケート結果は各設問とも概ね高い評価を得ることができた。この結果は各教員の日頃の授業改善の賜物ではあるが、実施するアンケート内容の周知により、明確な評価基準として、教員の意識改革につながり、さらなる授業改善につながったと言える。

一方、前年度に引き続いて予習・復習の時間に関しては他項目よりも低くなっている。ただし、あくまでも平均であり、個々の授業特性および学生の予習や復習に対する時間的な意識の違いがあることや10名以下の授業の削除等の考慮も加味した上での評価と考えるべきである。この点に関してはアンケート設問内容の改善や設問に対する説明を加えるなど検討したい。

【通信教育課程】

① 概要（目的を含む）

スクーリング授業において、学生による授業評価を全教員が実施し、集計結果は各授業担当者にフィードバックするとともに、『玉川通信』で学生に公表する。目的は、

各授業担当者が新年度に向けて授業改善することにある。

② 到達目標

- ・専任教員、非常勤講師を問わず、すべての授業において学生による授業評価アンケートを実施する。
- ・実施した授業評価の集計を外部委託し、データ分析と集積を試み、教員の授業改善、また学生の傾向や課題を共有する。

③ 活動内容

- ・夏期スクーリング（8月3日～8月23日）において、専任教員、非常勤講師の全教員が、担当する全ての授業（一部の実技系科目を除く111科目）について、授業評価アンケートを実施した。回答数は延べ2,593名。
- ・質問内容は、前年度と同一のものを使用した。

④ 評価

各授業の結果は、全教員の結果をグラフ化したものと比較できる形で、通信教育課程の全教員を含む夏期スクーリングの担当教員本人に配付し、結果と課題を共有することができた。また、補助教材『玉川通信』で結果の概要を学生に公表した。

授業評価の内容であるが、各設問とも概ね高い評価を得ている。今年度は昨年度に続き「自分は積極的に授業に取り組んだ」という自己評価について肯定的に答えた人の比率が高かった。また、授業評価では「授業の目標が明確」「教員の話し方や声量は適切」といった項目が高い評価を得た。予習時間に関しては科目によりばらつきが多かった。

若干低めの評価となった項目としては、「学修目標を達成」「授業時間内に自分の考えや意見をまとめたり、学びを深めたりする機会や時間が適切」「各回の授業の学修量」といった項目があった。6日間短期集中型という学修形態のため、必ずしも十分な予習・復習の時間が確保できないという制約の中で、授業時間内にいかにして学修内容の定着・深化を図り学修目標を達成するかという課題が浮き彫りとなった。

また、クロス分析を試みた結果、「自分は積極的に授業に取り組んだ」に対する回答とそれ以外の各設問への回答との間には、明確に相関関係（積極性の高い学生ほど、各設問に対しても前向きな回答をするという傾向）があった。これは予想されたところではあるが、授業者には積極的に参加したくなるような授業が求められているといえよう。

（3）教職員相互の授業公開と参観

【通学課程・通信教育課程】

① 概要（目的を含む）

教員相互の授業参観を実施し、各自の教授法、教授内容についての振り返りを行い、授業改善につなげる。また関連する科目の教授内容の調整を検討する機会とする。

② 到達目標

大学FD委員会の提案に合わせ、通学課程は4名、通信教育課程は最低1名の教員が授業参観を行う。公開した教員の教育内容の振り返り、教授法の改善を図るとともに、参観した者の授業改善へ寄与することとする。

③ 活動内容

通学課程は教員 4 名の協力を得て、4 つの授業の授業公開と参観を行った。

通信教育課程は教員 1 名の協力を得て、1 つの授業の授業公開と参観を行った。

④ 評価

通学課程は若手・中堅および熟練者の授業参観を実施することができた。実施においては、多忙な大学教員の業務を考慮し、全 100 分の参観でなくとも良いこととしたが、参観者は前年度と同様に少なく、時間設定の方法や実施の在り方についての再検討が必要と思われる。しかし参観期間中の参加者数は少なかったが、参観期間に限らず、気兼ねなく教員同士がいつでも授業を参観できる環境・雰囲気は教育学部内で形成されている。特に関連する科目や共通科目が主ではあるが、教員間の教授法、教授内容についての意見交換が行われるようになったことは、授業公開を実施することの意義や成果の一つとして挙げられる。また、非常勤教員からの参観への参加があったことも意義深いと思われる。

通信教育課程は、昨年度の PR 不足の反省を踏まえて積極的に授業公開への参加を呼びかけたが、結果的には本年度も 1 名・1 件にとどまった。ただ、公開時期が秋学期だったので、春学期の授業なら公開したいという教員もあり、今後の課題としたい。

(4) FD 研修

【通学課程】

1) 京都研修

① 概要

玉川学園創設者小原國芳の京都帝国大学時代を過ごした京都の主要地を訪問し、参加した教員同士が学び合い、各自が今後の教育活動、研究活動の活性化を図ることを目的とした教員自主企画および学部企画の学外（京都）FD 研修「玉川学園の歴史および玉川の教育の背景」を実施した。自校の歴史や建学の精神を再確認し、玉川大学における全人教育の意義について理解を深めることを目的とした。また自校史教育の教材となる映像資料作成のための取材も目的とした。

② 到達目標

自校史の理解促進や小原國芳が京都帝国大学学生時代を過ごした主要地を巡りながらの玉川大学の歴史や建学の精神を学ぶと共に玉川の教員としての誇りを持ち、日々の教育活動につなげていく。また教育学部の教員間で小原國芳の生き方や信念を共有し、愛校心を高めることを目的とする。

③ 活動内容

本研修においては小原國芳の京都時代における主要地、すなわち、京都大学・理正院・洛陽教会を平成 29 年 11 月 25 日・26 日の 2 日間に訪問した。同日が土日にあたるため、洛陽教会を初日の訪問・取材の日とした。洛陽教会では、小原國芳が日曜学校の教師を務めていた頃、同教会の「月報」等にかけていた文書を閲覧した。今後、アーカイブにする必要がある。また、小原國芳が依っていた頃の古い教会の遺物を数点見学した。同教会での取材は、数時間を要した。

二日目は、京都大学の見学からスタートした。同大学文書館歴史展示室において、

自校教育に関する資料を十分に見学できた。また、学芸員に当時の文科大学の校舎の位置を写真から推測してもらったなどした。その後、『小原國芳自伝（2）』にあるように、吉田山を抜けて、理正院へ徒歩にて移動した。小原國芳の通学路である。理正院では、住職の案内により、下宿していた部屋を見学した。『自伝』を片手に、どこに比叡山が見えるのか、かつての景色はどうだったのか、想像を巡らせた。

尚、学校劇につながった京都南座は改装工事中のため訪問はできなかった。

④ 評価

学部教員による創業者ゆかりの地の訪問・取材は、単なる研修にとどまらず、自校史研修のフィールドワークとしての価値をもつ。そこに行かなければ知り得なかった事柄が多かった。また、資料収集の必要などの課題の発見にもつながった。それは、教育学部および今後の大学における教育活動に大きく寄与するであろう。

【通信教育課程】

① 概要（目的を含む）

本課程では、教員数が少なく独自の FD 研修を実施するのが難しいため、随時各種の学外 FD 研修の情報を提供するとともに、1 月に積極的な参加を呼びかけた。

② 到達目標

本校の全学で行われる FD 研修のほかに、専任教員の各自の問題意識にあった学外 FD 研修に参加することで、日々の教育活動の向上を図ることを目的とする。

③ 活動内容

「第 23 回 FD フォーラム」（3 月 3 日～4 日、京都産業大学）に 1 名参加。1 日目の全体会は、FD が義務化されてから 10 周年になるのを機に「FD のこれまでと、これから」と題して 4 名のパネリストによるシンポジウムが開かれた。2 日目は 12 の分科会が開かれ、そのうちの情報セキュリティ教育の分科会に参加した。

④ 評価

結果としては本年度学外研修への参加は 1 件にとどまったが、個人的な問い合わせなどもあり、反応は良かったと思われる。次年度も引き続き積極的な参加を呼びかけると共に、よりきめ細かに情報提供を行っていきたい。

4 昨年度（平成 28 年度）に提案された予定・課題の達成度について

【通学課程】

授業評価アンケートの全科目（専任・非常勤）実施を目標にしていたが、春学期には発注ミスにより一部の授業において実施できなかった。また、秋学期にも発注ミスがあり、最終授業に間に合わない事例がいくつかあった。これらは、FD 委員が発注に関する手順を見直すことで解決できる予定である。教育学部は、学部独自の教育課題を追及する学部企画 FD 研修を行っている。鹿児島の小原記念館を訪れ、創立者の理念を再確認し、教員個人の資質向上および学部組織としての教育力の向上につながったと言える。

また平成 25 年度より 16 単位キャップ制の導入など新しい大学教育において、これまで以上に教員間の信頼と協力・連携が必要である中、FD 活動や研修を機に多くの場面で学部教員が玉川大学や学生のため、より良い教育実践について意見交換を多く持つことができるようになったことも成果の一つであり、学部組織としての教育力の向上につながるも

のと思われる。

【通信教育課程】

スクーリングの授業評価アンケートは、授業者の多寡によらず原則として全科目で実施することができた。また、設問の内容を通学課程や他学部のを参考に見直してから 3 年連続で同一項目でデータを取っているので、経年変化の分析や、通学課程や他大学などの授業評価とある程度の比較は可能になったのであるが、時間がなく実施できなかった。次年度以降の課題としたい。

テキスト学修科目のアンケートについては、前年度に見送りを決めて以降、特段の進展はなかった。

5 今後（平成 30 年度以降）の予定・課題について

【通学課程】

前年度に引き続き、日常の教授内容や方法の更なる検討と研鑽を重ね、本学の建学の理念に基づき、今日の社会の要求に応じることのできる人材育成に取り組むことが重要である。授業評価アンケートにおいては、項目内容の改善として全授業に当てはまる項目の設定は困難ではあるものの、実習や演習、アクティブ・ラーニング、少人数の授業など授業体系に応じた項目を加えるなども今後の課題の一つである。

教員の重要な職務である研究活動の活性化のために、共同研究などの勉強会を平成 30 年度も開催していきたい。

FD 研修の一つである鹿児島研修において学部教員が創立者の生誕地である鹿児島を訪れ、その教育者としての原点に触れることは大きな意義がある。とりわけ私学においては創立者の建学の精神を教育の出発点としているため、その精神を教職員や学生が共有することが大学教育の成果にも大きく影響すると考えられ、昨今「自校史教育」の重要性が強調されている。さらに教育学部では学生たちが創立者・小原國芳の教育精神を学ぶ機会を授業や行事など多数設けており、今後もその充実が求められている。そのため今後の大学における教育活動に大きく寄与する鹿児島研修は今後も引き続き行っていく予定である。特に新任教員には学外出身者も多く、このような研修の機会を設けることは玉川教育の精神を全教員間で共有するためにも必要であると考えられる。

【通信教育課程】

スクーリング科目については引き続き授業評価アンケートを実施する。通学課程や他大学などの授業評価との比較や、同一科目・同一教員の経年経過の分析も試みてみたい。また、テキスト学修科目についても、学生のニーズをすくい上げることができ、なおかつ教員の指導方法や授業の改善にもつなげられる何らかの方法を検討したい。

§ 芸術学部

1 FD 活動への取組理念・目標

芸術学部のミッションは「芸術による社会貢献の実践力を育成する」であるが、現代の社会は経済を中心とするグローバル化や少子高齢化、情報化、新技術の進展といった社会の変化が労働市場や産業・就業構造の流動化となって急速に進行している。このような時代にあっては、我が国の人口動態も踏まえつつ、変化する社会の捉え方と貢献の仕方を常に検討して柔軟に対応していく必要がある。新聞社の全国世論調査によると、「世界に通用する人材や、企業や社会が求める人材を大学は育てているか」の質問に 6 割を超える国民が否定的な回答をしているように、人材養成や研究の目的が社会の要求と乖離していると指摘されている。特に芸術分野は新産業分野でも期待される感性や創造力などの育成と深くかわり、芸術学部の人材養成が社会の発展や改善に貢献できると確信している。

そのためには、従来の教育や福祉はもとより、現代は芸術と産業分野との関連性と活用が高まっているように、常に社会とのかかわりを意識しながら、ESTEAM 教育の推進をはじめ教員養成課程の充実など、カリキュラムや教授法の改善・開発を行う必要がある。また、入学生の資質や能力などの動向も踏まえた学修支援体制の構築や、学生を主体とした授業方法の研究および総合的な学修環境を形成するプロジェクト型授業や外部機関との連携授業を推進することも重要である。そのためには多様化する社会の要請に応えうる柔軟性や機動性をもった組織として教員団を編成しなければならない。教員団が目標や課題を共有し、協働して教育活動を推進・改善できるチーム力形成が重要である。

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

芸術学部長を中心とした主任会の構成員及び FD 委員が FD 活動の中核メンバーである。定期開催の主任会と主任研修会が中心となり教育課題の共有や分析を行い、目標や課題の設定および改善方策などの基本方針を検討する。そして、中核メンバーはもとより、課題ごとの担当教員が報告や成果、及び方策等を拡大教授会で報告することなどを通じて、全学部教員が目標や課題を共有し、組織的な取組とする仕組みを構築している。また、各学科の主任は学部 FD の中核メンバーであるので、学科内の取組をまとめることや推進する役割を担い、教授会と学科会が連動して FD 活動を推進させている。主任会構成員および大学 FD 委員は、全学的な課題や情報の収集と伝達、及び他学部・他大学における FD 活動の情報収集を行うと共に、学部内の情報共有を図り、FD の組織的活動が円滑に行われる役割を担っている。

3 平成 29 年度の活動報告

(1) 授業アンケートの実施と授業成果報告書の作成

① 概要・活動内容（目的を含む）

平成 29 年度は、予定通り年 2 回の授業アンケートが芸術学部で開講されている全ての授業について実施された。個々の科目に関するデータおよび統計的データの全てを、Blackboard を通じて学部内の全学生および学部内の全教員に公開する。また、個々の科目についてのデータは伏せつつ、統計的データを、持ち出し不可の冊子として一般の閲覧に供することを検討している。さらに、各学科の専門科目の担当者が授

業概要と授業成果をまとめた授業成果報告書などを作成している。

② 到達目標

芸術学部 FD 委員会においては、授業アンケートのデータを分析し、学部運営に活かすと共に今後の FD 活動の方向性を考える手がかりとする。また、各科目担当者はそれぞれのアンケート結果を参照し、授業の内容と養成人材像との妥当性について点検する。授業成果報告書は各学科の専任・非常勤教員に配付し、全ての教員が専門科目の概要を把握することによって、より緊密な連携を可能とする。

③ 評価

本年度も昨年度に引き続き 2 年次以降の専門科目に関して授業報告書を作成し、様々な情報を共有しつつ、今後の教育方針に関する議論の土台を築くことができた。また、授業アンケートの結果に関しては、芸術学部の拡大教授会において、その結果を報告するとともに、学生の学修状況、その傾向などについての情報を共有することが出来た。

(2) 学外セミナー等への教員派遣

1)

① 概要（目的を含む）

「新学習指導要領、これからの音楽教育の在り方」（全日本音楽教育研究会 平成 29 年 4 月 27 日）に教職担当の清水宏美教授が出席し、教員養成課程に携わる教員にとって重要な情報を収集し、学部・学科の教員と情報共有することで、授業運営や各授業の質の向上に役立てる。

② 到達目標

新学習指導要領改訂の経緯及び基本方針を確認し、教員養成課程の授業運営及び授業の質的向上、授業改善に活かす。

③ 活動内容

新学習指導要領の動向と教育内容の主な改善事項を踏まえて、アクティブラーニングの視点をもった授業について、参加教員が意見交換を行いながら授業構築についての討議を行い、授業モデルを構築した。

④ 評価

教員の教育・研究指導能力の向上が重要課題として挙げられているが、新学習指導要領の動向を踏まえたモデル授業の構築を行うことを通じて、教員養成課程の授業設計を行う上での参考になった。また、課程認定や実地視察に備えた研究業績担保（相当性）、シラバス整備、カリキュラムの体系性などの要点を改めて確認することが出来た。

2)

① 概要（目的を含む）

「日韓音楽教育セミナー」が平成 29 年度全日本音楽教育研究会全国大会（平成 29 年 11 月 1 日 沖縄産業支援センター）において開催され、小佐野圭教授、平高典子教授、中村岩城教授、清水宏美教授が出席した。開催目的は、音楽教育が人間形成に果たす役割を国際的な視野で捉え、グローバルな視点で音楽教育を研究し推進するこ

とである。

② 到達目標

韓国における音楽教育の実態や改革の現状を知り、本学の音楽教育を発展させる情報を収集する。

③ 活動内容

韓国教員大学校音楽教育学科の閔庚勲教授が、「2030 年度の教育課程改訂に向けての韓国音楽教育の展望」のテーマで講演を行った。

④ 評価

韓国における音楽科改訂の3本柱（核心力量の強化・基礎素養の養成・夢と才能の育成）と、育成すべき6つの力（①音楽的感性 ②音楽的創意 ③音楽的疎通力 ④文化的共同力 ⑤音楽情報処理能力 ⑥自己管理力）は、我が国の学校音楽教育で育成すべき「資質・能力」との共通点があることが確認できた。また、韓国に於ける音楽教育の実情と転換点を迎えた現状が詳細に報告され、日本との共通点や相違点なども明らかに、他者の視点を借りながら、自国の状況を把握することができた。

(3) 研修会

1)

① 概要(目的を含む)

芸術学部の人材養成像の具現化に向け、創造的アプローチによる問題解決手法である「デザイン思考」の上級ファシリテーター講習（平成30年2月15日・16日 場所：港区浜松町 デザイン思考研究所）を橋本順一教授が受講、修了した。国内企業、団体、大学教員などから12名が参加して、デザイン思考を教育・指導する立場のマインドセット、スキルなどについて学んだ。

② 到達目標

認定デザイン思考ファシリテーターとして活躍するため、学習者の変化を支援するスキルを修得する。

③ 活動内容

ファシリテーターに必要となる知識、技能などのレクチャーと、実際にデザイン思考を教えるための講座の設計・実践と相互評価。

④ 評価

学習者の変化を支援するスキル、指導者としての技法と心構えを修得できた。
またアクティブラーニング技法という面からも参考になった。

2)

① 概要（目的を含む）

「芸術学部専任・非常勤合同研修会」を学部長が招集し実施した。（平成30年3月22日 場所：大学研究室棟）開催目的は、芸術学部教員団が学部・学科の教育目標や各種の教育課題を共有し、専任・非常勤が協働して教育活動の改善と発展を推進できるように芸術学部教員団のチーム力を強化する。

② 到達目標

各学科の教育目標の確認、改革方向性の確認、教育課題の抽出と共有、教育課題の

改善方策の探索、学科の競争優位性確保の方策などについての理解を深め、教員団チームとして教育活動が推進できるようになる。

③ 活動内容

学科教育目標の確認、改革方向性の確認を経て、小グループに分かれた討議によって、問題抽出、課題設定、改善方策、プレゼンテーションによる問題と課題の共有を行った。

④ 評価

学部教育目標や各種の教育課題を共有し、専任・非常勤が協働して教育活動の改善と発展を推進できる教員団チームの形成に役立つ研修となった。学科ごとの討議後は、参加者全員による学部情報交換会でチーム力を高めた。

3)

① 概要（目的を含む）

芸術教育学科 研修会

新学習指導要領をふまえた教職関連科目の授業構築

実施日：平成 29 年 12 月 2 日（土）17:00～19:00

場所：大学教育棟 2014 518 教室

参加者：計 11 名（専任：8 名、非常勤 3 名）

② 到達目標

- ・新学習指導要領の概要を知り、自己の授業形式や授業内容に適応させることができる。
- ・授業案を相互に確認し、学科の状況に適応しているか、意見交換をすることができる。
- ・昨年度のアクティブラーニングの実践をふまえ、発展的な授業を再構築することができる。

③ 活動内容

新学習指導要領の概要確認をする。今後の各担当の授業に反映させるためのワークと相互確認を行う。

<配布資料>

- ・学校教育法施行規則の一部
- ・教職課程コアカリキュラム対応表
- ・「芸術ワーキンググループにおける審議の取りまとめ」について
- ・新しい教育課程の趣旨の理解に向けて
- ・中学校学習指導要領抜粋

④ 評価

新学習指導要領改訂の要点を確認できた。

昨年度に実施をしたアクティブラーニングの実践に引き続き、今回の改訂の要点でもある「主体的・対話的で深い学び」の理解を深めることができた。

また、今後、理解及び導入が求められる「教科に関する科目」のコアカリキュラムについての構造を、すでに周知されている「教職に関する科目」のコアカリキュラムを例に挙げ把握することができた。

課題は、平成 30 年度から各自の授業に取り入れることができるかである。研修会では時間の関係上、到達目標であった「発展的な授業を再構築する」活動にまで至らなかったもので、平成 30 年度は早期に授業構築のための活動を実施したい。

(4) 調査・研究など

1)

① 概要(目的を含む)

高大連携・接続の観点で第 54 回全国高等学校美術工芸教育研究大会（平成 29 年 8 月 22・23 日 場所：静岡県コンベンションアーツセンター）に村山にな准教授と椿敏幸准教授を派遣し、情報収集を行い養成課程の授業改善に資する。

② 到達目標

高等学校の美術科、工芸科指導の現状の掌握と問題点の収集。大学学部の教員養成の在り方を検証するための手がかりとする。

③ 活動内容

全国から集まる高等学校教員による研究発表、ワークショップ、生徒作品展、基調講演(鈴木康広氏)が行われた。分科会では産業との関連を反映したものや、アクティブラーニングの成果をデータの的に証明しようとする研究発表など充実した内容であった。分科会に参加をして情報収集を行うと共に情報交換会にて高等学校教員との意見交換を行った。

④ 評価

指導要領改訂をふまえ、全国の美術科・工芸科教員と意見交換をすることができたことは大変有意義である。また、学部の教員養成推進に向け、高大連携・接続などの情報と課題を教員間で共有することができた。

2)

① 概要(目的を含む)

新学習指導要領に対応する授業研究の情報収集を目的に、第 49 回東京都中学校音楽教育研究大会（平成 30 年 2 月 22 日 場所：府中の森芸術劇場）に清水宏美教授が出席した。東京都中学校音楽科教員による研究授業、研究協議および文部科学省中等教育局教育課程課教科調査官の臼井学氏による指導講評と特別講演が行われた。新学習指導要領の趣旨を生かした【表現：歌唱】授業「江戸鳶木遣りの歌唱」や【表現：創作】授業「J-POP の特徴を生かした旋律創作」なども実施された。

② 到達目標

- ・中学校音楽科における指導の現状把握と問題点の情報収集。
- ・芸術学部芸術教育学科における教員養成の在り方や指導法を検証するための手がかりとする。

③ 活動内容

- ・研究主題「主体的・創造的に表現・鑑賞し、音楽文化の理解を深める授業を目指して - 協働的な学習による、歌唱と創作の授業づくり - 」に関する情報収集。
- ・【表現：歌唱】や【表現：創作】の研究授業や研究冊子、研究協議による情報

交換や意見交換。

④ 評価

- ・教育現場で生徒と教師が創り上げる授業を参観したうえで、研究協議会に参加し、文部科学省の調査官や中学校教員と大学教員が意見交換をすることができたことは大変有意義であった。
- ・収集した情報を基に、教員養成の充実に向けて情報や課題を学部・学科内の教員で課題を共有することができた。

3)

① 概要(目的を含む)

FD 研修に挙げられている「教員相互の授業参観の実施、授業方法についての研究会の開催」をふまえて、清水宏美教授が「玉川大学芸術学部 Music Festival」(平成 29 年 9 月 28 日 場所：ヤマハ銀座店)において、「新学習指導要領、これからの音楽教育の在り方」(全日本音楽教育研究会 平成 29 年 4 月 27 日)で授業構築研究を行ったアクティブラーニングの授業を公開実施した。

② 到達目標

公開授業とすることによって、授業成果の検証と改善資料の収集を行うと共に、授業改善の PDCA サイクルを実践する。

③ 内容

授業テーマは「ギターの特徴を理解して、仲間とバンドで『カントリーロード』を表現しよう!」である。清水宏美教授が大学生と共に授業を行うだけでなく、本学教員、他大学教員、保護者、一般の方を含めたアクティブラーニングの視点をもった研究授業として実施した。

④ 評価

授業後の意見交換をふまえ授業改善を行い、再度、玉川大学 FD 研修会として平成 29 年 12 月 19 日(月)に公開授業を実施し、授業改善の PDCA サイクルにつなげた。

4)

① 概要(目的を含む)

「玉川大学芸術学部芸術教育学科 2016 年度 アクティブラーニングを導入した授業研究」の報告冊子を作成

② 到達目標

アクティブラーニングを取り入れた授業の実践とその振り返りを報告書にまとめ、授業内容やその工夫などを共有して継続的な授業改善に資する。

③ 活動内容

平成 28 年度に実施したアクティブラーニングを取り入れた授業の実践、および実践結果をもとにした意見交換の内容を報告書にまとめる。

④ 評価

平成 27 年度の中教審の答申をふまえ、平成 28 年度に学科 FD 活動として実践した内容を冊子としてまとめた。これによって情報の共有が図られ、ジャンル横断的に相互評価がなされ、授業の継続的な改善に役立った。しかし、平成 28 年度前半の完成

予定が、年度末完成となり、平成 28 年度内に学科 FD 活動を深めるには至らなかったことが課題である。

4 昨年度（平成 28 年度）に提案された予定・課題の達成度について

セミナーや研修会への教員派遣は、教員養成改革、教育制度改革の進行及び次世代人材養成へ対応が求められる状況で、社会の要求を踏まえた学部の運営や教育計画の実行に有効であった。

5 今後（平成 30 年度以降）の予定・課題について

芸術学部では各学科の教育活動を相互に参観することや協働体制を強化してきたが、各学科や各プロジェクトの横断性や学部を超えた連携はもとより、社会との連携を図り、理論と実践の往還による教育体制を推進し、現代ニーズに適合した人材養成機関と研究機関としての機能を高めるためにも、積極的かつ継続的に教員団の資質能力やチーム力の向上を図る。

§ リベラルアーツ学部

1 FD 活動への取組理念・目標

本学部では、①学士課程教育の質保証、②学部・学科設置の趣旨と教育目標、③実効的なリベラルアーツ教育の実現、という観点から日頃の教育研究活動の改善へ向けた FD 活動を展開することを目標としている。

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

本学部における FD 活動の組織構成・役割は以下の通りである。

学部長・各主任…学部における FD 活動の方針について提案・助言する。

大学 FD 委員…学部における FD 活動全般をコーディネートする。また大学 FD 委員会で審議・報告された内容を拡大教授会にて報告する。

FD 研修会担当…学部で実施される専任教職員向けの FD 研修会についてコーディネートする。

※この他、所属教員全員が主体的に FD 活動に取り組む体制がとられており、教育内容・方法に関する情報交換は教員間で日常的に行われている。

3 平成 29 年度の活動内容

(1) 初年次教育の方向性に関する研修

① 概要（目的を含む）

リベラルアーツ学部の人材育成に資する、より効果的な 1 年次研修・初年次教育を実践するために、次年度以降の 1 年次研修の具体的なプランを検討する。また、研修と連動した初年次教育のあり方についても意見交換を行う。

② 到達目標

次年度以降の 1 年次研修および初年次教育カリキュラムを改善することができる。

③ 活動内容

1 年次研修の 2 日目に湯本富士屋ホテルにて実施した。参加者は 1 年生担任教員、学部長、各主任であった。具体的には以下の各項目について検討を行った。

- ・次年度以降の新入生研修のあり方について
- ・新入生研修の成果のアウトプット方法について
- ・秋学期「一年次セミナー102」の日程と授業内容について

④ 評価

検討内容を実践に反映させるのは次年度となるため、実質的な評価はそれ以降になるが、リベラルアーツ学部の初年次教育の要ともいえる 1 年次研修の内容について問題意識を共有できたことから、この時点での暫定的な目標達成はできたと考えられる。

(2) 「キャリアセミナー」の教育内容と方法の改善に関する研修

① 概要（目的を含む）

本学部 2 年生必修科目「キャリアセミナーⅠ」および「キャリアセミナーⅡ」の教育内容と教育方法を検討し、望ましいキャリア教育の在り方を考える。

② 到達目標

キャリア教育の一環として、この科目の教育内容・方法を具体的に改善することができる。

③ 活動内容

拡大教授会終了後等の時間に担任会を開催し、2年生各クラス担任が参加し、教育内容・方法を改善するためのディスカッションと研修を実施した。

④ 評価

キャリア教育の在り方に関して教員間で問題意識を共有でき、実際の教育内容と方法を改善することができた。また、学生のキャリアに対する意識を高め、教育効果を上げることができたと考えられる。

(3) 教育現場における防災に関する研修

① 概要（目的を含む）

学部専任教員の防災に関する意識を高めると同時に、教育現場において火災等災害発生時に迅速かつ的確な対処ができるよう、必要な知識とスキルを確認し、具体的な対処手順を実践的に理解する。

② 到達目標

火災等災害発生時の迅速かつ的確な対処ができるようになる。

③ 活動内容

平成30年3月1日（木）15:15～16:00、大学研究室棟 B107 会議室にて実施した。キャンパスセキュリティセンター職員による説明の下、火災、地震、ミサイル飛弾等災害発生時の対処方法の確認が行われた。

④ 評価

定量的な評価は実施していないが、キャンパスにおける火災等災害発生時の対処方法を具体的に理解できたという参加教員の意見が多く聴かれたことから、到達目標は概ね達成されたと評価できる。

(4) 平成29年度リベラルアーツ学部救命救急研修

① 概要（目的を含む）

学部専任教職員の救命救急に関する意識を高めると同時に、教育現場において救命救急時に迅速かつ的確な対処ができるよう、必要な知識とスキルを確認し、具体的な対処手順を実践的に理解する。

② 到達目標

救命救急時の迅速かつ的確な対処ができるようになる。

③ 活動内容

救命救急研修：平成29年8月10日（木）13:00～16:00 に実施した。AED、心肺蘇生法、基本的な応急処置法に関する研修が行われた。

④ 評価

参加教員から救命救急時の対処方法を具体的に理解できたという意見が多く聴かれたことから、到達目標は概ね達成されたと評価できる。

(5) 平成 29 年度リベラルアーツ学部 FD 研修会

① 概要（目的を含む）

リベラルアーツ学部の教育理念を実現し、**Tamagawa Vision 2020** に対応した大学教育の質保証を高めるため、学部の教育研究活動を点検調査し、専任教職員が認識を共有する。

② 到達目標

日頃の教育研究活動を教職員が点検し、教育目標や教育内容・方法、研究活動の在り方について教職員間で認識を共有することができる。

③ 活動内容

平成 30 年 2 月 27 日～28 日に湯本富士屋ホテルにおいて専任教員による研修会を実施し、以下の各項目について集中的に検討した。

(ア) リベラルアーツ学部の今後の学部改革へ向けて

(イ) 共同研究中間報告

- ・アジア地域における日本研究の現状に関する研究
- ・リベラルアーツ的学際性の実践的研究

(ウ) 平成 29 年度教育活動の振り返りと次年度教育計画

(エ) 次年度「一年次セミナー」および「二年次セミナー」の内容

④ 評価

(ア) 本学部の人材養成目標を確認し、それを実現するためのディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーについて教員間で共通認識を深めた上で、今後の学部改革の方向性について問題点を議論することができた。

(イ) 共同研究中間報告では、アジア地域における日本研究の現状に関して、主にシンガポール大学での実地調査の結果に基づく報告が行われ、本学部の **Japan Studies** の在り方をめぐる議論を深めることができた。また、リベラルアーツ的学際性の実践的研究の中間報告が行われ、「学際的異分野交流としての街歩き の考察」の観点から、本学部の特色である学際的教育・研究の在り方に関して議論を深めることができた。

(ウ) 平成 29 年度の教育活動を振り返ることにより問題点、改善点を捉えることができた。それを踏まえて平成 30 年度に予定される教育活動に関する検討を行い、「一年次セミナー」および「二年次セミナー」を含めて具体的な教育計画を立案することができた。

以上の点から、極めて意義深い研修会であったと評価される。

(6) 学外 FD セミナーへの参加

① 概要（目的を含む）

外部機関が主催する FD セミナーに本学部教職員が参加し、FD に関する研修を受けるとともに、大学教育や FD 活動に関する最新の情報や研究動向を把握し、それを今後の FD 活動に活かしていく。

② 到達目標

学外の FD セミナーに参加し、FD に関する最新の情報を得ることができる。

③ 活動内容

平成 30 年 3 月 4 日～5 日に行われた公益財団法人大学コンソーシアム京都主催「第 23 回 FD フォーラム」(於：京都産業大学)へ本学部 FD 委員(小嶋)が参加し、「FD のこれまでとこれから」等のセッションへ出席した。

平成 30 年 3 月 20 日～21 日に行われた京都大学高等教育研究開発推進センター主催「第 24 回大学教育研究フォーラム」(於：京都大学)へ本学部 FD 委員(小嶋)が参加し、各種の研究発表や実践報告から情報を得た。

④ 評価

大学教育と FD に関する最新動向や知見、ならびに他大学の活動状況を把握することができた。また、他大学の教職員と交流を図り、情報交換することができた点も意義深かった。

4 昨年度(平成 28 年度)に提案された予定・課題の達成度について

昨年度に提案された予定・課題は以下の通りであった。

- ① 自己点検と自己評価こそが Faculty Development の原点である。これまでと同様、大学教育の質保証を図るため、FD に対する意識をより高めるとともに、教員相互の研修を基盤とする FD 活動の機会を多く設け、本学部教員の資質向上を図り、近年の大学教育の変化に対応した教育力と研究力をさらに高めていくことが基本的課題である。
- ② 学部運営の PDCA(PDSA)サイクルの中に FD 活動を位置づけ、その成果を本学部の教育理念・教育目標の共有と実現に生かしていく仕組みを具体的に構築していくことを検討したい。
- ③ 平成 29 年度から本学部と文学部が改組されることに伴い、本学部のカリキュラムが新しくなり、また、教員の編成替えや新任教員の加入が行なわれる。学部学科の運営、新カリキュラムの運用、教員間のコミュニケーション等が適切に行なわれるように自己点検することが質保証にとって課題となる。
- ④ アクティブ・ラーニングの本質(「主体的な学び・対話的な学び・深い学び」)を見極めた上で、専門性や科目特性に応じて諸手法を適切に取り入れ、教育効果を高めていくことが昨年度に引き続き課題となる。さらに、その教育効果を妥当性の高い方法で的確に捉えていくことが課題になると思われる。

以下、それぞれの達成度について振り返る。

①に関しては、FD 研修会等の実施や日常的な教員相互のブリーフィングなどによって FD に対する意識は高まり、概ね実践されてきたと評価できるが、現今の大学教育に求められる教育力と研究力の一層の向上を目指す試みが必要である。

②に関しては、概ね実践されているが十分とは言えず、引き続き検討すべき課題である。

③に関しては、平成 29 年度から本学部の改組は予定通り行われ、学部の運営、新カリキュラムの運用、教員組織内のコミュニケーション等はほぼ適切に行われたと考えられる。今後の運営に当たっては自己点検を行い、本学部の改善と発展を図っていく必要がある。

④に関しては、各教員は科目の特性に応じてアクティブ・ラーニングを適切に取り入れ、教育効果を高めているように思われたが、アクティブ・ラーニングの教育効果を妥当性のある方法で的確に捉えることに関しては引き続き検討課題となる。

5 今後（平成 30 年度以降）の予定・課題について

- ① 自己点検と自己評価こそが Faculty Development の原点である。これまでと同様、大学教育の質保証を図るため、FD に対する意識をより高めるとともに、教員相互の研修を基盤とする FD 活動の機会を多く設け、本学部教員の資質向上を図り、現今の大学教育に求められる教育力と研究力をさらに高めていくことが基本的課題である。
- ② 学部運営の PDCA(PDSA)サイクルの中に FD 活動を位置づけ、その成果を本学部の教育理念・教育目標の共有と実現に生かしていく仕組みを具体的に構築していくことを今後も検討したい。
- ③ 平成 29 年度に改組された本学部の 2 年目以降の運営に当たっては、組織としての自己点検を的確に行いながら学部教育の質保証を図っていくことが課題となる。
- ④ アクティブ・ラーニングの本質（「主体的な学び・対話的な学び・深い学び」）を見極めた上で、専門性や科目特性に応じて諸手法を適切に取り入れ、教育効果を高めていくことが昨年度に引き続き課題となる。さらに、その教育効果を妥当性の高い方法で的確に捉えていくことが課題になると思われる。
- ⑤ ティーチング・ポートフォリオ等の考え方と手法を参考にして各自の教育活動を振り返り、一層の教育改善を図ることも課題となろう。

§ 観光学部

1 FD 活動への取組理念・目標

観光学部では、現在における観光の意義と役割、現状と課題を的確に理解し、適切な情報収集とその分析および異文化に対する理解を基礎に、高度な英語運用力を駆使してグローバル時代の観光ビジネス、地域活性化に貢献できる人材を養成する。

目標とする人材育成にあたり、教員全員が観光学部の理念、教育目標、そして、問題意識を共有することを目標とする。

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

観光学部長、観光学科主任、教務主任、学生主任、FD 担当教員が中心となって FD 活動を実施する。学部の担当教員と大学 FD 委員は連携して活動計画を取りまとめ、主として研修会・ワークショップの運営にあたる。

3 平成 29 年度の活動内容

(1) 研修会 「TAP 教育の体験と検討」

講 師 : 川本和孝先生、白山秀明先生 (TAP センター)

実施日 : 平成 29 年 9 月 21 日 (木) 16:00~17:00 (教授会終了後)

場 所 : 学内 TAP 施設

① 概要 (目的を含む)

TAP 施設の見学及び TAP 教員 (川本先生、白山先生) の解説等を通じてその教育効果を知り、観光学部教育カリキュラムの検討においてその一助とする。本学 TAP センターの教員説明のもと、TAP 施設を見学する。今年度は観光学部が設立して 5 年目を迎えるが、設立時に他校から赴任されたまたは新任採用された教員のみならず、これまで TAP を認知しつつも実際に体験しその教育効果を知る教員は極めて少ない。そこで、対外的にも教育効果が非常に高いとされる TAP 施設を見学し、改めてその教育効果を知ること、今後の観光学部教育カリキュラムの検討の一助としたい。「カウンセリング・ヒアリングスキルとその注意点」と題して、前年度から始まった担任によるヒアリング調査の実施、および、留学中にストレスを溜め込んだ学生に対するヒアリングの有用性を高めるため、本学のカウンセラーである神谷路子先生にご講演いただき、学生へのヒアリング時に活用できるスキルとその注意点を知る。

② 到達目標

TAP 施設を見学し、その教育効果を学生に説明できるようになる。

③ 活動内容

TAP 教員 (川本先生、白山先生) の先導のもと、一通り、学内の TAP 施設を見学した。また、要所要所で、観光学部教員が自ら TAP を体験し、場合によっては、学生インストラクターが目の前で TAP をするのを見学するなど、TAP の教育効果を学んだ。

④ 評価

他学部では、1 年次教育に活用するなど、TAP の教育効果を十分に活かしている現状がある一方で、今回の観光学部 FD の参加教員数が 6 名と半数にも満たなかったこ

とから、その教育効果を学部全体として認知するには不十分と言えよう。観光学部は、原則、2年次の夏から留学するにあたり、留学準備セミナーが開講される。当該クラスでは、2年次のみならず3年次、4年次の学生が混在するなど、学年を超えたクラス運営を余儀なくされる。そうした中でクラスとしての団結力を涵養するにあたり、TAP教育は極めて有用と思われる。今後も、学部全体としてTAP教育を活かせるよう定期的にTAPを観光学部FD活動の一環として組み入れていく必要がある。

(2) 研修会 「留学経験を有する学生への採用マーケットの需要動向」

講 師 : 岡崎仁美氏 (就職みらい研究所所長)

実施日 : 平成29年8月10日(木) 13:00~14:30

場 所 : 大学研究室棟 B107

① 概要 (目的を含む)

留学経験を有する学生に対する採用マーケットの需要動向を知るため、就職みらい研究所所長の岡崎仁美氏に留学経験を有する学生への採用マーケットの需要動向をご解説いただく。就職みらい研究所が独自に集約し分析した情報は十分に傾聴に値し、これから留学する学生、または、留学を終え就職活動を控えた学生らに対して、改めて留学の意義付けや就職活動で何をアピールするべきかを明確にしたい。

② 到達目標

留学する学生や留学を終え就職活動を控えた学生らに対して、留学の意義付けや就職活動で何をアピールするべきかを説明できるようになる。

③ 活動内容

就職みらい研究所所長の岡崎仁美氏に留学経験を有する学生への採用マーケットの需要動向をご解説いただいた。

④ 評価

留学が依然と比べてより一般的になっていることから、留学自体をアピールするのではなく、留学ではどんな困難を克服し、何を学び、どのように活かしたいのかを明確にする必要があることをご指摘いただいた。講演後は多くの質疑応答がなされるなど、本FD活動は活況に終わった。

(3) 学生による授業評価アンケート

① 概要 (目的を含む)

観光学部観光学科の科目において、授業改善を目的とした授業評価アンケートを実施した。今年度は春学期および秋学期に実施している。

② 到達目標

学生の学修達成度を測り、改善点を踏まえて今後の授業運営に資すること。

③ 活動内容

観光学部開講科目でマーク式、記述式の授業評価アンケートを実施した。データの集計結果は科目担当教員に配付し、活用している。

④ 評価

観光学部授業評価アンケートの結果は下記の通りである。

春学期授業評価アンケート回答数は昨年度723に対して、今年度は646と減少した。

主な原因として、授業評価アンケートの未提出等の人為的なミスによる。全体的な傾向として、19 ある質問項目のうち昨年度と比較して 11 項目が増加（内 1 項目が 0.2 ポイント増加、10 項目が 0.1 ポイント増加）、8 項目に変化はみられなかった。総じて上昇傾向にあると思われる。

秋学期授業評価アンケート回答数は昨年度 787 に対して、今年度は 493 と減少した。主な原因として、授業評価アンケートの未提出等の人為的なミスによる。10 項目に変化はみられず、5 項目が 0.1 ポイント増加し、2 項目が 0.2 ポイント増加し、2 項目が 0.1 ポイント減少していた。春学期と同様に上昇傾向にあると思われる。

【春学期授業評価アンケート全体結果】

観光学部全体								
		回答数(全体): 646						
分野	設 問	平均値	3時間以上	2時間～3時間未満	1時間～2時間未満	1時間未満	まったくしていない	無効回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.7	7.9%	10.9%	33.5%	41.0%	6.7%	2
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.5	5.0%	9.5%	28.1%	44.5%	12.9%	5
		この授業の平均値	よく当てはまる	やや当てはまる	どちらともいえない	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない	無効回答数
			5	4	3	2	1	
II	3 この授業に積極的に参加した。	4.2	39.7%	44.0%	12.4%	3.3%	0.6%	1
	4 シラバスは受講に役立った。	3.7	28.1%	29.7%	30.4%	7.9%	3.9%	2
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.2	45.3%	39.6%	10.9%	2.5%	1.7%	2
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.3	50.7%	33.6%	12.2%	1.9%	1.6%	1
	7 映像視覚教材(ビデオ、書面装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.2	49.3%	29.9%	15.7%	3.6%	1.6%	1
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	4.2	47.0%	33.2%	15.8%	2.8%	1.1%	2
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.2	44.3%	33.8%	16.7%	3.3%	1.9%	1
	10 基本的知識が得られた。	4.4	54.1%	32.9%	10.1%	1.6%	1.4%	1
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.1	40.4%	37.1%	16.9%	4.0%	1.6%	2
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	4.1	41.3%	35.8%	19.3%	2.6%	0.9%	4
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	4.1	39.1%	38.4%	16.3%	4.8%	1.4%	2
	14 学問的興味をかきたてられた。	4.1	39.2%	37.2%	16.9%	4.8%	1.9%	1
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.3	48.4%	34.9%	13.2%	1.9%	1.6%	2
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.2	44.7%	36.0%	15.8%	1.9%	1.6%	2
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	4.1	42.2%	34.2%	17.1%	4.0%	2.5%	2
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.3	53.6%	30.9%	11.2%	3.7%	0.6%	1
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.4	54.4%	30.5%	11.8%	2.6%	0.6%	1

【秋学期授業評価アンケート全体結果】

観光学部全体								
		回答数(全体): 493						
分野	設 問	平均値	3時間以上	2時間～3時間未満	1時間～2時間未満	1時間未満	まったくしていない	無効回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.6	6.3%	9.2%	32.0%	45.2%	7.3%	2
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.4	4.5%	5.7%	26.2%	48.4%	15.2%	5
		この授業の平均値	よく当てはまる	やや当てはまる	どちらともいえない	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない	無効回答数
			5	4	3	2	1	
II	3 この授業に積極的に参加した。	4.2	38.9%	40.6%	18.7%	1.4%	0.4%	0
	4 シラバスは受講に役立った。	3.7	26.0%	29.5%	34.3%	7.5%	2.6%	1
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.3	46.2%	39.6%	10.3%	3.4%	0.4%	0
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.4	54.0%	33.3%	10.3%	1.8%	0.6%	0
	7 映像視覚教材(ビデオ、書面装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.3	49.7%	33.1%	13.8%	2.2%	1.2%	0
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	4.3	49.2%	34.3%	13.6%	2.2%	0.6%	1
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.2	45.8%	36.5%	15.4%	1.2%	1.0%	0
	10 基本的知識が得られた。	4.4	51.7%	36.9%	10.3%	0.6%	0.4%	0
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.1	39.4%	38.9%	19.1%	1.8%	0.8%	0
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	4.1	37.9%	36.9%	21.3%	2.8%	1.0%	0
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	4.1	36.4%	42.9%	18.1%	1.8%	0.8%	1
	14 学問的興味をかきたてられた。	4.1	39.9%	38.1%	18.9%	2.0%	1.0%	2
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.3	48.3%	35.9%	13.2%	2.0%	0.6%	0
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.3	47.7%	34.9%	15.2%	1.8%	0.4%	0
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	4.2	44.6%	33.7%	17.8%	3.2%	0.6%	0
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.4	57.8%	29.8%	9.7%	2.2%	0.4%	0
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.5	59.4%	29.6%	9.3%	1.4%	0.2%	0

(4) 教職員相互の授業公開と参観

① 概要（目的・到達目標を含む）

教員相互で授業を参観し、各教員の教授法、教授内容について授業改善を行う。

② 活動内容

春学期、秋学期にそれぞれ1名ずつの教員の協力のもと、参観授業を行い、授業改善につながるよう担当教員と参加教員による振り返りを行った。

③ 評価

昨年と同様、参観できた教員が少なかったため、次年度も参観教員数を増やせるよう検討の余地がある。

4 昨年度（平成 28 年度）に提案された予定・課題の達成度について

昨年度の予定のうち、上述の通り、「TAP 教育の体験と検討」は参加教員人数が半数に満たないなど、その教育効果を学部全体として認知するには不十分と言えよう。観光学部は、原則、2 年次の夏から留学するにあたり、留学準備セミナーが開講される。当該クラスでは、2 年次のみならず 3 年次、4 年次の学生が混在するなど、学年を超えたクラス運営を余儀なくされる。そうした中でクラスとしての団結力を涵養するにあたり、TAP 教育は極めて有用と思われる。引き続き、必要と思われる FD 活動は臨機応変に実施していきたい。

5 今後（平成 30 年度以降）の予定・課題について

平成 29 年度と同様に、学部 FD 研修会、講演会、参観授業、授業評価アンケートを実施する。引き続き、観光学部が抱える課題も検討する必要がある。4 年生の 15%を占める卒業延期者は全員が卒業要件である TOEIC 700 点に未達である。1 期生に対しては卒業延期者に対しては、TOEIC 700 点の取得月に卒業を認めるなどの措置はあったものの、2 期生については、まだその教育的配慮は完備されていない。また、卒業延期者全員に対して、TOEIC スコア向上のための教育的支援をするにせよ、学生らの金銭的負担やその全体的なロードマップの検討など議論すべき課題は少なくない。

次年度は、障がいを持つ学生に対しての教育事例や配慮等に関する講演を学部 FD に組み込む予定である。これは、観光学部のみならず、大学全体として、その受入数が増大したことによって、その対応が喫緊の課題となっていることによる。開講年度からの FD 活動を通じて、目的として掲げられていた観光学部の理念、教育目標、そして、問題意識の共有については、ある程度達成されたが、新たに浮き彫りになった課題もあり、今後も紋切型の FD になることなく、有用性の高い FD を実施していく予定である。

3. 教師教育リサーチセンターの活動

1 教職課程 FD・SD 活動への取組理念

本センターは、大学における教職課程を運営するため、大学附置機関として設置された。主な業務内容としては、教職課程における学生支援と、教職に関する研究活動支援がある。研究活動支援の中には、教員養成における教職課程 FD・SD 研修も含まれており、教員養成の質を向上させることを理念・目標としている。

2 教師教育リサーチセンターにおける教職課程 FD・SD 活動の組織構成と役割

センター長、事務次長、課長を中心に教職課程 FD・SD 活動を計画し、課長補佐以下職員で研修会開催の実務を担当している。

3 平成 29 年度の活動内容

(1) 教師教育フォーラム

① 概要（目的を含む）

「教育改革を踏まえた質の高い教員養成に向けて」をメインテーマとし、フォーラムを開催した。本学の教育学研究科教職大学院と共催し、午前の部に教職大学院及び学部教員による分科会、午後からは講演・シンポジウムを実施した。本学教職員をはじめ、近隣教育委員会、全私教協加盟大学、教育実習先、学会関係者等、教師教育や教員養成に関わる多くの方々に広報を行った。

中央教育審議会による 3 つの答申以降、教育職員免許法・施行規則の改正・一部改正に関わる省令公布がなされた。そこで今後の教員養成に関する課題、質の高い教員養成に向けた大学の取組や、大学の果たす役割、さらに教員採用・研修担当の教育委員会の取組等について、講演、シンポジウム、分科会を通して、多くの方々と共に考える機会とした。

② 到達目標

200 名以上の出席者を目標に掲げた。

③ 活動内容

平成 29 年 10 月 28 日（日）10:00～17:00 於：大学教育棟 2014

テーマ：『教育改革を踏まえた質の高い教員養成に向けて』

【プログラム】

午前の部：

1. 分科会

4 分科会（国語教育、特別支援教育、情報教育、理科）

午後の部：

1. 講演「教育改革を踏まえた質の高い教員養成に向けて」

長谷浩之（文部科学省 初等中等教育局教職員課教員免許企画室長）

2. シンポジウム「大学と教育委員会とが一体となった教育改革の推進」

<シンポジスト>

渡邊直美（川崎市教育長）

平本正則（横浜市立仲尾台中学校）

長谷浩之（文部科学省初等中等教育局教職員課教員免許企画室長）

森山賢一（玉川大学教師教育リサーチセンター長、
大学院教育学研究科・教育学部教授）

<コーディネーター>

笠原陽子（玉川大学大学院教育学研究科教職大学院教授）

④ 評価

分科会 90 名、講演・シンポジウム参加者 159 名。延べ 249 名の出席者を迎え、盛況に終了し、目標達成となった。

（2）平成 29 年度 教職課程 FD・SD 研修会

① 概要（目的を含む）

「教育職員免許法等の改正と養成・採用・研修の一体化について」と題して、以下の「③活動内容」通りに研修会を実施した。

なお、各学部長、学科主任、教務主任、教務担当、教職担当は原則出席とし、関係部署所属の教職員にも出席を促した。

② 到達目標

以下活動内容の「内容（目的）」に示されているように、平成 27 年 12 月 21 日に示された中央教育審議会答申以降、教育職員免許法・施行規則の改正・一部改正に関わる省令公布を受け、教員養成大学としての具体的な役割について共通認識を持つ。さらに、装い新たに設置された「教職員支援機構」の取組を知る機会とする。

③ 活動内容

日 時：平成 30 年 3 月 6 日（火）10：00～11：30

場 所：大学研究室棟 B104

対 象：全学教職員

内 容（目的）：平成 27 年 12 月 21 日、中央教育審議会による「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」とした答申以降、教育職員免許法・施行規則の改正・一部改正に関わる省令公布がなされた。そこで、教員採用・研修を担う教育委員会の教員育成指標を具体的に学ぶことにより、教員養成大学として、その内容をどのように捉え、どのように対応することが望ましいのかを考える。また、教員養成・採用・研修の一体化の充実を目指す「教職員支援機構」の取組を通して教員養成大学の役割についても考える。

【プログラム】

1.開会挨拶 森山 賢一（教師教育リサーチセンター長、
大学院教育学研究科・教育学部教授）

2.講 演 「教職課程における質保証・向上と育成指標」
八尾坂 修（開智国際大学教育学部 教授・九州大学名誉教授）

「教員養成・採用・研修の一体化と教職員支援機構の取組」

高口 努（独立行政法人教職員支援機構理事）

④ 評価

八尾坂先生より、2017年に実施した「全国の教職課程における取組」に係わるアンケート(602 大学対象)の結果を通して見られる、教員養成大学及び教職課程における課題についての提言。さらに、教職課程において特色ある取組を行っている秀明大学のケースについて紹介があった。続いて、東京都、大阪府、福岡市の各教育委員会の定めた教員育成指標を資料に、指標作成の背景などを盛り込んだ具体的な解説がなされた。

続いて高口理事からは、独立行政法人教職員支援機構が先導していく教員育成指標策定の意義、養成内容の方向性、取組などについて説明がなされた。

いずれの講演も「養成・採用・研修」の一体化の流れを具体的にイメージすることが出来る内容で、教員養成大学にとっての課題と今後の実務に即した事項をご教授いただき、参加した教員、職員それぞれの立場で、理解を深めることができた。当日は、64名の出席者があった。

4 昨年度（平成 28 年度）に提案された予定・課題の達成度について

平成 29 年度は、「教師教育フォーラム」及び「教職課程 FD・SD 研修会」各 1 回を開催するように計画した。計画通り実施することができ、それぞれの目標も達成することができた。

5 今後（平成 30 年度以降）の予定・課題について

「教師教育フォーラム」及び「教職課程 FD・SD 研修会」各 1 回を開催するように計画したい。「教師教育フォーラム」は、引き続き「教職大学院」との共催により、大学全体としての教員養成への取組をふまえた内容で開催を予定している。

以上

4. ELF センターの活動

1 FD・SD 活動の取組に対する理念

教員ひとりひとりの教育の質が ELF プログラムの成果にとって重要である。したがって教員の資質向上が本プログラムの向上に必須であるというのが ELF センターの基本的な理念である。多くの ELF の授業が非常勤講師によって担当されているため、ELF センターは専任教員だけでなく非常勤講師の資質向上にも力を入れてきた。また、ELF センターにはさまざまな言語的・文化的背景を持つ教員がいる（韓国、フィリピン、トルコ、ウクライナ、ブラジルなど）ため、FD 活動は互いの知識や経験から広く学ぶことができる有意義な機会と捉えている。

2 ELF センターにおける FD・SD 活動の組織構成と役割

ELF センターの FD 活動の告知や内容は ELF センター会によって決められている。予算やサポート等もこの会議で審議される。FD 活動の内容が決定された後、ELF センターの作業部会の専任教員がその企画と実施を担当する。指導法、評価、e-learning など作業部会内にさまざまな分野に特化した教員のグループが存在し、Blackboard や ELF ワークショップなどの FD 活動を担当する。

3 平成 29 年度の活動内容

(1) 講演会・ワークショップの開催

① 概要

ELF センターは平成 29 年度に初めて ELTama と合同で CELF-ELTama Forum for English Language Teaching を開催した。

② 達成目標

- ・それぞれの FD 活動において非常勤講師に参加を促す。
- ・学園内の英語教師を集める。
- ・これらの活動によりセンターと英語教育関係の学会との関係、および教員同士のつながりを強める役割を果たす。
- ・玉川大学卒業生の中・高の英語の教員と言語学研究者の間の情報交換の場を提供する。
- ・これらの活動によってセンターの教員が一堂に会し、より良い教育実践に関する考えや研究成果を共有する機会とする。

③ 活動内容

以下のワークショップや発表大会が玉川大学の ELF Study Hall 2015 で開催された。

- ・8月22日の CELF-ELTama Forum for English Language Teaching フォーラム

④ CELF-ELTama フォーラムの評価

約 70 名の参加があり、ELF センター教員に日常の研究・教育の成果を発表する機会を与え、その内容を共有することができた点では有意義な会であった。ゲストスピーカーの発表が素晴らしく、また学内の英語教師達が協力できたことが非常に良かった。

たとの感想をいただいた。しかし、反省すべき点として、開催一ヶ月前のポスター完成だったため、十分な広報期間がなかった。少なくとも3ヶ月前にはイベントのポスターを完成させ、早めに広報を始めることができると良い。50人のELF教員中、10人程度の非常勤の先生の参加だったので、次回は非常勤の参加人数が増えると良い。最後に、発表した講師達が自らの発表を **The Centre for ELF Journal** に論文を執筆する機会がなかったため、平成30年度は両方可可能な仕組みを検討すると効果的と思われる。

(2) 研究会・ワークショップなど

① 概要

- ・Blackboard の使い方に関しての理解を深めるワークショップや講演会を開催した。
- ・ELF の理念に関する講義や意見交換を実施した。

② 達成目標

- ・非常勤講師が Blackboard の仕組みを理解し、円滑に利用できるようになる。
- ・ELF の授業においてブレンド型学修（通常授業にオンラインを取り入れる学修）や自主的学修を積極的に取り入れることができるようになる。
- ・ELF 研究について最先端の知識を深める。
- ・ELF の理念について教員間で知識を深める。
- ・言語教育について教員間で知識を深める。

③ 活動内容

- ・非常勤講師対象 Blackboard ワークショップ
(平成29年4月17・18日、10月9・10日)
- ・ELF センター、マクブライド・ポール准教授、ミリナー・ブレット助教、ディモスキ・ブラゴヤ助教による「ELF Assessment ワークショップ」
(平成28年5月29・30日)
- ・青山学院大学、ロバートソン・チャーリー准教授による「L2 Writing in an ELF Context」講義 (平成29年9月25日)
- ・ELF センター、黒嶋智美助教による「Conversation Analysis」講義
(平成29年11月20日・21日)
- ・University of Malaya 大学 (マレーシア) Stefanie Pillai 言語学部長による「Reconciling the local features of English pronunciation in the classroom」講義
(平成29年11月15日)
- ・ELF センター、マクブライド・ポール准教授、ミリナー・ブレット助教による「Informal Discussion for CELF Teachers」 (平成29年12月6・8日)

④ 評価

ELF センターの教員は Blackboard を学内で最も活用し多用している。非常勤講師も同様であり、ほぼ全ての ELF の授業でこのシステムを授業内の活動、評価、ブレンド型学修の目的で使用している。Blackboard に関するワークショップが効果的であることが見てとれる。ELF および言語意識に関するワークショップは教員の授業に対するアプローチに良い影響を与えてきた。ELF 所属教員対象のアンケート調査では、教員のほとんどが ELF の理念や概念をどのように授業に生かすかについて考慮して

いることが分かった。これらの教授方法の効果は学生の授業評価からも見る事ができた。平成 27～29 年の学生アンケートを比較したところ、平成 29 年の学生の方が ELF に対する理解がより深いという結果となり、学生自身に与える影響を理解しているようであった。テーマについては教員の興味のあるものを中心に選択しているが、普段は直接お話を聴く機会がない著名な学者へ単発的に講演をお願いすることもあり (Stephanie Pillai, Charles Robertson)、そういった機会が、教員の動機の向上にもつながっている。

(3) ELF センター教員オリエンテーション

① 概要

- ・ ELF センター教員のオリエンテーションを実施した。この行事は単に学期前の教員ガイダンスという要素だけではなく、ディスカッショングループ活動など様々な FD 活動を含んだ内容となっている。

② 達成目標

- ・ ELF 研究について最先端の知識を深める。
- ・ ELF の理念について教員間で知識を深める。
- ・ ELF クラスを効果的に運営する知識を深める。

③ 活動内容

- ・ 非常勤講師を含む全 ELF 教員のオリエンテーション (平成 30 年 3 月 26 日)

④ 評価

41 名が参加した。オリエンテーションの後半、FD 活動の一環として参加者をグループ分けして、20 分間のテーマ別 (評価、Blackboard の利用、多読など) グループディスカッション (5～10 人) を 2 回行った。参加者にとってとても有意義な機会となった。オリエンテーション後、専任教員間で実施内容についての改善点を協議する予定である。

(4) 学生による授業評価アンケート

① 概要

平成 29 年の春学期と秋学期の最後に、ELF センター独自のオンライン授業評価アンケートを実施した。学生は授業の中でスマートフォンまたはパソコンを使用してアンケートに回答するように指示された。アンケートは 35 項目あり、学生は教科書、教授方法、Blackboard システム、TOEIC、ELF、ELF Study Hall 2015 に関する意識、チューター制度、多読などについて評価した。調査結果は教育プログラム策定の基礎資料となり、それぞれの教員にも自身の授業運営改善のために共有されている。

② 達成目標

評価アンケート調査の目標は学生の ELF プログラムや教員の教授アプローチに対する観点や評価を得ることにあった。また、調査結果はそれぞれの教員に自分の教授法に対する学生の評価をフィードバックするという目的もあった。

③ 活動内容

春学期授業評価アンケートは 1,931 名 (全学生の 74%) から回答を得た。秋学期授業評価アンケートは 1,538 名 (全学生の 84%) から回答を得た。

④ 評価

これらのアンケートのデータは ELF プログラムに対する評価として使用され、平成 30 年度の教育プログラムの構築のために使用されてきた。概ね学生は授業に対してとても満足しているという結果であった。それぞれの教員に学生からの評価を配付し、自身の指導の改善に役立ててもらった。アンケートは今まで同じ内容で年 2 回実施してきたが、ほぼ同様の結果を確認できることから、平成 30 年度は 1 回の実施を予定している。

(5) 教員による授業内容アンケート

① 概要

平成 29 年の春学期と秋学期の最後に、ELF センター独自の教員対象のオンラインアンケートを実施した。アンケートは 46 項目あり、教員は教科書、教授方法、Blackboard システム、TOEIC、ELF に対する意識、センターから受けるサポートの質について評価した。調査結果は教育プログラムの計画や研究の目的で使用された。

② 達成目標

- ・多様な教員のニーズにどのように応え、より効果的にサポートを行うかについての情報を収集すること。
- ・カリキュラムを改革すること。

③ 活動内容

春学期アンケートは 20 名 (40%) の教員から回答を得た。秋学期アンケートは 26 名 (58%) から回答を得た。

④ 評価

今年度の春学期はあまり多くの教員から回答を得ることはできなかった。平成 28 年の秋学期と同じようにアンケートはメールに埋め込んだが多くの教員が答えなかった。ELF センターとしてどのように非常勤講師をサポートすれば良いかについて有意義な情報を得られる機会であるため、今後はより多くの回答を得られるようにアンケートへの協力を喚起したい。今回のアンケートから得られた情報は教科書の選定に役立ち、教員のサポートをどのように効果的に行うかについて知ることができた。また、教員の ELF に対する理解が深まっていることをアンケートから知ることができた。

(6) ジャーナルの出版

① 概要

平成 29 年 3 月、2 人の査読者（外部 1 名）がそれぞれの投稿論文を審査する The Center for ELF Journal の第 4 号を発行した。

② 達成目標

ジャーナルの達成目標は以下の通りである。

- ・授業運営を改善する。
- ・自発的学修についてのアイデアを共有する場を設ける。
- ・教員間で高い学識を探究する。
- ・ELF に対する学識を共有する。
- ・ELF センター所属の教員に効果的な FD の場を設ける。

③ 活動内容

- ・ The Center for ELF Journal 第 4 号を発行した。

第 4 号各 200 部を学内や学外に配付予定である。既刊分については玉川大学教育学術情報図書館にも寄贈し、ELF センターの HP にも掲載している。さらに、教員のアカデミックポータル (academia.edu, REAP, Google Scholar, Research Gate など) にも掲載している。

④ 評価

The Center for ELF Journal は教員に配付され、筆者自身も出版されたものに満足しているようであった。ELF センターはこのジャーナルをオンラインで閲覧できるように準備している。こうすることでより多くの研究者が我々の論文を手にとることができ、他の論文にも引用されるようになると考えられる。

図 1. The Center for ELF Journal 第 4 号



4 今年度（平成 29 年度）に提案された予定・課題の達成度について

今年度初めに提出された全ての予定・課題が実施された。その中でも主要なセンター発刊のジャーナルでは、ELF ブレンド学修に焦点を当て、活発な研究活動を記載している。表 1 は平成 29 年度の ELF 専任教員の研究活動をまとめたものである。52 の学会発表を実施し、平成 28 年度の 14 本から 2 倍以上の 29 本の論文を投稿・出版した。

表 1. 平成 29 年度の ELF 専任教員の研究活動

発表・出版	数
国際発表	22
国内発表	30
論文を投稿・出版	29

表 2. 平成 29 年度の ELF 専任教員の論文を投稿・出版

査読の有無	論文・著書	著者
有	Leichsenring, A. (2017). Japanese learner preferences for varieties of English and oral assessment, <i>Journal of Asia TEFL</i> , 14(1), 179-188. http://dx.doi.org/10.18823/asiatefl.2017.14.1.13.179	Andrew Leichsenring
有	Leichsenring, A. (2017). Classroom-based strategies on improving speaking and listening skills through the voices of Japanese learners. <i>The Center for ELF Journal</i> , 3, 11-20. Retrieved from: http://www.tamagawa.ac.jp/celf/research/pdf/celf_journal_final3.pdf	Andrew Leichsenring
有	Milliner, B., & Barr, B. (2017). Computer-assisted language tests for the English classroom: Blackboard® tests and Google Forms. <i>The Center for English as a Lingua Franca Journal</i> , 3, 67-79. Retrieved from: http://www.tamagawa.ac.jp/celf/research/pdf/celf_journal_final3.pdf	Brett Milliner & Blair Barr
無	Ishimaki, K., & Milliner, B. (2017). M-Reader in the Center for English as a Lingua Franca. <i>The Center for English as a Lingua Franca Journal</i> , 3, 87-92. Retrieved from: http://www.tamagawa.ac.jp/celf/research/pdf/celf_journal_final3.pdf	Brett Milliner & Kensaku Ishimaki
無	Cote, T., Dimoski, B., & Leichsenring, A. (2017). Report of the Center for English as a Lingua Franca tutor service. <i>The Center for English as a Lingua Franca Journal</i> , 3, 93-97. Retrieved from: http://www.tamagawa.ac.jp/celf/research/pdf/celf_journal_final3.pdf	Travis Cote, Blagoja Dimoski & Andrew Leichsenring
無	Yujobo, Y. J., Hsu, J., Chaikul, R., & Leichsenring, A. (2017). New learning and teaching modalities: The reinvented learning spaces at ELF Study Hall 2015, Tamagawa University. <i>The Center for English as a Lingua Franca Journal</i> , 3, 80-86. Retrieved from: http://www.tamagawa.ac.jp/celf/research/pdf/celf_journal_final3.pdf	Yuri Jody Yujobo, Jesse Hsu, Rasami Chaikul & Andrew Leichsenring
無	Milliner, B., & Dimoski, B. (2017). A report on faculty development and research at the Center for English as a Lingua Franca. <i>The Center for English as a Lingua Franca Journal</i> , 3, 98-115. Retrieved from: http://www.tamagawa.ac.jp/celf/research/pdf/celf_journal_final3.pdf	Brett Milliner & Blagoja Dimoski

有	Oda, M. (2017). CELF Reflection: A journey to the establishment of a university ELF program. <i>JACET ELF SIG Journal</i> , 1, 3-17. Retrieved from: https://www.academia.edu/32219207/CELF_Reflection_A_Journey_to_the_Establishment_of_a_University_ELF_Program_1	Masaki Oda
有	Oda, M. (2017). Native speakerism and the roles of mass media in ELT. In J. Matinez Agudo (Ed.), <i>Native and Non-Native Teachers in English Language Classrooms. Professional Challenges and Teacher Education</i> (pp. 99-116). Berlin, Boston: De Gruyter Mouton. Retrieved from: https://www.degruyter.com/viewbooktoc/product/468790	Masaki Oda
有	Milliner, B. (2017). One year of extensive reading on smartphones: A report. <i>The JALT CALL Journal</i> , 13(1), 49-58. Retrieved from: http://journal.jaltcall.org/articles/13_1_Milliner.pdf	Brett Milliner
無	Cote, T., & Milliner, B. (2017). Digital literacies in the Japanese university context: preparing for a study abroad program. In J. Colpaert, A. Aerts, R. Kern & M. Kaiser (Eds.), <i>CALL in Context Proceedings</i> (pp. 183-190). Berkeley: University of California.	Travis Cote & Brett Milliner
無	Milliner, B. (2017). Using online extensive listening to promote language input in an EFL setting. In J. Colpaert, A. Aerts, R. Kern & M. Kaiser (Eds.), <i>CALL in Context Proceedings</i> (pp. 575-581). Berkeley: University of California.	Brett Milliner
有	Milliner, B., & Cote, T. (2018). Faculty adoption, application and perceptions of a CMS in a university English language program. In B. Zou and M. Thomas (Eds.), <i>Integrating Technology Into Contemporary Language Learning and Teaching</i> (pp.161-175). Hershey PA: IGI Global	Brett Milliner & Travis Cote
有	Dimoski, B. & Leichsenring, A. (2017). Learner perceptions of good teacher attributes: Japan and other Asian contexts. In: <i>IAFOR Dubai 2017, Educating for Change, East Meets West: Innovation and Discovery</i> . [online] Nagoya: The International Academic Forum, pp.23-42. Retrieved from: http://papers.iafor.org/wp-content/uploads/conference-proceedings/II CLL/IICLLDubai2017_proceedings.pdf	Blagoja Dimoski & Andrew Leichsenring

有	Zheng, D., Schmidt, M., Hu, Y., Liu, M., & Hsu, J. (2017). Eco-dialogical learning and translanguaging in open-ended 3D virtual learning environments: Where place, time, and objects matter. <i>Australasian Journal of Educational Technology</i>, 33(5), 107-122. Doi.org/10.14742/ajet.2909	DP Zheng (University of Hawaii), M Schmidt (University of Cincinnati), Y Hu (University of Vermont), M Liu (University of Hawaii), & Jesse Hsu
有	Leichsenring, A. (2017). Positive teacher attributes through the eyes of the learner: In Japan and a wider Asian context. In <i>The Asian Conference on Education and International Development (Official Conference Proceedings)</i>, Kobe, 327-344. Retrieved from: http://papers.iafor.org/wp-content/uploads/conference-proceedings/ACEID/ACEID2017_proceedings.pdf	Andrew Leichsenring
有	Leichsenring, Andrew R. (2017) The development of preservice teachers' professional practice and identity through immersion in a school community. PhD thesis, Queensland University of Technology. Retrieved from: https://eprints.qut.edu.au/109489/	Andrew Leichsenring
有	Leichsenring, A., & Dimoski, B. (2017). Japanese learner perceptions on the making of a good teacher. In W. Feng, P. Lin & D. Tay (Eds.), <i>Rethinking ELT in higher education: Proceedings of the 11th international symposium on teaching at tertiary level</i> (pp. 254-271). Hong Kong: The Hong Kong Polytechnic University.	Andrew Leichsenring & Blagoja Dimoski
有	Leichsenring, A. (2017). The influence of parenthood and mature-age on preservice teachers' professional identity development and relationships. <i>International Journal of Management and Applied Science</i>, 3(11), 51-54. Retrieved from: http://www.ijraj.in/journal/journal_file/journal_pdf/14-424-151738099751-54.pdf	Andrew Leichsenring

有	Leichsenring, A. (2017). The development of preservice teachers' philosophy of teaching through a school-based immersion pathway. <i>International Journal of Management and Applied Science</i> , 3(11), 37-42. Retrieved from: http://www.ijraj.in/journal/journal_file/journal_pdf/14-424-151688077237-42.pdf	Andrew Leichsenring
有	Mishina-Mori, S., Nagai, Y., & Yujobo, Y.J. (2017). The use of connectives in Japanese-English bilingual children's elicited narratives. The 40th Japanese Association of Sociolinguistic Sciences Conference Proceedings. International Academic Publishing Co, 134-137.	Satomi Mishina-Mori (Rikkyo University), Yuki Nagai (Rikkyo University), & Yuri Jody Yujobo
有	Mishina-Mori, S., Nagai, Y., & Yujobo, Y.J. (2018). Referent introduction and maintenance in the English narratives of monolingual and bilingual children. <i>Intercultural Communication Review</i> , 16, 5-16.	Satomi Mishina-Mori (Rikkyo University), Yuki Nagai (Rikkyo University), & Yuri Jody Yujobo
無	Milliner, B., & Cote, T. (2017). Forward to special issue Tech@Tamagawa. <i>Accents Asia</i> , 9(2), i-ii. Retrieved from: http://www.issues.accentsasia.org/issues/9-2/Milliner_and_Cote.pdf	Brett Milliner & Travis Cote
有	Milliner, B. (2017). Five online resources for extensive listening in the Japanese EFL classroom. <i>Accents Asia</i> , 9(2), 1-10. Retrieved from: http://www.issues.accentsasia.org/issues/9-2/Milliner_and_Cote.pdf	Brett Milliner
有	Cote, T., & Milliner, B. (2017). Preparing Japanese students' digital literacy for study abroad: Is more training needed? <i>The JALT CALL Journal</i> , 13(3), 187-197. Retrieved from: http://journal.jaltcall.org/articles/13_3_Cote.pdf	Travis Cote & Brett Milliner
有	Milliner, B. (2017). Love your part-time teachers: Five supportive steps full-time faculty could take. <i>OnCUE Journal</i> , 10(3), 172-177. Retrieved from: http://jaltcue.org/current_issue	Brett Milliner

有	Sunaga, M., & Kuroshima, S. (2017). Practices for explaining the test results of internal exposure to radioactive materials, 『社会学研究科年報』 24 号, pp. 7-18.	Masafumi Sunaga (St. Paul University) & Satomi Kuroshima
有	Kawashima, M., Yoda, I., Kuroshima, S., Ota, S., & Yukioka, T., (2017). Interdisciplinary study for effective triage using Sociology and Engineering. Japanese Journal of Disaster Medicine, 22, 189-198.	Michie Kawashima (Kansai Gaidai College), Ikushi Yoda (National Institute of Advanced Industrial Science & Technology), Satomi Kuroshima, Shoichi Ota (Keisen Clinic), & Tetsuo Yukioka (Tokyo Medical University)
有	Oda, M (2018) Collaboration and Collaborative Practices. In John I. Liantas (Ed.), The TESOL Encyclopedia of English Language Teaching, First Edition, (pp.1-6). doi:10.1002/9781118784235.eelt0011	Masaki Oda

5 今後（平成 30 年度以降）の予定・課題について

平成 30 年度には、ELF の授業規模がさらに拡大し、約 2,300 人の学生の英語教育を担うことになる。また、6 人の新しい教員を迎え入れることになり、さらにさまざまな国籍の専任教員と非常勤講師で ELF センターが構成されることになる。FD 活動はこれらの背景を考慮した試みが必要であると認識している。我々は以下の項目の実施によって ELF プログラムをより効果的に運営するよう努めたい。

1. 効果的な教員オリエンテーション
2. 春や秋学期の Blackboard と e-learning のワークショップ
3. ELF の概念を生かした教授法に関する講義
4. 言語教育に関する講義や意見交換を実施する機会
5. 学会と共同で実施される英語教育に関する研究会
6. 学生や教員による授業評価アンケート
7. また、The Center for ELF Journal のプロフィールをあげる

5. ユニバーシティ・スタンダード科目の「授業評価アンケート」

1. アンケート実施概要

(1) 概要

平成29年度春・秋学期において、それぞれ最終授業にて実施（一部、科目担当者の都合等により補講・定期試験期間中に実施）した。対象科目はユニバーシティ・スタンダード（以下、US）科目である。

春学期：US 科目（但し、実験実習実技科目、教職関連科目群、資格関連科目群、工学部開講の US 科目、その他一部の科目は除く）

秋学期：US 科目（但し、実験実習実技科目、教職関連科目群、資格関連科目群、工学部開講の US 科目、その他一部の科目は除く）

実施担当者数、実施開講クラス数及び回答学生数は次のとおりであった。

実施担当者数：春学期＝225 名／237 名（94.9%）

秋学期＝203 名／212 名（95.6%）

実施開講クラス数：春学期＝384 クラス／412 クラス（93.2%）

秋学期＝338 クラス／358 クラス（94.4%）

回答学生数：春学期＝13,023 名／15,976 名（81.5%）

秋学期＝11,617 名／14,918 名（77.9%）

(2) 実施時期

春学期：7 月 17 日（月）～7 月 21 日（金）

秋学期：1 月 25 日（木）～1 月 31 日（水）

※春・秋学期ともに一部の科目については補講・試験期間中に実施。

(3) 実施方法

春学期・秋学期ともに、科目担当者がアンケート用紙を配付、実施した。回答用紙の回収についてはクラスの代表(科目担当者が指名)が回収し、最寄りの事務室に提出することとした。

(4) 調査用紙 （p.120 参照）

2. 集計結果及び公表 （p.76～103 参照）

集計は前年度及び今後のデータの比較分析を考慮し、クラス別及び次の分類別に行った。

US 科目全体、玉川教育・FYE 科目群「一年次セミナー101」、「一年次セミナー102」、人文科学科目群、社会科学科目群、自然科学科目群、学際科目群、言語表現科目群

また、集計結果は、クラス別集計については科目担当者にのみフィードバックし、上記 8 分類についてはその平均値をホームページで公表している。

平成29年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目全体

回答数(全体): 13023

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学修(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.0	165

分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	2 この授業に積極的に参加した。	3.9	9
	3 この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.5	30
	4 学生の自主的・発展的な学修内容	※【II】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。	

分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.0	42
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.0	26
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.0	27
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.9	18

分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.0	13
	10 基本的知識が得られた。	4.2	15
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.0	29
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.8	21
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.9	31
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.9	45

分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.1	18
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.0	21
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.9	37

分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.1	55
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.2	55

集計・分析結果	II-4 学生の自主的・発展的な学修内容 (複数回答可)	
	授業の内容について友人と議論をした。	49.2%
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	24.2%
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	41.6%
	その他	4.1%

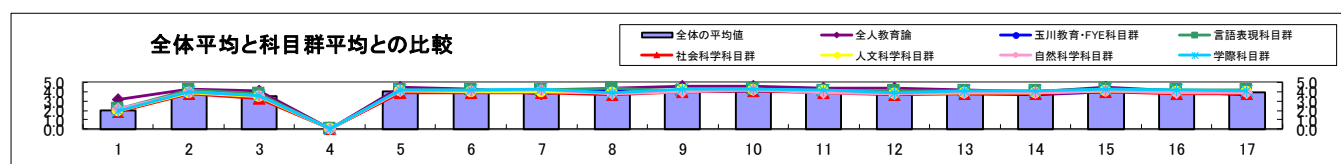
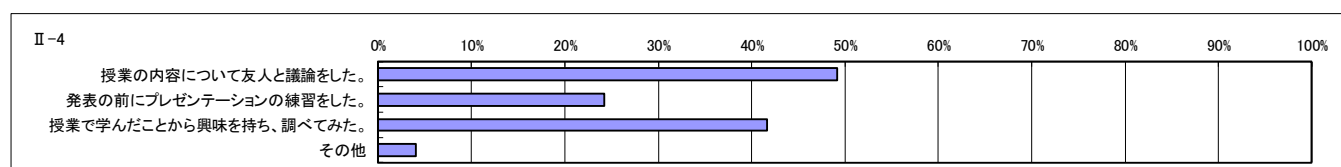
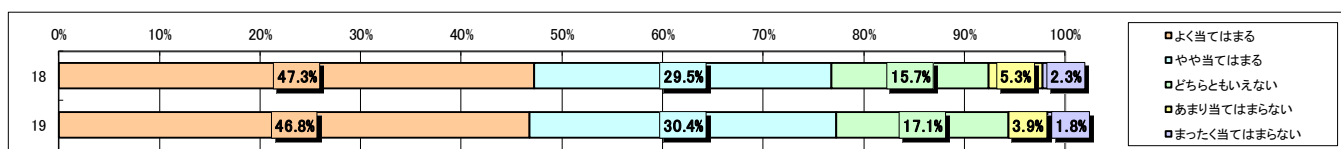
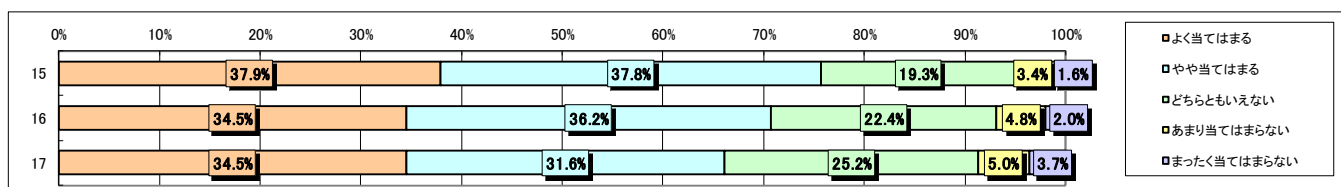
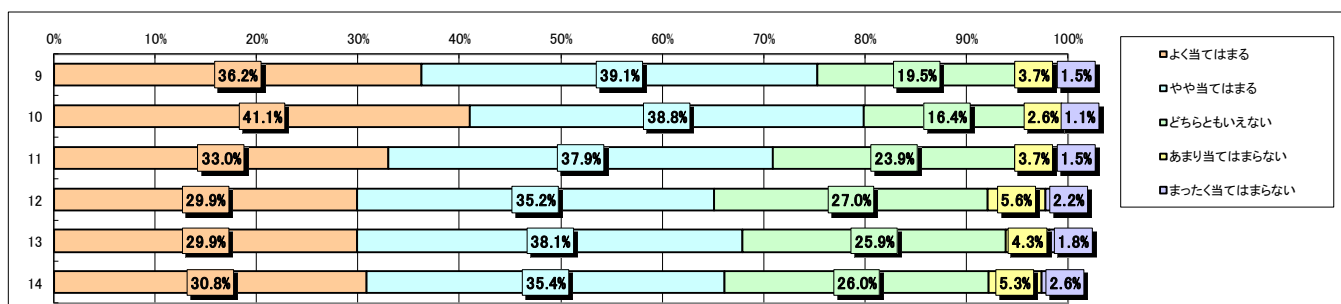
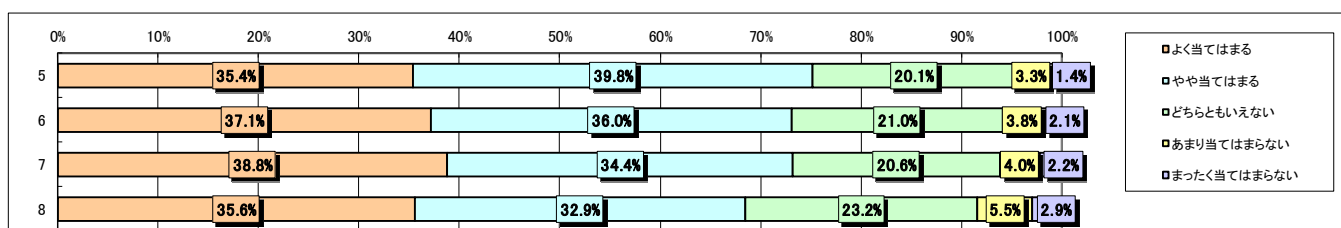
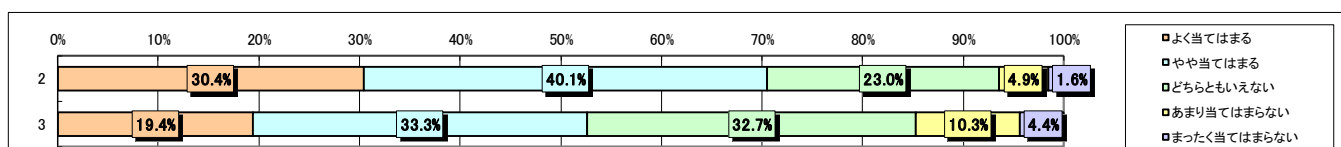
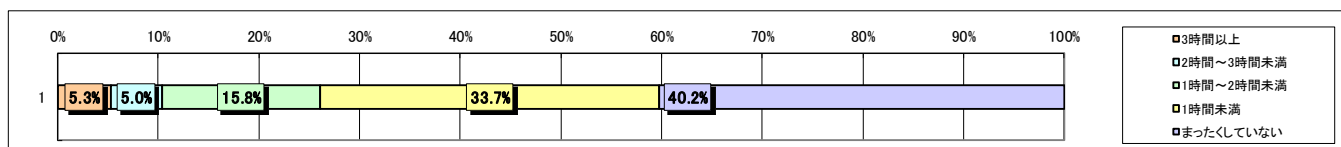
◎平均値について

質問項目毎に「無効」を除いた平均値

平均値 = (「5」回答数 × 5 + 「4」回答数 × 4 + 「3」回答数 × 3 + 「2」回答数 × 2 + 「1」回答数 × 1) / 回答数小数点第2位四捨五入

◎無効数について

無答、複数回答、記入ミスの数



平成29年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 玉川教育・FYE科目群 一年次ゼミナール 101

回答数(全体): 1780

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学修(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.0	21

分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	2 この授業に積極的に参加した。	4.0	0
	3 この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.6	3
	4 学生の自主的・発展的な学修内容 ※【II】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。		

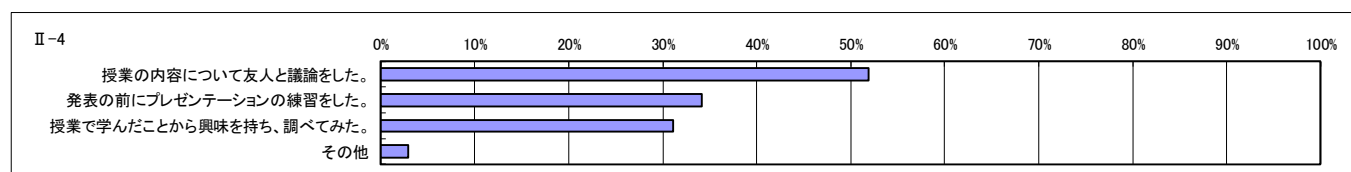
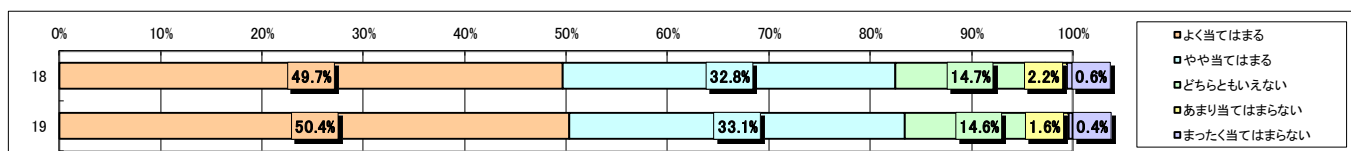
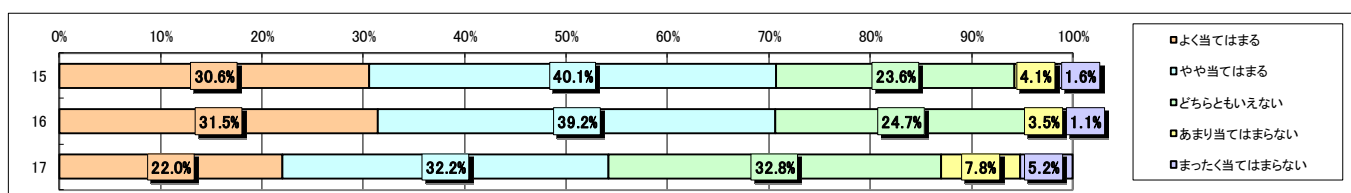
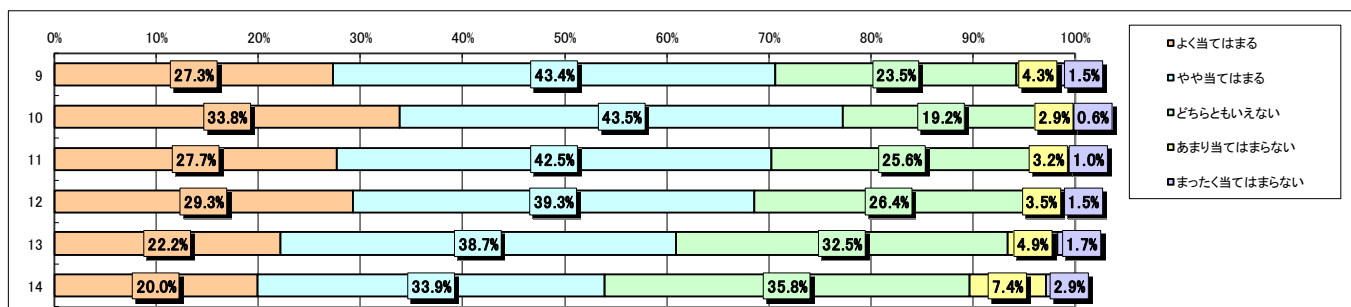
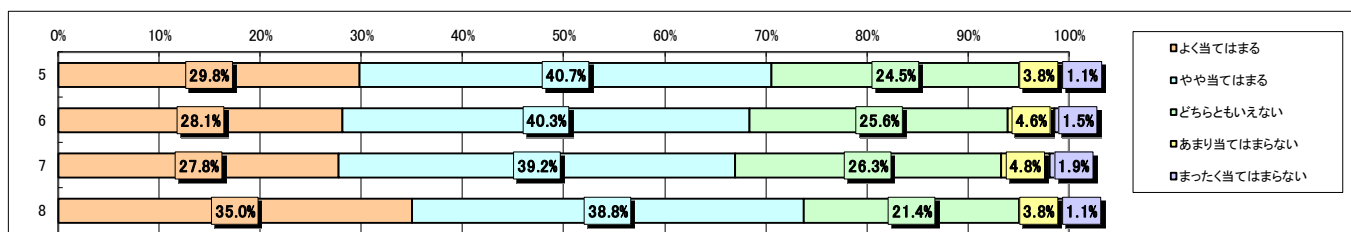
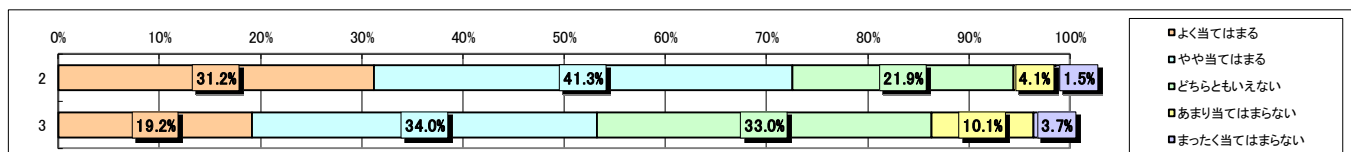
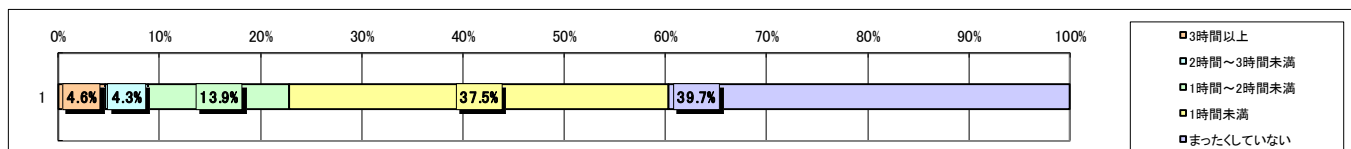
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	3.9	8
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	3.9	4
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	3.9	4
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	4.0	1

分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	3.9	0
	10 基本的知識が得られた。	4.1	0
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.9	4
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.9	3
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.7	3
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.6	6

分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	3.9	1
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.0	0
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.6	3

分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.3	1
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.3	1

集計・分析結果	II-4 学生の自主的・発展的な学修内容 (複数回答可)	
	授業の内容について友人と議論をした。	51.9%
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	34.1%
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	31.1%
	その他	2.9%



平成29年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 人文科学科目群

回答数(全体): 2520

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学修(予習、復習、課題など)にかけた時間	1.9	40

分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	2 この授業に積極的に参加した。	3.9	0
	3 この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.4	3
	4 学生の自主的・発展的な学修内容 ※【II】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。		

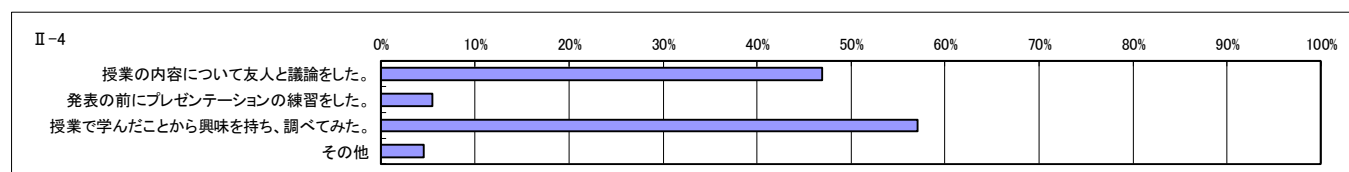
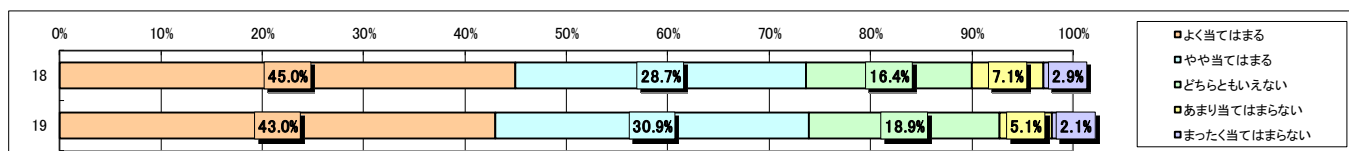
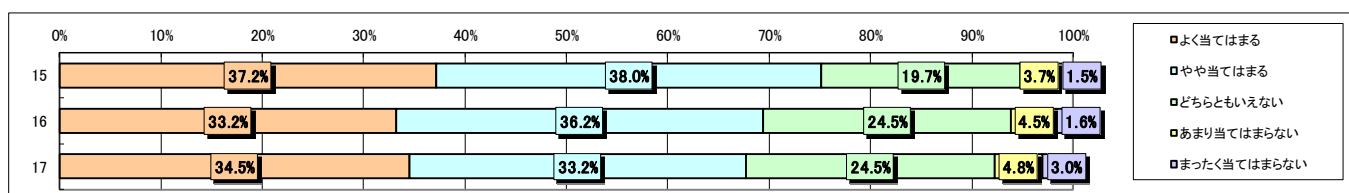
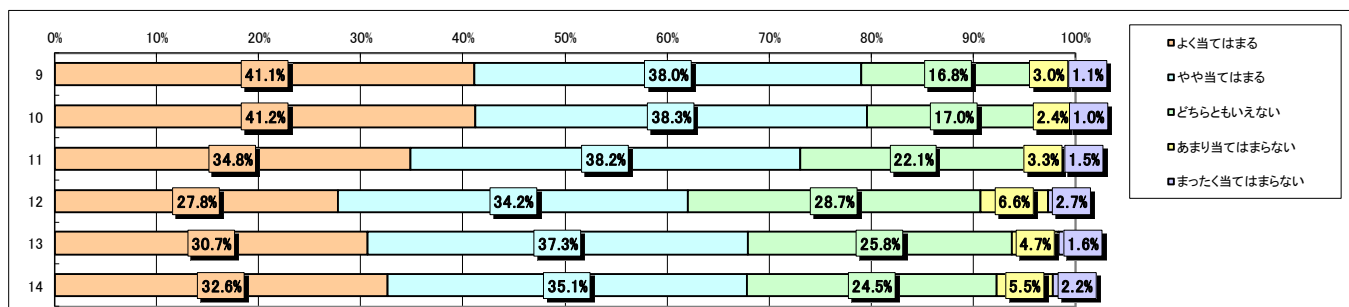
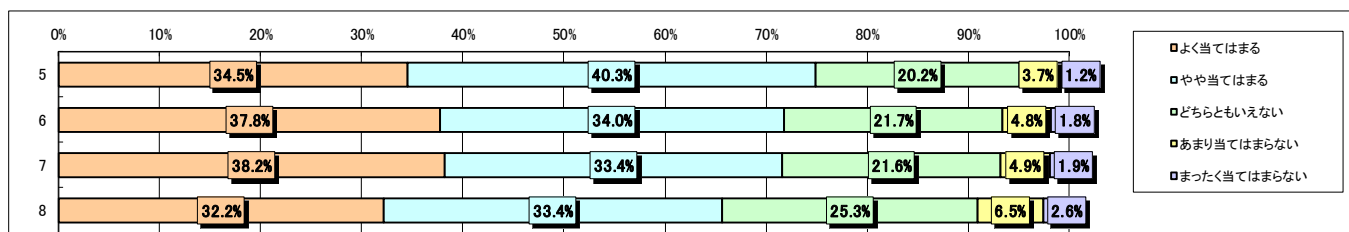
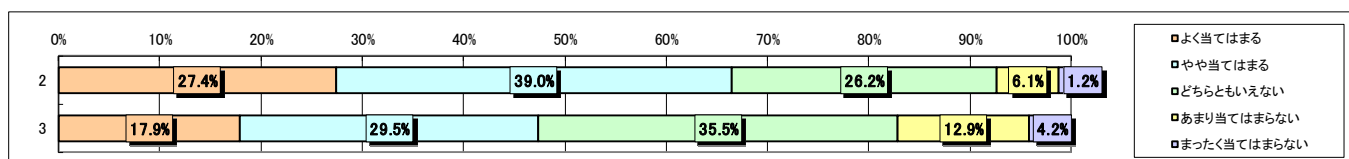
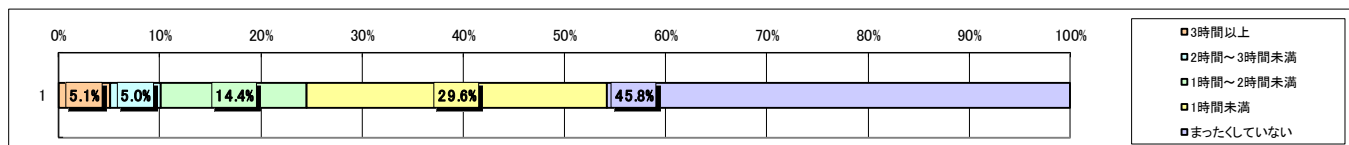
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.0	6
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.0	1
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.0	5
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.9	2

分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.2	1
	10 基本的知識が得られた。	4.2	0
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.0	3
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.8	2
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.9	5
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.9	5

分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.1	1
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.9	3
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.9	4

分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.1	11
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.1	12

集計・分析結果	II-4 学生の自主的・発展的な学修内容 (複数回答可)	
	授業の内容について友人と議論をした。	46.9%
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	5.5%
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	57.0%
	その他	4.5%



平成29年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 社会科学科目群

回答数(全体): 2705

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学修(予習、復習、課題など)にかけた時間	1.9	35

分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	2 この授業に積極的に参加した。	3.8	2
	3 この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.3	6
	4 学生の自主的・発展的な学修内容 ※【II】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。		

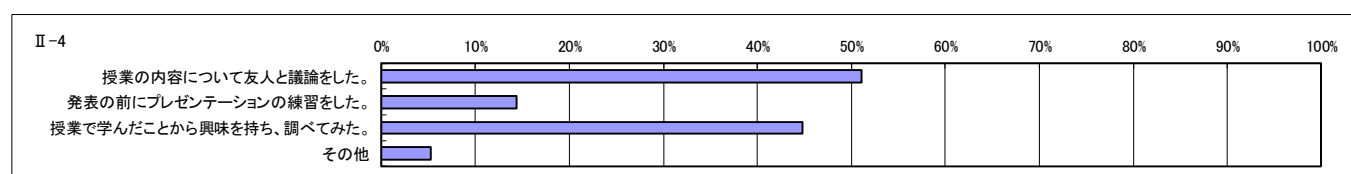
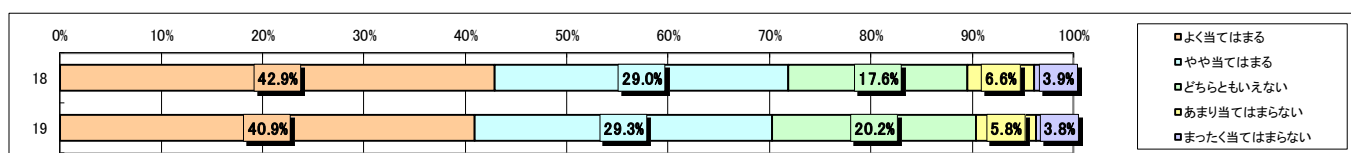
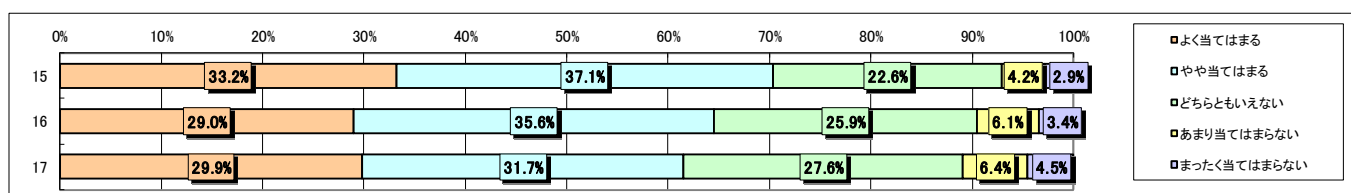
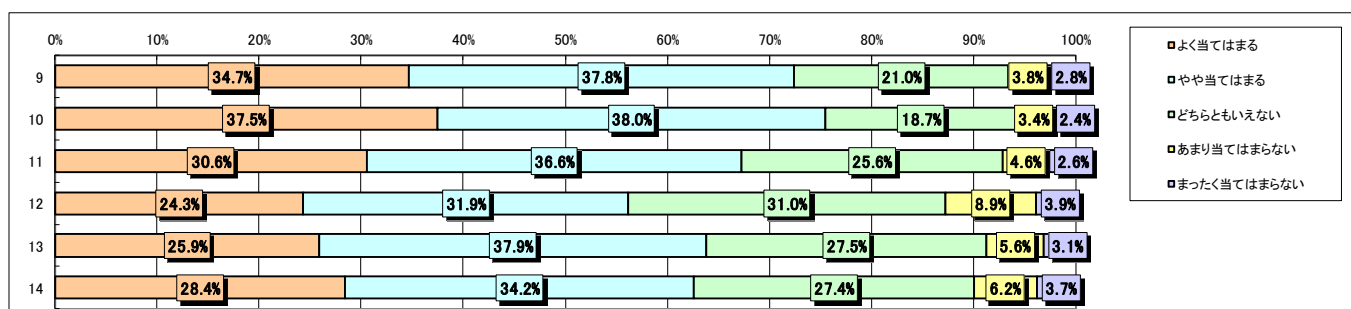
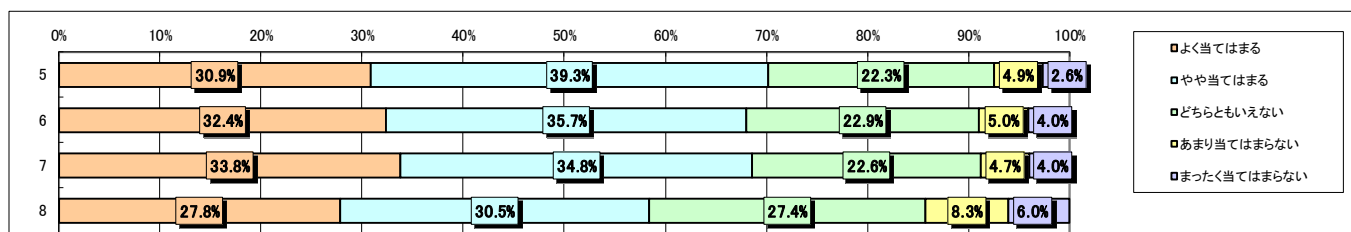
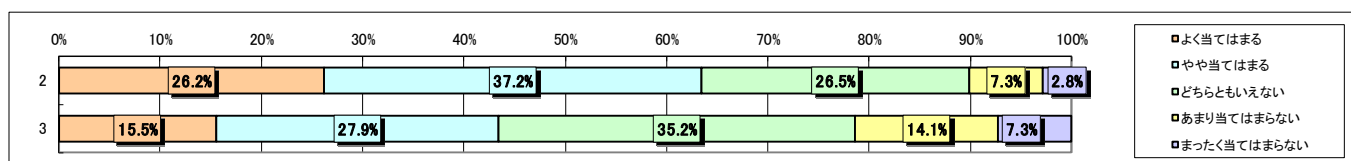
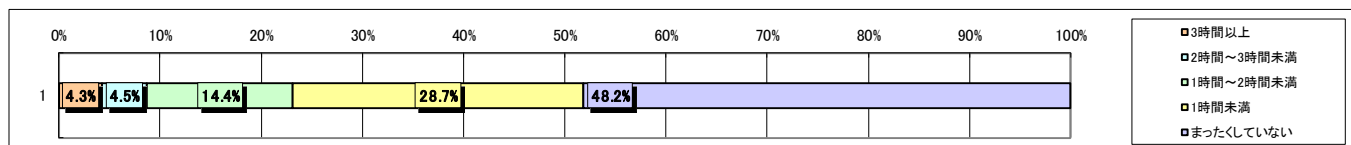
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	3.9	7
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	3.9	10
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	3.9	4
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.7	3

分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.0	2
	10 基本的知識が得られた。	4.0	7
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.9	6
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.6	6
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.8	11
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.8	11

分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	3.9	5
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.8	5
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.8	9

分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.0	12
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.0	13

集計・分析結果	II-4 学生の自主的・発展的な学修内容 (複数回答可)	
	授業の内容について友人と議論をした。	51.1%
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	14.4%
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	44.8%
	その他	5.2%



平成29年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 自然科学科目群

回答数(全体): 2288

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学修(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.1	25

分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	2 この授業に積極的に参加した。	3.9	2
	3 この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.5	5
	4 学生の自主的・発展的な学修内容 ※【II】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。		

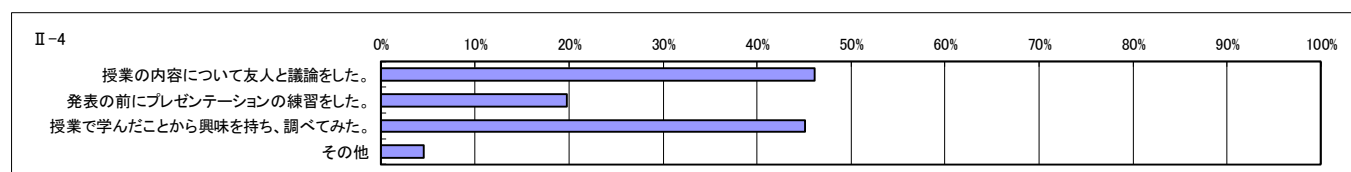
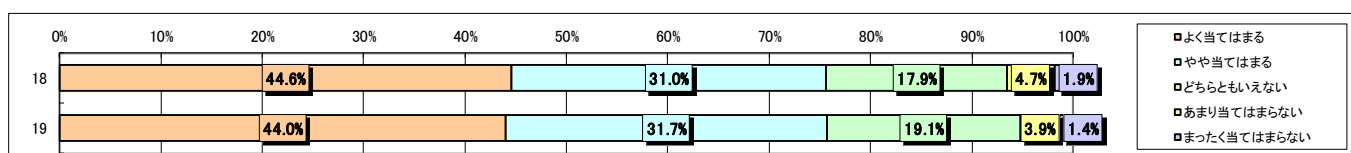
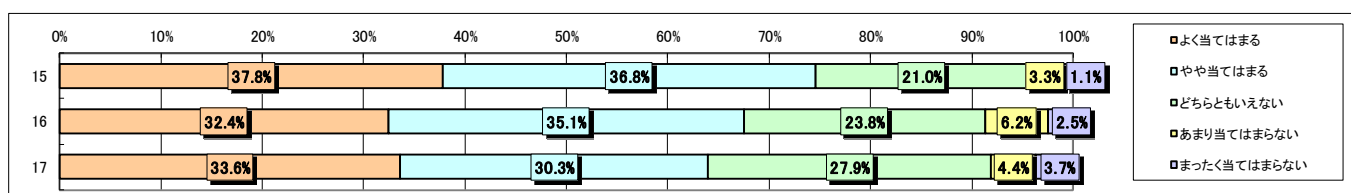
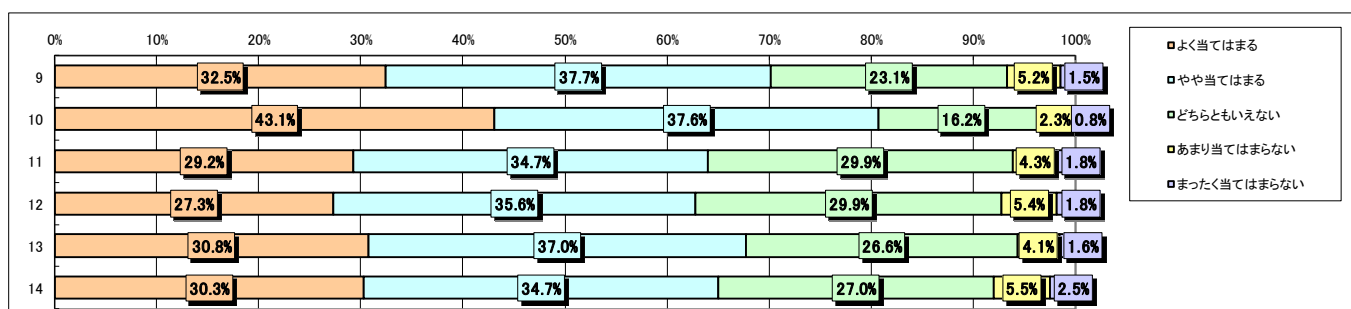
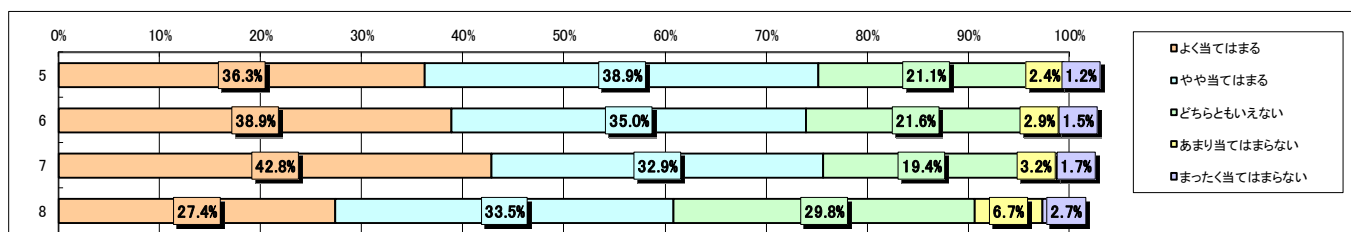
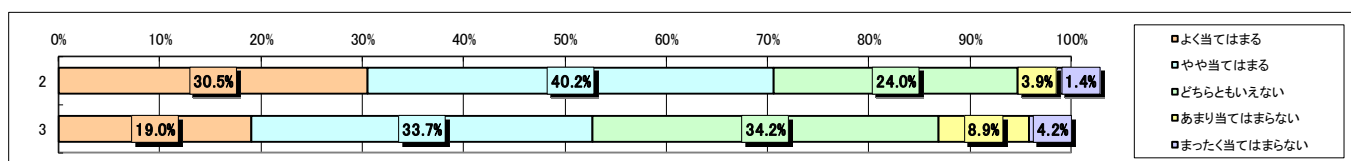
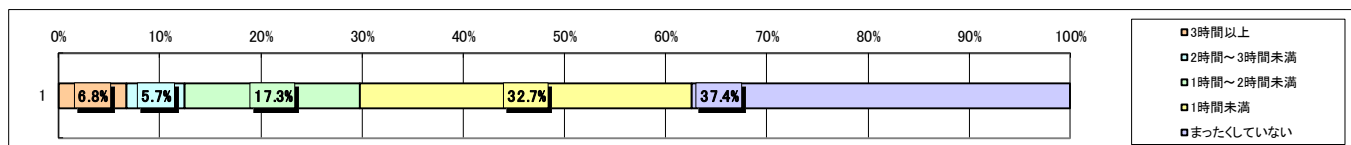
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.1	8
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.1	5
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.1	5
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.8	7

分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	3.9	4
	10 基本的知識が得られた。	4.2	4
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.9	7
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.8	4
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.9	4
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.8	13

分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.1	7
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.9	6
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.9	10

分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.1	19
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.1	16

集計・分析結果	II-4 学生の自主的・発展的な学修内容 (複数回答可)	
	授業の内容について友人と議論をした。	46.1%
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	19.7%
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	45.1%
	その他	4.5%



平成29年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 学際科目群

回答数(全体): 1123

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学修(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.0	13

分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	2 この授業に積極的に参加した。	3.9	2
	3 この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.6	4
	4 学生の自主的・発展的な学修内容 ※【II】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。		

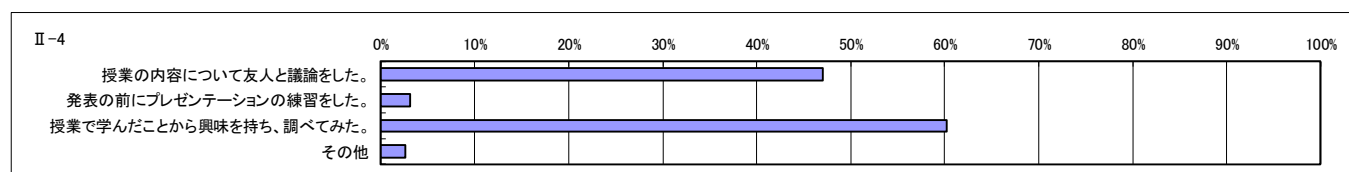
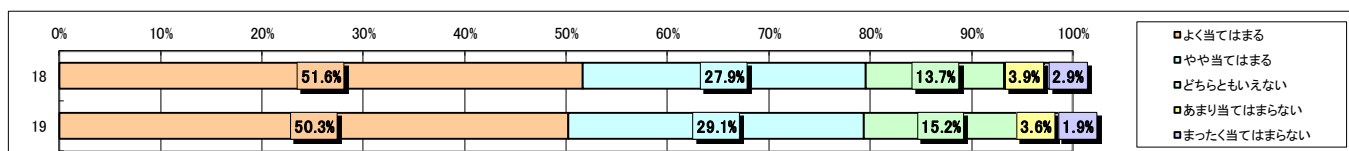
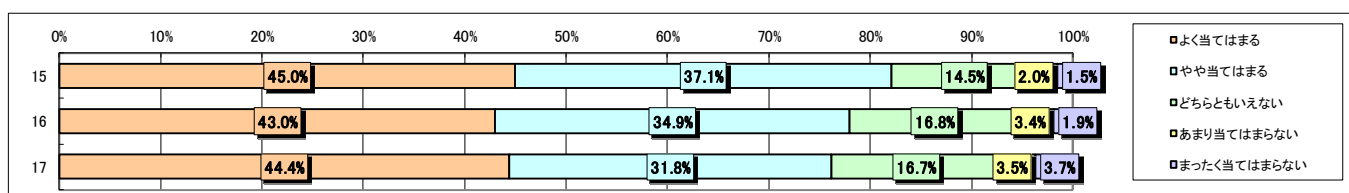
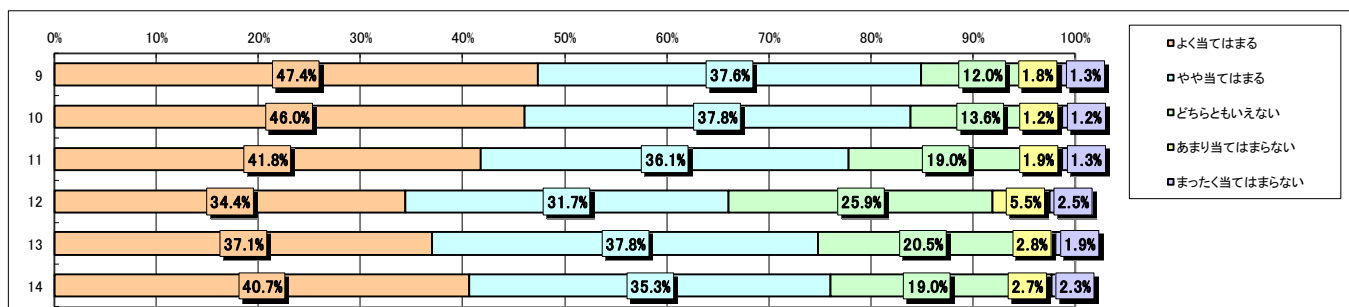
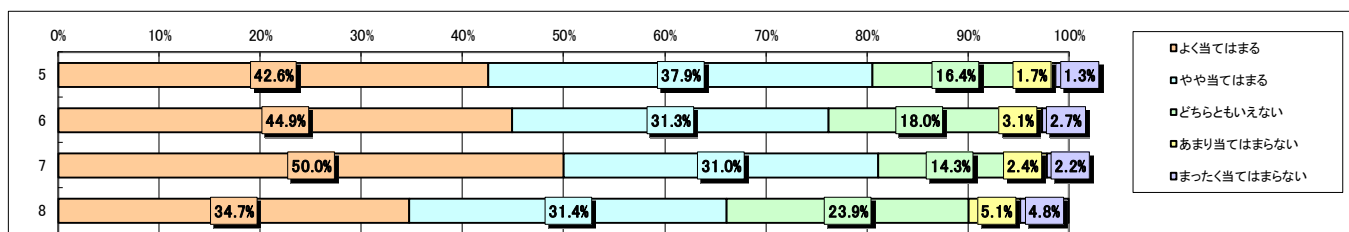
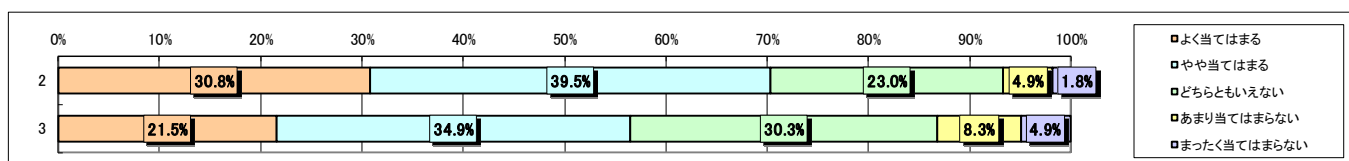
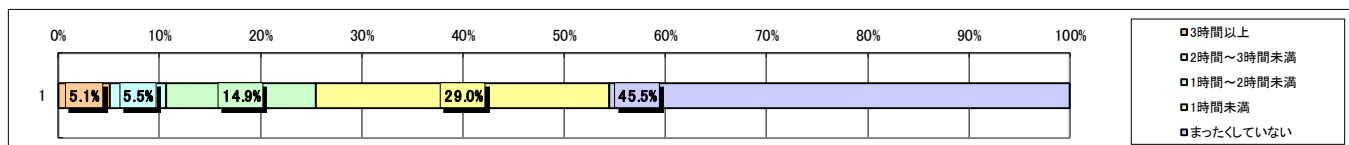
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.2	3
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.1	1
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.2	2
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.9	3

分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.3	2
	10 基本的知識が得られた。	4.3	2
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.2	3
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.9	3
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	4.1	3
	14 学問的興味をかきたてられた。	4.1	5

分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.2	3
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.1	3
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	4.1	3

分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.2	3
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.2	5

集計・分析結果	II-4 学生の自主的・発展的な学修内容 (複数回答可)	
	授業の内容について友人と議論をした。	47.1%
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	3.1%
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	60.2%
	その他	2.6%



平成29年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 言語表現科目群

回答数(全体): 2340

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学修(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.2	27

分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	2 この授業に積極的に参加した。	4.1	3
	3 この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.8	8
	4 学生の自主的・発展的な学修内容 ※【II】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。		

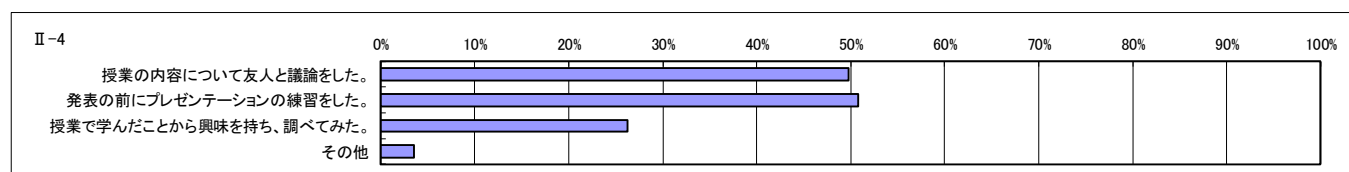
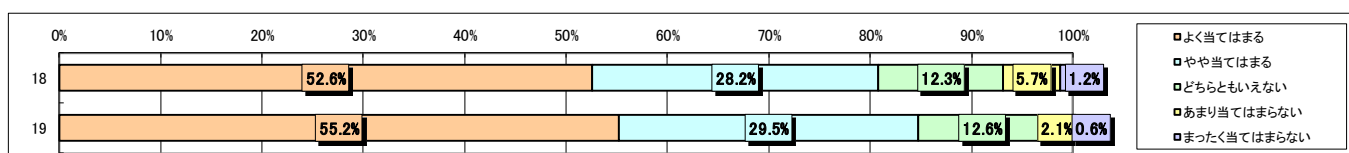
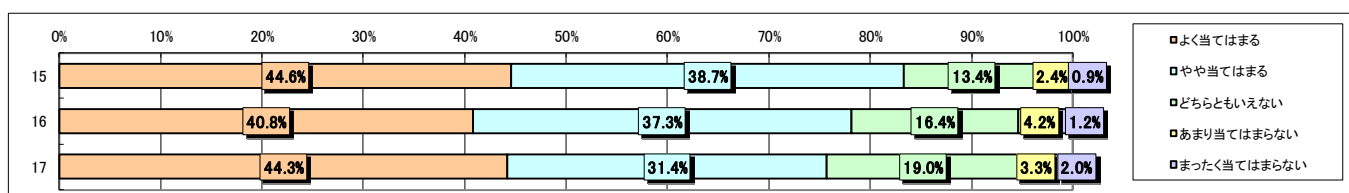
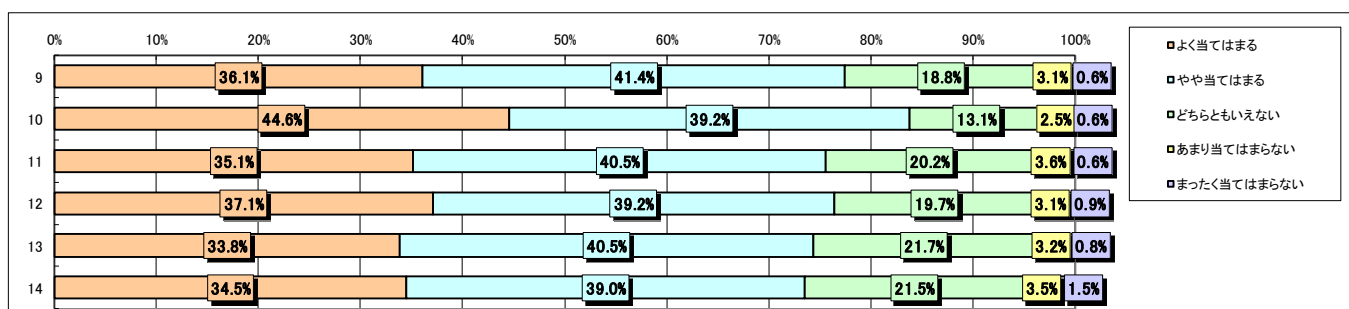
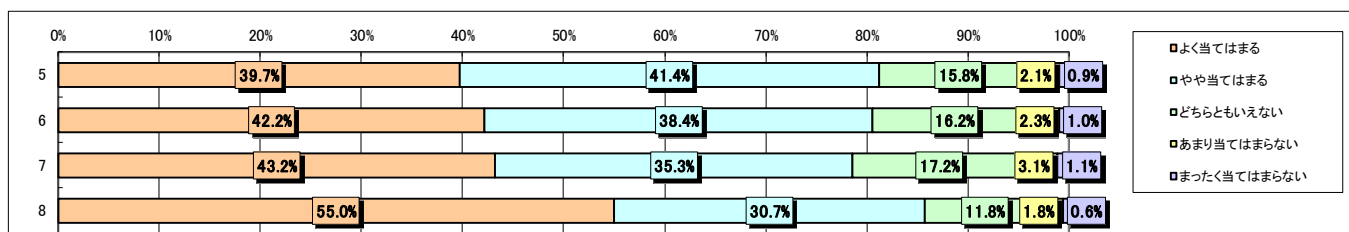
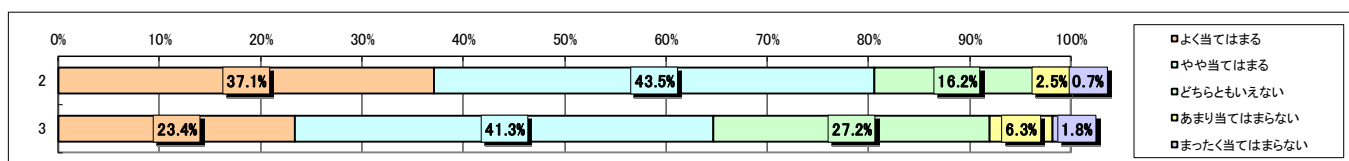
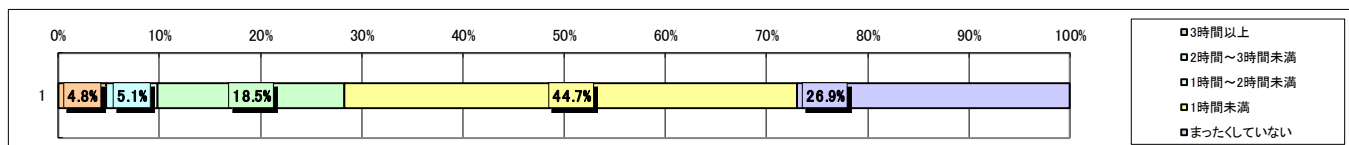
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.2	9
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.2	4
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.2	6
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	4.4	1

分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.1	4
	10 基本的知識が得られた。	4.2	2
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.1	6
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	4.1	3
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	4.0	3
	14 学問的興味をかきたてられた。	4.0	3

分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.2	1
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.1	4
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	4.1	6

分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.3	7
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.4	7

集計・分析結果	II-4 学生の自主的・発展的な学修内容 (複数回答可)	
	授業の内容について友人と議論をした。	49.8%
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	50.7%
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	26.2%
	その他	3.6%



平成29年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目全体

回答数(全体): 11617

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学修(予習、復習、課題など)にかけた時間	1.9	170

分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	2 この授業に積極的に参加した。	3.9	10
	3 この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.5	36
	4 学生の自主的・発展的な学修内容	※【II】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。	

分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.1	38
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.0	10
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.0	13
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.9	13

分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.1	5
	10 基本的知識が得られた。	4.1	11
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.0	15
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.8	24
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.9	15
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.9	31

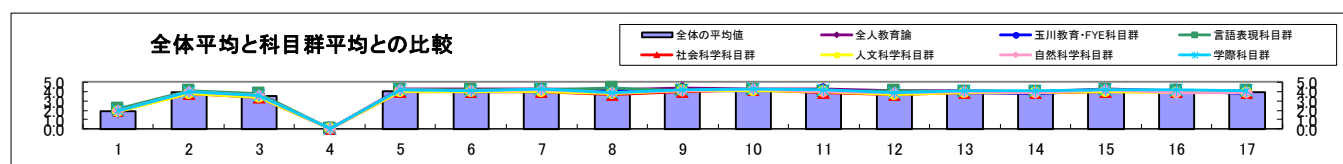
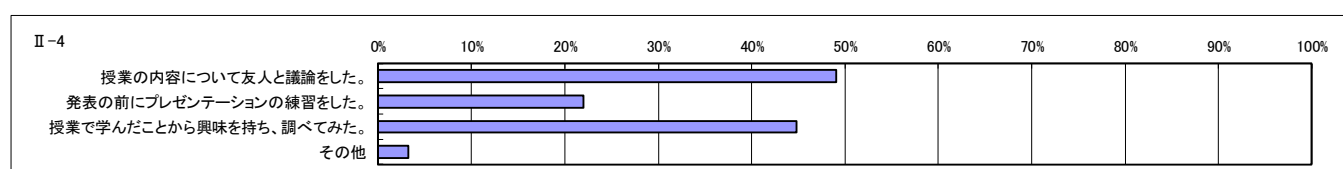
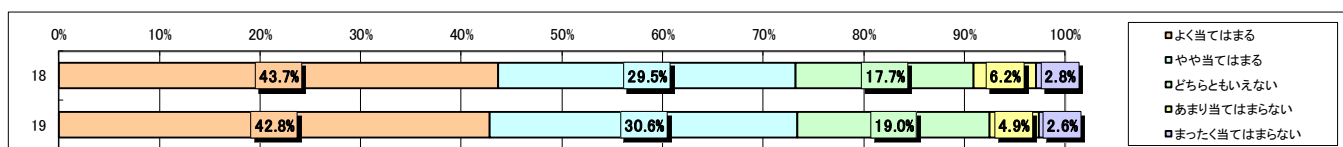
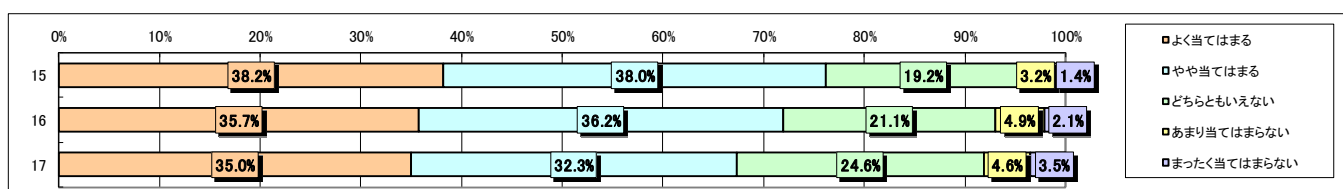
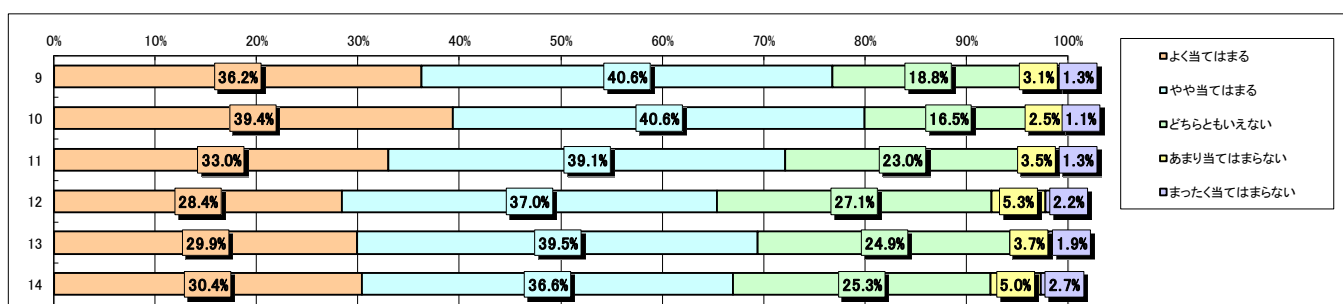
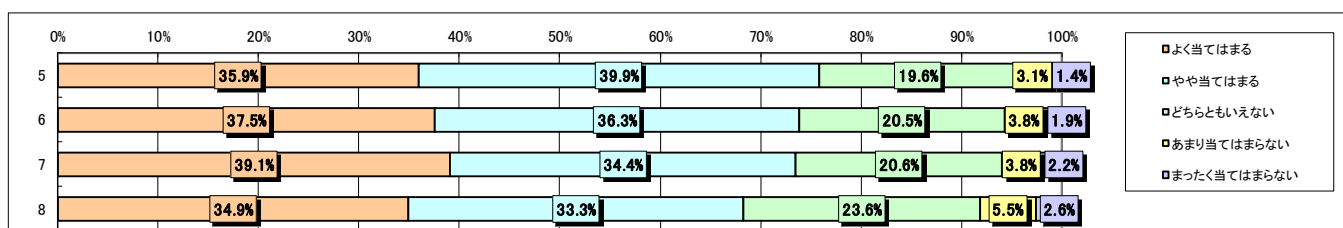
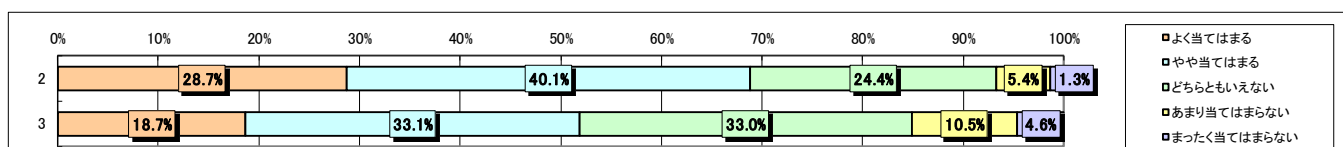
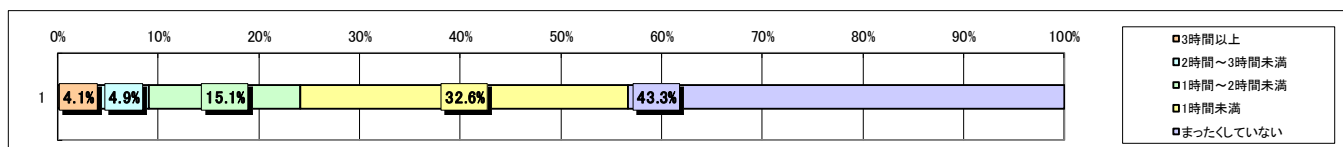
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.1	20
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.0	16
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.9	31

分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.0	38
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.1	34

集計・分析結果	II-4 学生の自主的・発展的な学修内容 (複数回答可)	
	授業の内容について友人と議論をした。	49.0%
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	22.0%
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	44.8%
	その他	3.2%

◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値
平均値＝(「5」回答数×5+「4」回答数×4+「3」回答数×3+「2」回答数×2+「1」回答数×1)/回答数小数点第2位四捨五入

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数



平成29年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 玉川教育・FYE科目群 一年次ゼミナール 102

回答数(全体): 1588

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学修(予習、復習、課題など)にかけた時間	1.9	28

分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	2 この授業に積極的に参加した。	4.0	2
	3 この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.6	4
	4 学生の自主的・発展的な学修内容 ※【II】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。		

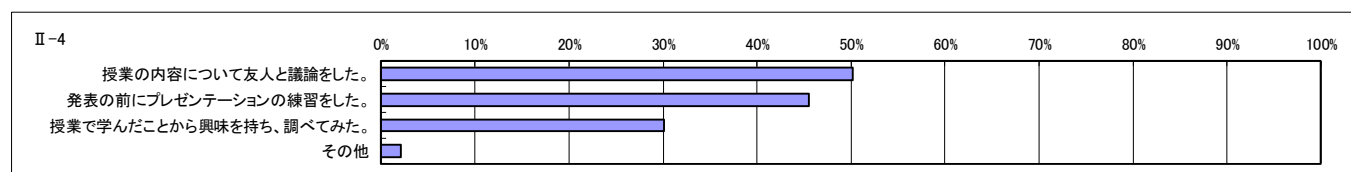
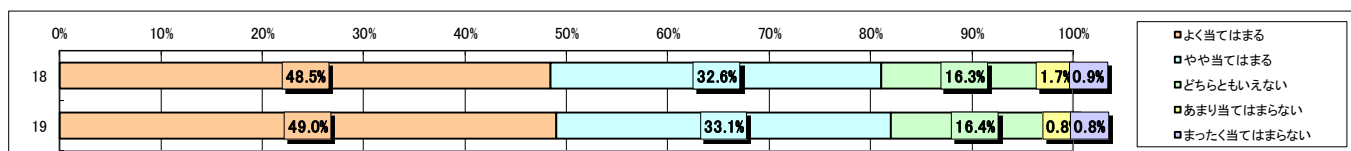
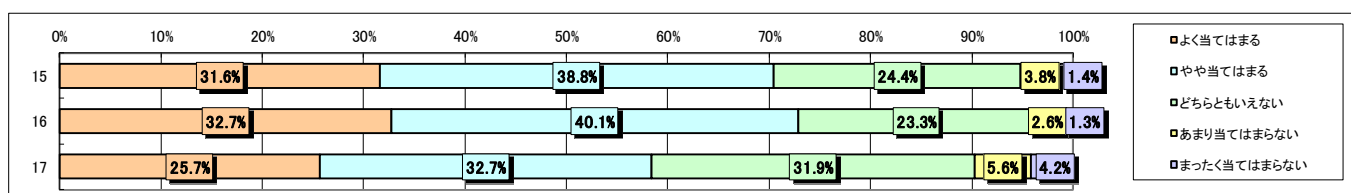
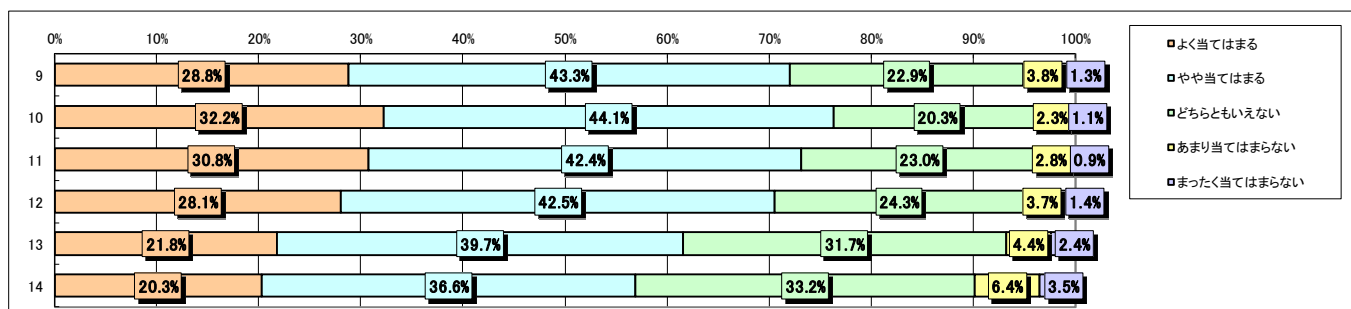
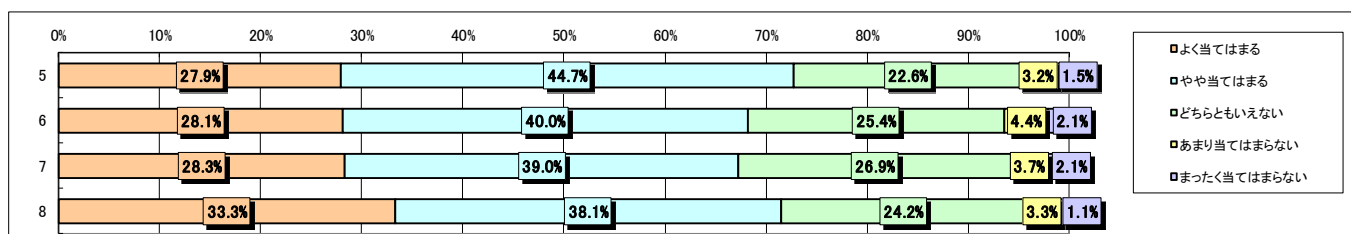
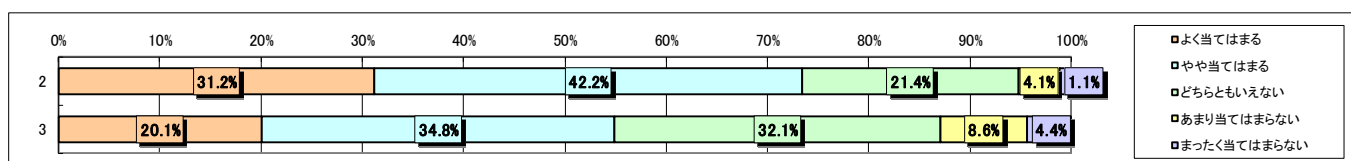
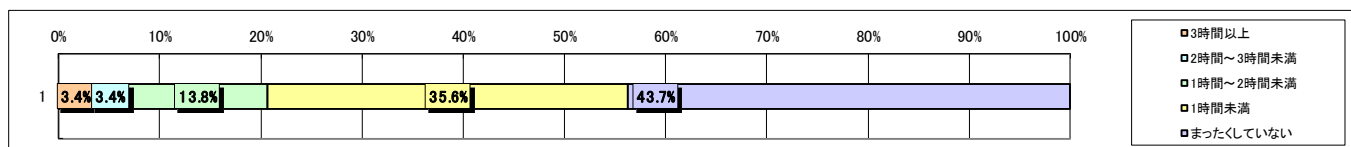
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	3.9	10
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	3.9	2
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	3.9	2
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	4.0	4

分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	3.9	0
	10 基本的知識が得られた。	4.0	0
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.0	0
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.9	2
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.7	2
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.6	3

分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.0	2
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.0	1
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.7	7

分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.3	2
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.3	1

集計・分析結果	II-4 学生の自主的・発展的な学修内容 (複数回答可)	
	授業の内容について友人と議論をした。	50.1%
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	45.5%
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	30.1%
	その他	2.1%



平成29年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 人文科学科目群

回答数(全体): 2439

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学修(予習、復習、課題など)にかけた時間	1.8	30

分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	2 この授業に積極的に参加した。	3.7	3
	3 この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.3	11
	4 学生の自主的・発展的な学修内容 ※【II】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。		

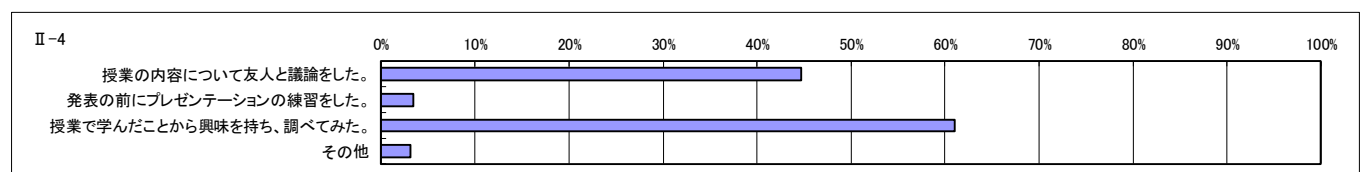
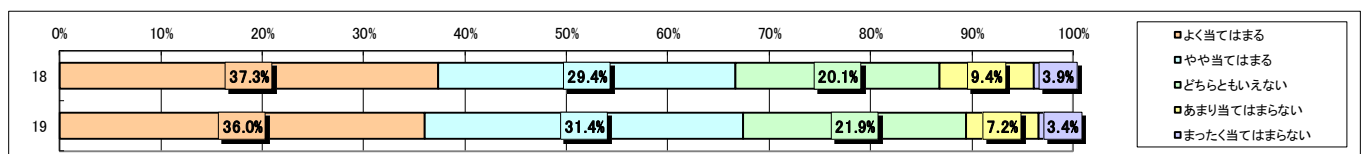
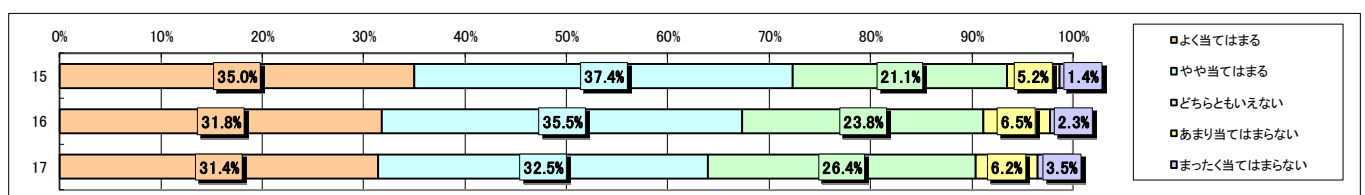
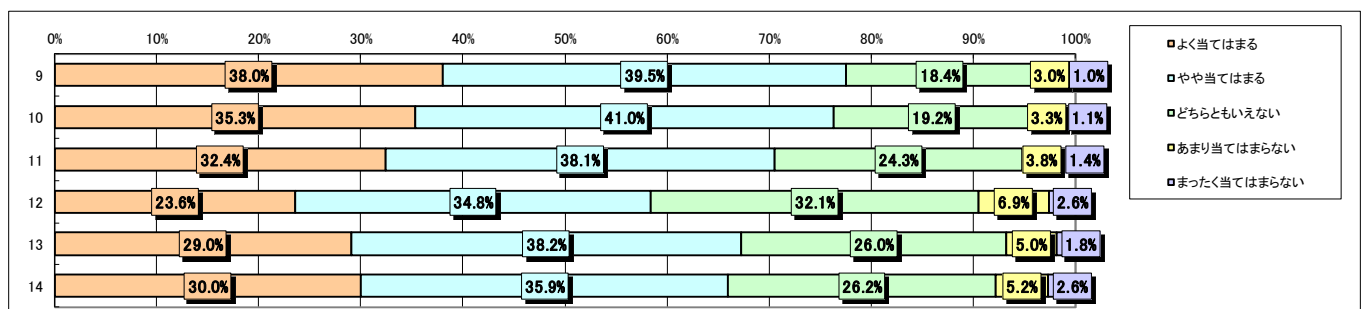
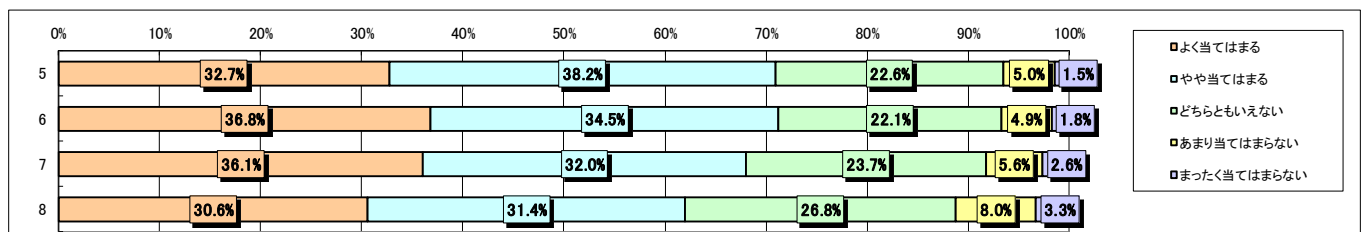
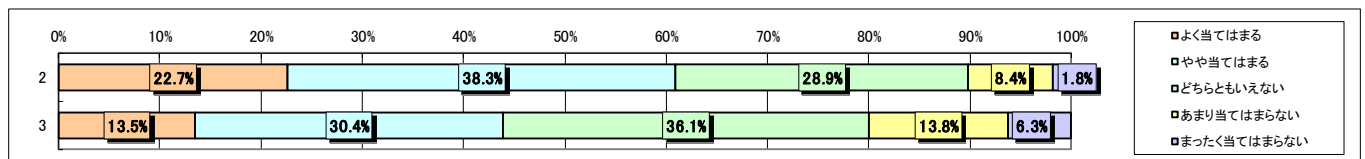
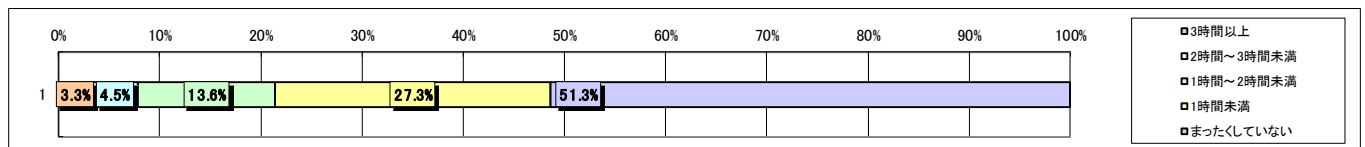
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.0	6
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.0	1
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	3.9	4
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.8	3

分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.1	1
	10 基本的知識が得られた。	4.1	3
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.0	1
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.7	4
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.9	1
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.9	5

分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.0	4
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.9	1
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.8	5

分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	3.9	7
	19 この授業の受講者数は適切であった。	3.9	6

集計・分析結果	II-4 学生の自主的・発展的な学修内容 (複数回答可)	
	授業の内容について友人と議論をした。	44.7%
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	3.4%
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	61.0%
	その他	3.1%



平成29年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 社会科学科目群

回答数(全体): 1828

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学修(予習、復習、課題など)にかけた時間	1.9	21

分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	2 この授業に積極的に参加した。	3.8	3
	3 この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.4	5
	4 学生の自主的・発展的な学修内容 ※【II】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。		

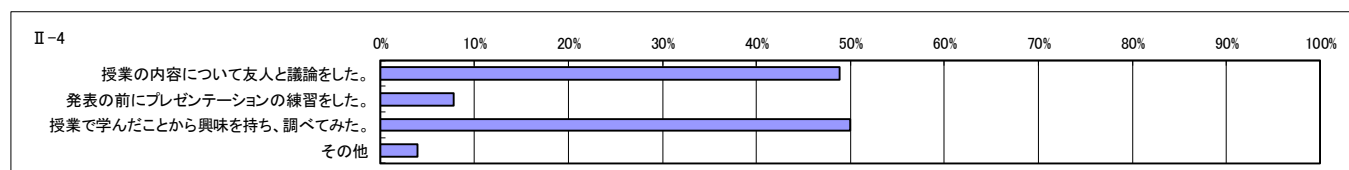
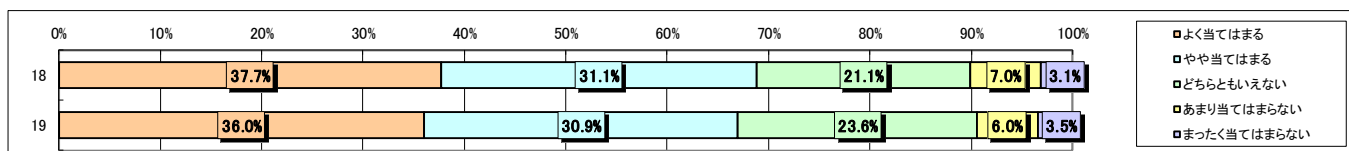
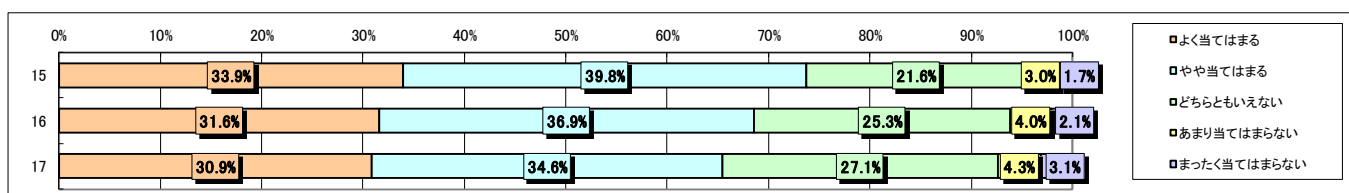
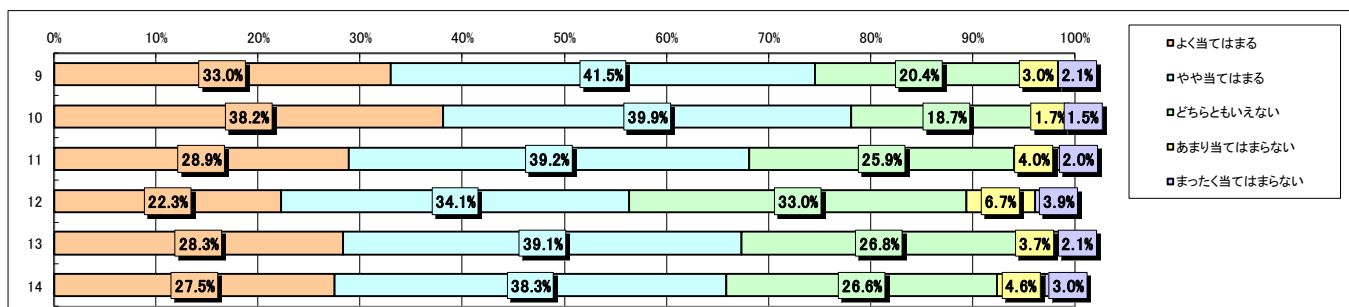
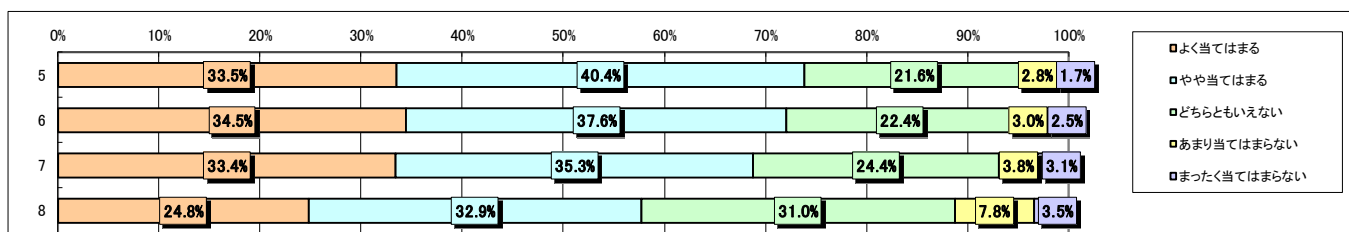
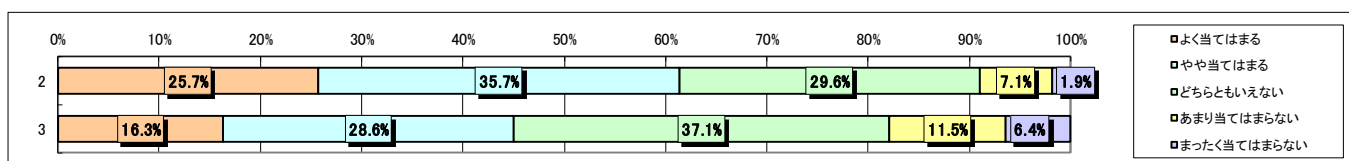
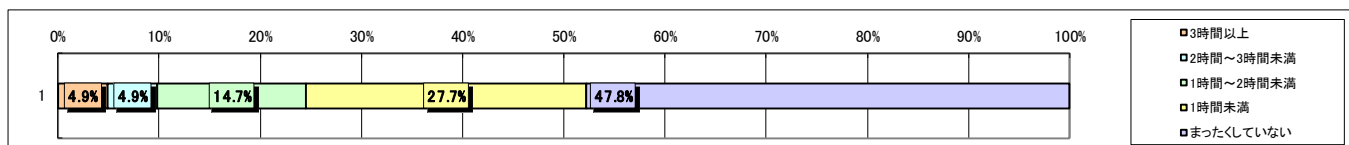
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.0	6
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.0	1
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	3.9	1
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.7	3

分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.0	1
	10 基本的知識が得られた。	4.1	2
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.9	3
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.6	4
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.9	3
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.8	5

分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.0	4
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.9	1
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.9	4

分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	3.9	7
	19 この授業の受講者数は適切であった。	3.9	5

集計・分析結果	II-4 学生の自主的・発展的な学修内容 (複数回答可)	
	授業の内容について友人と議論をした。	48.8%
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	7.8%
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	50.0%
	その他	4.0%



平成29年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 自然科学科目群

回答数(全体): 1672

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学修(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.0	29

分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	2 この授業に積極的に参加した。	3.9	0
	3 この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.5	6
	4 学生の自主的・発展的な学修内容 ※【II】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。		

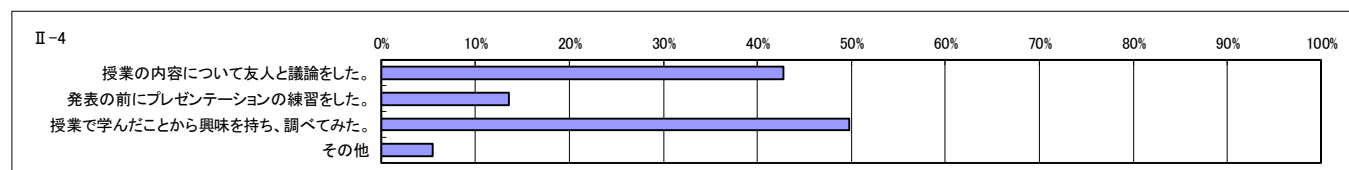
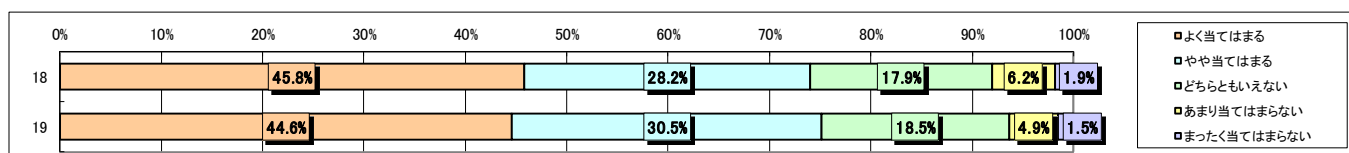
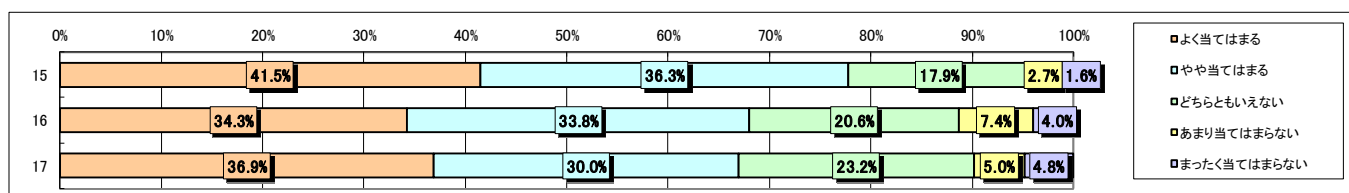
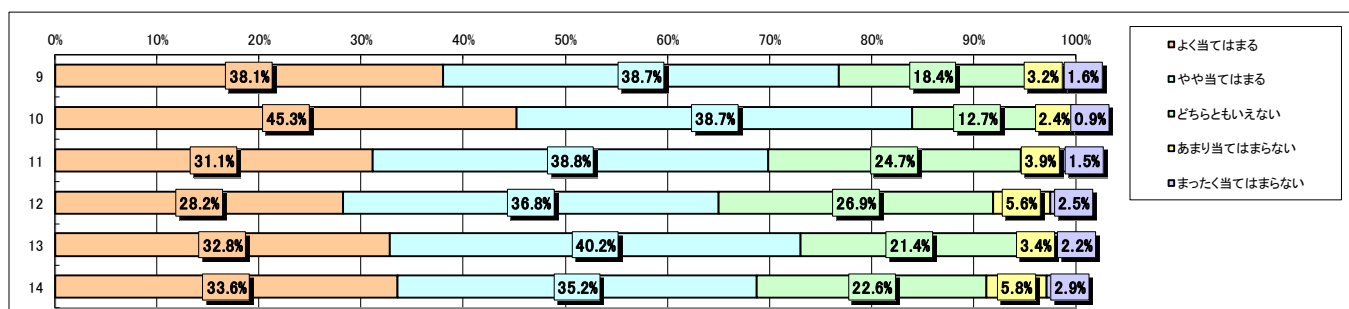
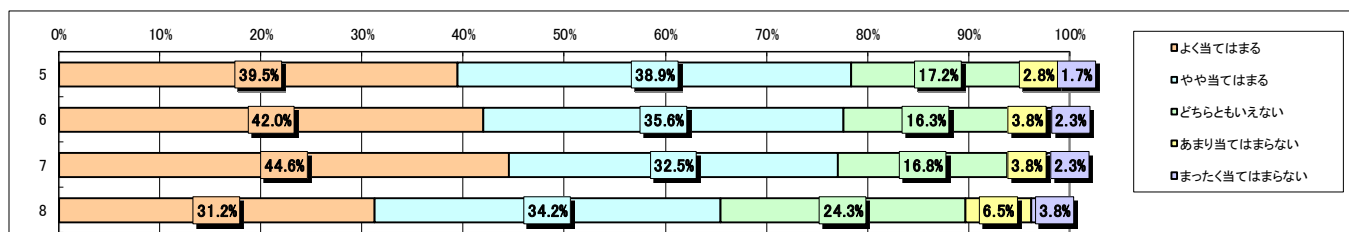
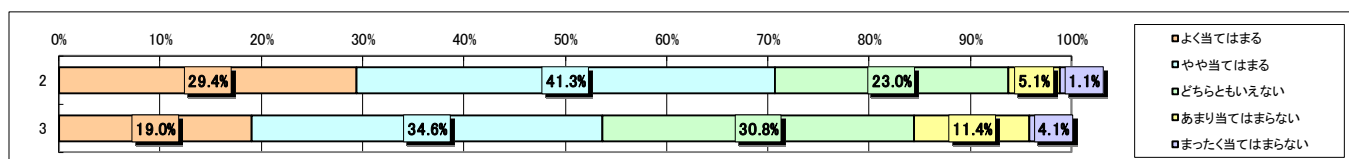
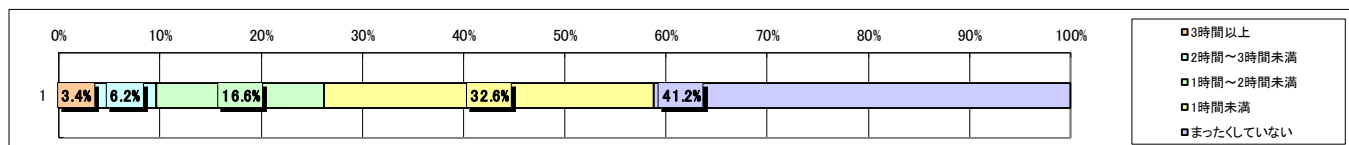
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.1	3
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.1	1
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.1	0
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.8	0

分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.1	1
	10 基本的知識が得られた。	4.3	2
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.9	5
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.8	3
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	4.0	3
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.9	5

分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.1	7
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.9	8
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.9	8

分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.1	10
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.1	11

集計・分析結果	II-4 学生の自主的・発展的な学修内容 (複数回答可)	
	授業の内容について友人と議論をした。	42.8%
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	13.6%
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	49.7%
	その他	5.5%



平成29年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 学際科目群

回答数(全体): 1436

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学修(予習、復習、課題など)にかけた時間	1.9	25

分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	2 この授業に積極的に参加した。	3.9	1
	3 この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.6	4
	4 学生の自主的・発展的な学修内容 ※【II】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。		

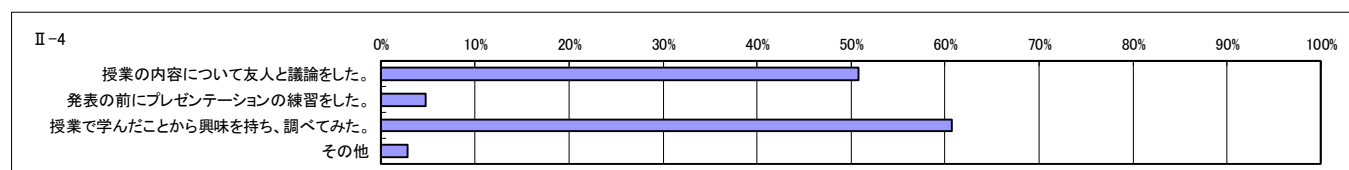
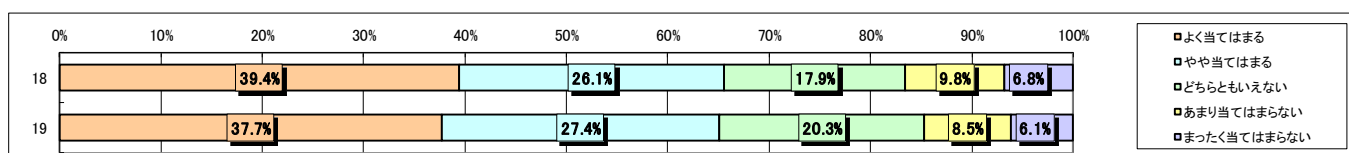
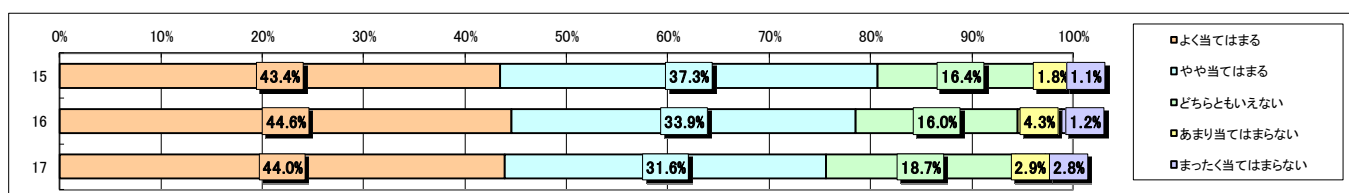
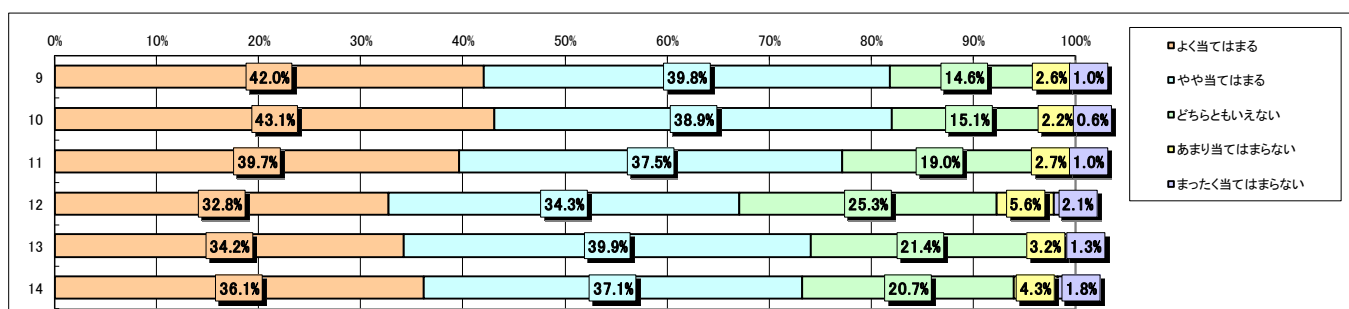
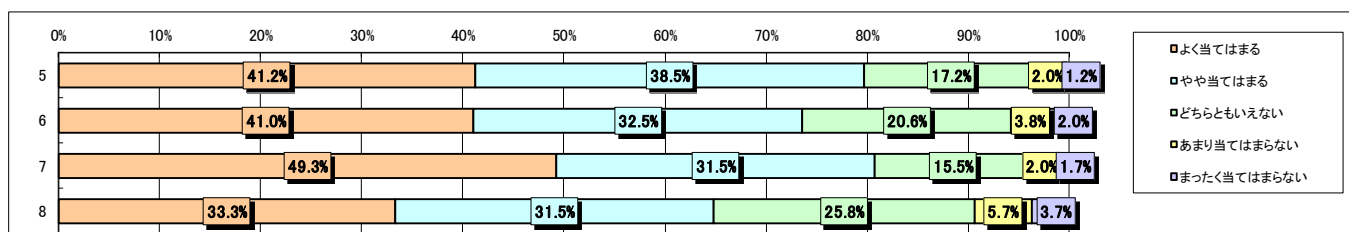
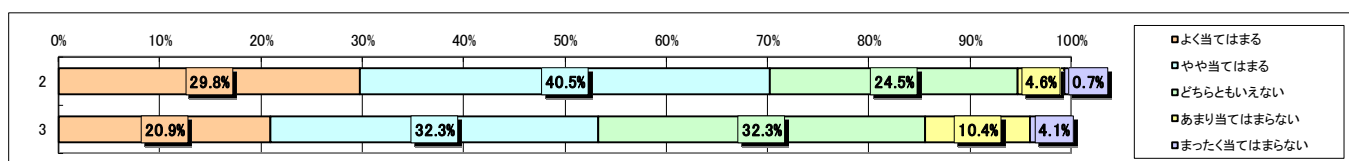
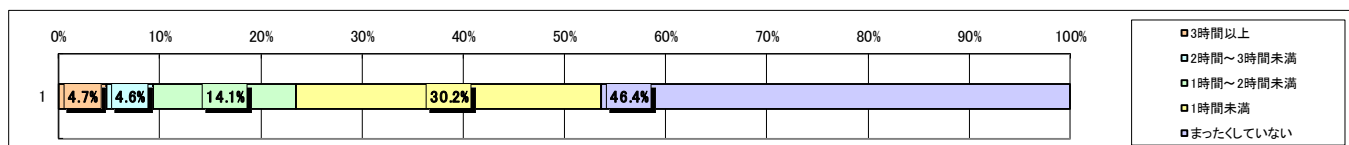
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.2	3
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.1	1
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.2	1
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.9	1

分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.2	1
	10 基本的知識が得られた。	4.2	3
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.1	2
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.9	7
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	4.0	3
	14 学問的興味をかきたてられた。	4.0	8

分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.2	1
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.2	2
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	4.1	3

分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	3.8	5
	19 この授業の受講者数は適切であった。	3.8	4

集計・分析結果	II-4 学生の自主的・発展的な学修内容 (複数回答可)	
	授業の内容について友人と議論をした。	50.8%
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	4.8%
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	60.7%
	その他	2.8%



平成29年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 言語表現科目群

回答数(全体): 2057

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学修(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.2	31

分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	2 この授業に積極的に参加した。	4.1	1
	3 この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.7	5
	4 学生の自主的・発展的な学修内容 ※【II】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。		

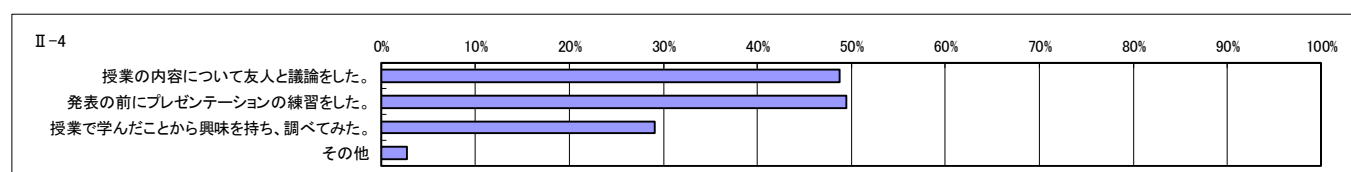
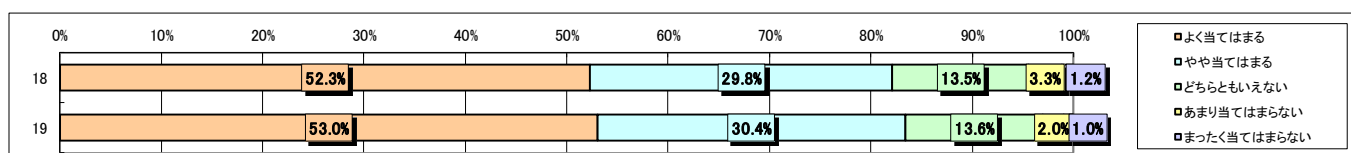
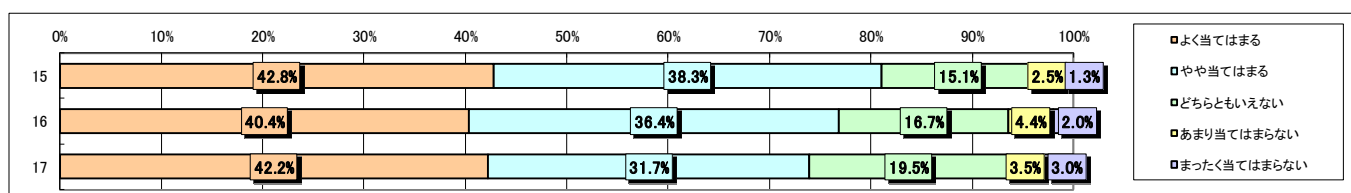
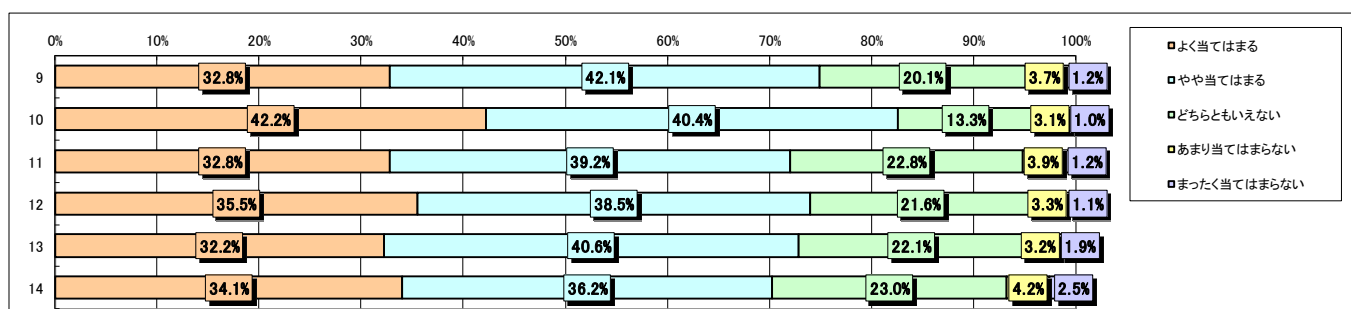
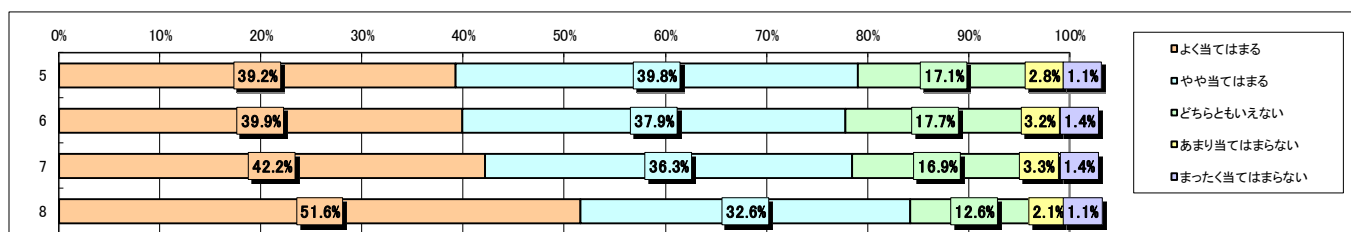
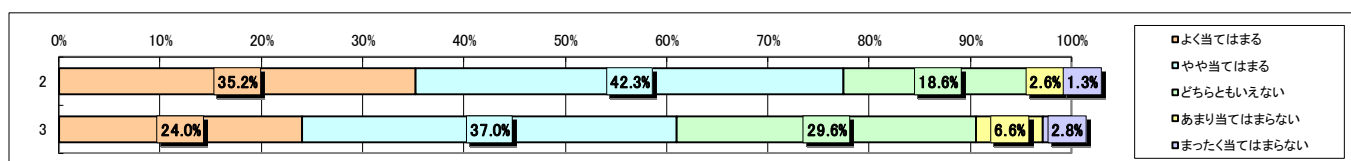
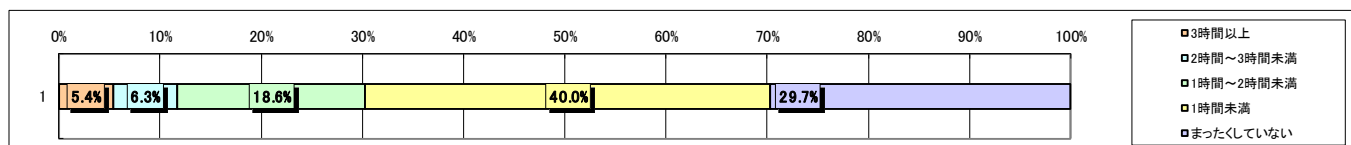
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.1	8
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.1	3
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.1	5
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	4.3	2

分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.0	1
	10 基本的知識が得られた。	4.2	1
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.0	4
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	4.0	3
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	4.0	3
	14 学問的興味をかきたてられた。	4.0	5

分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.2	2
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.1	2
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	4.1	4

分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.3	6
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.3	5

集計・分析結果	II-4 学生の自主的・発展的な学修内容 (複数回答可)	
	授業の内容について友人と議論をした。	48.7%
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	49.5%
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	29.1%
	その他	2.7%



Ⅱ 大学院 FD 活動報告

<文学研究科>

(1) 研究指導能力の向上

院生が学外に公開された場所において研究発表を行うレベルまでの研究指導の結果、人間学専攻の院生 1 名が玉川大学人文科学研究センターの研究会において口頭発表、英語教育専攻の院生 3 名が国外での学会で口頭発表・ポスター発表、また合同発表会での発表を行うことができた。発表時の議論を踏まえ、研究指導教員も院生の研究の不足点を補い、より質の高い研究となるための指導へと生かすこともできた。さらに 3 月に 2 名が国外での学会で研究発表を行った。

(2) 院生とともに授業を振り返る

院生とともに授業を振り返る一環として、文学研究科両専攻の導入科目であり、かつ必修科目である「アカデミック・リテラシー」に関して、自由記述式のアンケートを導入した。その結果、「必要に応じて図示されたこと」「授業の復習を兼ねた課題を行ったこと」「課題に対してきちんとした回答ができるようになるまで再提出を行うシステムであったこと」「分からないところについて質問できたこと」等によって、「授業内容を理解することができた」との評価を得た。ただし、「予習に関する指示があいまいであった」との指摘があったことから、科目担当教員に通知し、次年度のシラバスの改善を求めた。

(3) 「玉川大学英語教育セミナー」の開催

英語教育専攻では、8 月 22 日（火）に「玉川大学英語教育セミナー」を開催した。昨年度までの ELTama から、今年度は CELF・ELTama Forum for English Language Teaching と名を変えて、ELF センターと、セミナーを初めて共同で開催した。このセミナーの中で、英語教育専攻の学生は英語の Teaching Demonstration（模擬授業）を企画し、デモンストラーションを行った。英語教育専攻の学生を担当する教員は、このセミナーでの学生の発表を奨励し、また、その準備において学生への助言を行った。このセミナーに学生の支援という形で参加をしたことで、各教員は、自身の指導能力の向上に繋がったと実感している。

(4) 大学院特別講演会の開催

人間学専攻では以下の講演会を開催した。出席した教員からは、「ユニークな経歴をもち、研究者とはまた異なる観点から哲学に取り組んでいる講師をお招きすることによって、ややもすると視野の狭くなりがちな院生の学問とは異なる枠組みから哲学への興味・関心を広げ、主体的に取り組んでいくように促す効果的な方法の一つを学ぶことができた」「講演会での講師のやりとりを参考にしながら、その後の授業において一部発問を変えてみたところ、院生の取り組む姿勢が変わったように感じた」との感想を得た。

日 時：平成 29 年 11 月 16 日（木）13:00～14:30

講 師：原田まりる氏（著書『ニーチェが京都にやってきて 17 歳の私に哲学のことを教えてくれた』が第 5 回京都本大賞受賞）

参加者：教員 2 名、院生 1 名（人間学専攻在籍の院生が 1 名のため、学部生にも開放したところ、約 50 名が参加した）。

＜農学研究科＞

（１） 研究分野の再編成

平成29年度に農学部学士課程の改組が行われた。農学研究科では学部改組にあわせて研究科内部の研究分野再編成を行った。学士課程から内部進学する学生のバックグラウンドに即した高度な講義・演習・研究科目の提供が可能になる。実施時期は平成31年度入学生からとし、現在の6研究分野から4研究分野＋専修免許コースを設置する。

（２） 講義科目の新設によるコースワークの充実

平成31年度修士課程入学生から、植生や作付け状況を航空・衛星観測情報から計測する「環境リモートセンシング」の講義科目を設置した。（１）の研究分野の再編成にともない、新たに融合科目群を配置し、院生の専門研究分野以外の幅広い講義を履修できることとした。融合科目群担当教員は、基礎的な部分（学士課程3、4年次レベル、全講義の2割程度）の講義を含めるなど、習熟度に合わせた授業を行う。

（３） 英語による授業、院生の学会発表指導の充実

教員アンケートによって、新たな英語による授業実施例が示された。1) 試験研究機器の英語マニュアル動画を教員が解説しながら視聴する試み、2) TED動画の字幕なし→英語字幕→日本語字幕、あるいは日本語→英語→なし、の順で視聴する試み。これらの情報を農学研究科会で共有し、授業改善に役立てることとした。

修士課程の院生が5人（1月末時点）国際学会で発表を行った。教員による英語プレゼンの指導が広く行われており、これを継続したい。

（４） 授業アンケートの実施と対応

修士課程の大学院生を対象に、授業アンケートを行った。21人中15人から回答があった。大学院生に専門性の高い講義が行われていることが確認された。しかしバックグラウンドの異なる院生が授業に参加している場合があり、学部レベルの基礎的な知識に大きな差がある場合の授業対応に課題を残した。（２）で導入する融合科目群で教員が講義内容を調整することで対応したい。

インターンシップに参加した院生が6人いたが、いずれも研究科の科目としてのものではなかった。就職活動の一環として参加したものであった。

院生によるプレゼンテーション、ディスカッション型の授業が多数あり、授業が学生間の意見交換の場になっている。受講者10人以下のクラスがほとんどであり、教員とともに最新論文をもとにしたディスカッション型の授業が広く実施されていることが把握された。この授業形態を継続したい。

（５） 研究指導体制

D合、M合教員による博士課程後期および修士課程院生の研究指導補助体制のあり方を研究科会で議論した。しかし、関連する制度が整っておらず、実施には至らなかった。演習科目を

D合、M合教員が補助的に担当する試みを継続する。

＜工学研究科＞

（１） 大学院生による授業評価アンケートの実施と授業改善の推進

実施時期：春・秋学期

対象科目：工学研究科の大学院生が受講している全科目

平成29年度春学期および秋学期において、大学院生による授業評価アンケートを実施した。修士課程と博士課程の全院生に履修した科目の授業評価を行ってもらった。各科目の授業評価アンケート結果を科目担当教員にフィードバックし、授業改善に活用してもらった。また、各科目の授業評価アンケート結果を専攻ごとに集計し、教務担当者会および工学研究科会に提示・問題の有無等について検討を行った。

授業評価アンケートの結果、春学期と秋学期の授業実施においては、1科目（「Research Presentation」）を除き、とくに問題は見出されず、良好であった。なお、「Research Presentation」では受講生5名中4名が「大いに良い」であり、1名だけが低い評価であったことから、受講者の英語基礎力の不足などの個人的な原因であると推察した。この科目を含めて授業評価アンケート結果は、前年度の評価結果よりも改善されていた。

以上、授業評価アンケートの実施から評価、公表、改善活用までを実施し、この取組によって各科目の質の確認とともに、改善の推進がみられた。しかし、改善の記録と効果確認のしくみについては不十分であるため、今後、検討していく。平成30年度も授業評価アンケートを実施し、授業の改善活動を継続していく。

（２） 大学院教育活動の質向上を目的とした FD 研修会の実施

1) 知的財産権 FD 研修会

テーマ：著作権等の教育研究上の取扱いルールや研究倫理

実施日：平成 29 年 7 月 24 日（月） 17:00～18:40

場 所：大学 8 号館第 2 会議室

講 師：木村 友久先生(国立大学法人山口大学 国際総合科学部 教授および大学研究推進機構知的財産センター副センター長)

工学研究科のほぼ全教員および大学院生が本研修会に出席した。共同研究における学生参加・共同研究テーマを扱う場合におけるリスク等々、工学研究特有のリスク回避について知的財産権をもとに理解を深めた。また、権利尊重や人権教育等、他権利の抵触回避の重要性とともに、特許や意匠等における知的財産創造性の重要性等についても学んだ。さらにこれらの内容について議論を通して、より広範に知的財産の理解を深めることができた。本研修会の効果について出席者にヒヤリングした結果、「有益である」との肯定的な回答が得られた。出席者全員に研修の有効性等の評価を記録媒体で実施していないこと、さらにその結果の検討や活用については未実施であり、次年度のFD活動に実現していく必要がある。

2) 社会発信手法研修会

テーマ：選ばれる大学・大学院になるための広報活動

実施日：平成 29 年 10 月 30 日（月） 17:00～18:00

場 所：大学 8 号館第 2 会議室

講 師：菊池 泰功先生(PR クエスト株式会社 代表取締役 広報コンサルタント)

工学研究科の教員19名が出席した。選ばれる大学・大学院になるための広報活動の展開のしかたについて、研究・教育を広報に繋げること、工学系私大・大学院における優秀人材確保（アドミッション）の戦略を共有し、今後の工学研究科の目指すべき広報活動のあり方について学ぶとともに、議論を通して理解を深めた。本学の学部・大学院の特色や研究成果を積極的にアピールし、社会的評価を高めることにより、入りたい(入ってもいい)大学・大学院を目指すことの重要性を共有した。議論からは、入試・広報・工学部および工学研究科の三者連携体制による広報活動の推進等について前進的な提案があった。本研修会の効果について出席者へのヒヤリングの結果、「有益である」との肯定的な回答が得られた。しかし、出席者全員に研修の有効性等の評価を実施しておらず、評価結果の検討や活用も未実施であった。次年度のFD活動では研修の有効性評価と評価結果の活用のしくみを実現していく必要がある。

<マネジメント研究科>

(1) スクール・マネジメント研究コースの内容検証

当初の計画に基づき、平成29年9月21日に大学院生、教員、人事部スタッフ参加によるカジュアルな懇談会を実施した。平成29年度からスクール・マネジメント研究コースに所属する大学院生を迎えたことから、大学院生の声をもとにコースのカリキュラムや授業改善に関する検証を行うことが目的である。リラックスした雰囲気の中で、大学院生からは生の声を聴くことができた。主だった意見を以下に示す。

- ・日常業務と大学院での学修を両立するのは相当にハードである。
- ・職場や上司の配慮は十分であった。
- ・経営学に関する基礎知識を有していないため、授業を理解するのが難しい。
- ・教育系の科目が多いため、経営の専門科目をもっと学びたい。

以上の意見は今後のスクール・マネジメント研究コースのカリキュラムを見直す際の参考となり、今後も継続して情報を蓄積することが必要と考える。また、教員からは大学院における学修のコツなどがアドバイスされていた。

(補足) 年度当初の計画では、懇談会を年に2回開催する予定であった。しかし、大学院生は本学職員であり、通常業務との兼ね合いから勤務時間内に全員が集まるのは困難であるため、年に1回の開催に変更した。

(2) 大学院生による授業評価アンケートの実施

平成28年度に引き続き、各学期終了後に全授業に対する記述式アンケートを実施した。回収したアンケートを担当教員へフィードバックして授業改善に利用していただく。主だった意見を整理した結果を以下に示す。

- ・経営学を中心とした基礎知識がないため、講義時間・科目数を増やして欲しい。
- ・毎週に課題レポートがあるのは非常にきつい。
- ・各科目とも予習は1時間～3時間、復習は1時間～3時間を費やしている。
- ・一部の経営系専門科目は授業時間を増やして欲しい。
- ・ディベートなどを取り入れ、先生の考えに対する討論があればよかった。

以上の回答を参考に、次年度からの授業内容、課題のボリュームなどを考える情報を得ることができた。

（３） 授業の英語化に対する継続検討

平成28年度から経営学部で力を入れている英語による専門科目の学修であるDLP（Dual Language Program）を一部の授業において行った。しかしながら、学期終了後に実施した授業評価からは「英語の文献を使用する機会があったが、英語を訳すことが先行し、具体的な理解まで辿り継がず、曖昧に終わってしまったため必要なかったと感じた。」といったネガティブな意見があり、経営学を中心とする専門知識を有していない大学院生に英語の文献を用いた授業を行うことの意義を考えることができた。DLPを中心とした授業方法は継続的に実施し、情報を蓄積する必要がある。

<教育研究科>

（１） FD 委員会の開催（年 6 回程度）

ほぼ毎月の教育学研究科会のあと、FD委員会を計8回開催し、教育学研究科のカリキュラム、学生に関する諸問題、今後の組織のあり方を中心として検討した。具体には現在開設されている夜間コース（乳幼児教育研究、IB研究、教師教育研究の各コース）における状況について、担当教員の過重負担が生じないような数年間を見通した授業運営計画の策定などを行った。

（２） 授業研究のための相互授業見学（各教員年 3 回を目標）

今年度は、各教員に他教員の授業を3回見学し、報告書を提出してもらうように働きかけた。全教員が相互の授業を見学することができ、報告書は合計27通の提出があった。報告書は科目担当教員に送付し、今後の授業の参考に付した。

また、IB研究コースについての教員間の理解を深めるために、併設校IBコースの授業見学を2回実施し、9名の教員が参加した（レポート提出は8名）。

（３） 学期終了後の授業アンケートの実施及び分析

春学期終了後に学生に対して授業アンケートを実施した。大学院では学生が特定されやすいために、提出を躊躇する学生もいた。このため、秋学期終了後のアンケートは、FD委員会で教員間で協議し、科目別ではなく、授業及び学修状況についての記述式アンケートへと変更した。秋学期のアンケートを提出した学生は、13名（29名中）であった。

（４） カリキュラムの検討

「教育学研究方法」は平成29年度までの全コース必修科目としていたが、選択あるいは選択必修とすべきかという点について検討した。量的調査を行わない学生には負担が大きいということから、選択科目とすることとした。平成30年度入学者から実施する予定である。また、夜間開講によって、教員の負担が特定の教員に集中しないよう、夜間開設科目についても検討を行い、学生の希望を配慮しつつ、開設科目を設定することとした。

<教職大学院>

（１） 教職大学院 OBOG フォローアップ研修について

毎年のフォローアップ研修が、教職大学院OBOGの学びの継続として、また年次の異なる大学院生のつながりを作る場として機能していることが本年度も引き続き確認された。教職大学院の教員が毎回発表し、その発表についての意見交換を実施することで、本学の講義の質を高

めるFDとしての効果もねらっている。また、来場したOBOGからはアンケートを実施し、大学院のどの講義が教育現場で役立ったかなどについて答えてもらうようにしている。

本年度は次の2回の日程で実施した。

① 6月24日（土）谷和樹教授による研究報告

教職大学院 OBOG による実践報告

報告者：ストレート・マスター（以下、SM）8期 三宅夏葵氏

現職教員院生（以下、現職生） 1期 浅野 努氏

② 11月18日（土）佐藤久美子教授による研究報告

教職大学院 OBOG による実践報告

報告者：現職生

9期 津田裕子氏

8期 溝口広久氏

谷教授からはプログラミング的思考の育成についてその背景となる考え方を、また佐藤教授からは外国語教育の導入についてポイントとなる点を、いずれも新学習指導要領の内容にどのように対応していけばいいかを含めて報告され、今後のそれぞれの講義に生かしていく方向性を確認することができた。

また、教職大学院OBOGの実践報告は、現場に出てからの修了生たちが教職大学院での学びをどのように生かしているのか、またどういった点に悩み克服しようとしているのかを、教授陣も知ることができる有益な場となっている。

さらに、例年通りグループに分かれてサークルディスカッションを行った。OBOGからの発表と教授からの発表について、活発な意見交換が行われた。教職大学院の講義がOBOGたちのその後の仕事にどのように役立っているか、また今後どのような講義が求められているか等を確認することができた。この場の議論をもとに、各教員が自分たちの講義の内容と方法との改善に努めている。

（2）FD 授業研究について

以下の2回の授業研究を実施した。

① 4月27日（月）15:00～16:40（担当：菅野宏隆准教授）

「算数科・理科指導の計画・実践・評価」

講義の中では、算数科教育に関わる問題から、院生たちの持っている算数教育についての問題点を明確にしながら、深まった話し合いがなされた。事後検討会では、現職生とSMが混在している講義でどのようにそれぞれの立場を生かした授業をしていくのか、算数の教科書での問題の配列の意味をどのように扱うか、授業技術の細かなスキルの紹介の効果等、今後の改善のための具体的な方策について議論した。

② 11月9日（木）15:00～16:40（担当：佐藤修准教授）

「教科授業技術の研究と実践（中）」

中学1年生の4月最初の授業での「教科指導ガイダンス」を想定した教科紹介ムービーを専用アプリを駆使して院生たちが作成し、発表、相互検討した上で、ICT活用授業の技術についてその在り方を検討した。ICT活用授業を今後研究していくうえでのヒントが多々得られた。事後検討会では、個別指導に対応するソフトウェアの必要性、学習活動をチェックするワークシートの開発の重要性等について議論し、授業の改善について検討した。

全体を通して、①「理論と実践の往還」のための授業づくりや教材開発の具体的な方策につ

いて、②SMの実践経験不足を補う指導法について、③現職生の実践経験を活用した指導法、等々についての議論が、今年もより一層活発になされた。教授陣も毎年必ず授業研究を行い研鑽に努めているという事実が、毎年、教職大学院の院生たちに良い印象を与えている。

(3) 教授陣に対する調査について

FDの一環として、SMや現職生の学習理解等に関する教員の所感を調査した。アンケートは4点法で実施され、全19の項目について得点化された。調査結果は教職大学院会で公表され、データをもとに議論がなされる。今年度のアンケート結果についてはまだ集約途上だが、全教員についての各質問に対する傾向を把握し、昨年度と今年度との比較をしながら、学生の評価が高かった項目と、課題が残る項目とについて検討する予定である。例年、ほとんどの項目が3.6点以上であり、記述式の内容では「全てが満足」「実践に生かせる内容だった」など、肯定的な記述が多いが、一部に改善が必要な指摘もなされているため、シラバス全体の内容と重点の置き方等について来年度以降さらに検討し、改善を重ねていく。

(4) 相互授業参観について

各教員の授業を可能な範囲で相互に自由に参観し、その際の学び感想等を記録として残すようにした。互いの学びを蓄積されることによって次年度へ活かしている。

今年度は新しく着任された教員を中心に4月6日から6月6日までの2ヶ月間で15回の相互参観を実施した。「講義、グループ討論、全体討論など、真剣に考えさせる場面設定や個々に配慮した言葉かけ、ICT活用など今後の授業づくりに大変参考となるものであった。」「発問やPC及び六法等の参考図書の効果的な活用等によるものと思われるが、学生の発言の機会が多くまた学生から積極的に質問が出されるなど素晴らしい授業であった。自分の授業実践に向けて大いに参考となった。」等の感想記録に見られる通り、FDとして有意義な活動になっている。

(5) FD委員会における情報交換

毎月の教職大学院会終了後にFD委員会を開催し、院生に関する諸問題、指導方針の確認と教授陣間における連携の取り方、教職大学院のカリキュラムや組織のあり方について検討している。今年度も、ほぼ毎月実施された。気持ちの浮き沈みの激しい学生についての教員の対応について、院生が学修しやすい環境をどのように構築していくか、出欠のつけ方や成績のつけ方についての基本的な考え方の確認、課題講義を出す際に必要な配慮等々について、活発な情報交換がなされ、それぞれの場面での方策についてよりよいあり方を検討した。

<脳科学研究科>

(1) 学生支援についての検討

各院生の研究状況を把握した上で、その研究をサポートするような授業のあり方について議論した。昨年度、選定・導入した教科書の妥当性について吟味し、足りない書籍を本年度購入した。

(2) WEB アンケートの実施

大学院生全員を対象として、脳科学研究科の教育・研究環境改善に関するアンケートをWEB上で実施した。個別の授業を対象としないことで、匿名性を確保し、率直な評価を収集

することができた。また自由記述と選択回答を明示的に分けることで、より匿名性が感じられるように配慮した。

(3) 脳科学ワークショップ実施

脳科学研究所と共同で脳科学ワークショップを開催し、その中で大学院の研究指導に関する自己点検活動を実施した（9月27日～29日 石和温泉 慶山）。

- ①研究科所属の大学院生全員の研究指導状況を確認し、より良い方向性に向けた指導のための意見交換を行った。
- ②教員自身の教育と研究能力の向上を促すため、各教員の教育方針、方法と研究成果について確認し、優れた点と改善すべき点について、率直な意見交換を行った。
- ③全教員と大学院生が身近に交流し、生活面や将来への不安などの問題を早く察知、解決するための基盤を固めた。

(4) 擬似ピアレビュー制度の導入

これまで副指導教員として運用してきた複数指導体制を、より実質化し、指導教員との役割を明確化するために、本年度は試験的に擬似ピアレビュー制度を導入した。脳科学ワークショップにおける大学院生の研究発表をもとにし、学術論文のような査読過程を経験することによって、指導教員以外の第三者による客観的な意見を大学院生が自ら明文化し、俯瞰することによって、今後の研究改善につなげることを目的として企画した。これまで副指導担当としていた教員は、擬似ピアレビューのエディターとしての役割を担い、ピアレビューの統括と報告を行った。今後、各エディターの報告をもとに、来年度に向けた制度の改善を検討する。

Ⅲ 教員研修

新任教員研修会

平成30年度採用の新任教員(助教以上)に対し、大学FD委員会の主催により、関係各部の協力・連携のもと研修会を実施した。この研修会は、今年度で16回目の開催となる。参加者は10名で、2日間の日程で行われた。

日 時:平成30年3月8日(木) 10:00～17:40 *18:00より、懇親会開催
3月9日(金) 10:00～15:30

場 所:大学教育棟 2014 621教室

対 象:平成30年度採用教員(助教以上)

研修目的:玉川学園の建学精神、玉川大学の教育理念・目的を理解する。

専任教員としての業務に必要な知識を得る。

到達目標:玉川学園の建学精神、玉川大学の教育理念・目的を他者に説明することができるようになる。

専任教員としての業務を理解し、遂行することができるようになる。

(1) 研修プログラム内容

1日目:3月8日(木)

10:00	開始／研修説明	教学部教育学修支援課
10:05	開催にあたって	小原 芳明 理事長
10:25	新任教員自己紹介	教学部教育学修支援課
10:40	講演「玉川大学の教育理念」	菊池 重雄 高等教育担当理事
12:00	昼食	
13:00	キャンパス・ツアー	人事部人事課
14:20	休憩	
14:30	本学の ICT を活用した教育 玉川大学共通アカウントについて	教学部教育学修支援課
15:50	Notes システムと Notes 掲示板の活用	総務部情報基盤システム課
16:10	「UNITAMA 教員業績」について (目的と操作方法)	教学部教務課
16:40	玉川学園のコンプライアンス方針について	監査室
16:55	玉川学園の個人情報保護方針について	総務部総務課
17:15	質疑応答／翌日の予定説明	教学部教育学修支援課
17:25	キャンパス・カード用写真撮影	教育企画部広報課
17:40	終了 (一時解散)	
18:00	懇親会	大学 FD 委員会
20:00	終了	

2日目：3月9日（金）

10:00 本日の研修説明

教学部教育学修支援課

10:10 教学事項に関する質疑応答

教学部

- ・玉川学園の組織機構／玉川大学の概要
- ・各種運営担当、担任業務、教務指導・学生指導
- ・年間授業計画
- ・学則・規程等
（授業、休講、補講、試験、成績等）
- ・学生ポートフォリオ
- ・学生の身分異動
- ・授業および成績に関する諸制度
- ・教学事務手続要領（研究費、出張（国内外）等）
- ・学生支援-学修支援について
（ラーニング・コモンズ見学を含む）

教務課

学務課

授業運営課

教育学修支援課

11:50 学生支援-学生指導について

青木 敦男 学生センター長

- ・学生としてのマナー
（服装、自動車・バイク通学、喫煙等）
- ・学生の諸問題の早期発見・解決
- ・ハラスメント
- ・学生相談室
- ・奨学金
- ・クラブおよびサークル活動

12:20 昼食

13:20 講演「これからの大学に必要なこと」

稲葉 興己 教学部長

15:00 質疑応答

15:30 終了

(2) 配付資料・参考資料

資料No.	資料	担当
なし	平成 30 年度新任教員研修会<研修プログラム>	人事部人事課
	平成 30 年度新任教員研修会 名簿	
	大学教員の勤務について 看護休暇・介護休暇申出書 出勤簿 身上異動届	
	私学共済制度 新規加入者向けリーフレット 学校法人玉川学園 WELBOX 会員の皆様へ	
	玉川学園 玉川大学 2017 総合パンフレット	教育企画部広報課
	小原國芳『全人教育論』	玉川大学出版部
	玉川学園編『愛吟集』	
	「全人」2018 年 3 月号	
1	玉川大学の教育 ー教育理念(建学の精神)の引き継ぎ手としてー	菊池 重雄 高等教育担当理事
	玉川の教育(玉川学園ホームページ抜粋)	
2	平成 30 年度新任教員研修会 キャンパス・ツアー資料	人事部人事課
	玉川学園案内図(キャンパス・ツアールート)	
3	玉川大学における ICT 活用	教学部教育学修支援課
4	UNITAMA 教員業績について ー目的と操作方法ー	教学部教務課
5	コンプライアンス方針について	監査室
	コンプライアンスについて(冊子)	
6	学校法人玉川学園における個人情報保護の取り組みについて	総務部総務課
	個人情報保護法ハンドブック	
	研修受講報告書	
7	学校法人玉川学園組織機構 玉川大学の概要 担当業務等について 教学部の役割 玉川学園 在籍者数 総括表	教学部教務課
	新任教員研修会 教務事項 「授業を通して修得できる力」のコモン・ルーブリック 平成 30 年度 年間授業計画	教学部授業運営課
	ご着任にあたって 各種事務手続きについて 平成 30 年度 個人研究費説明会について 平成 30 年度 大学入学式について(ご案内)	教学部学務課
8	これからの大学に必要なこと	稲葉 興己 教学部長

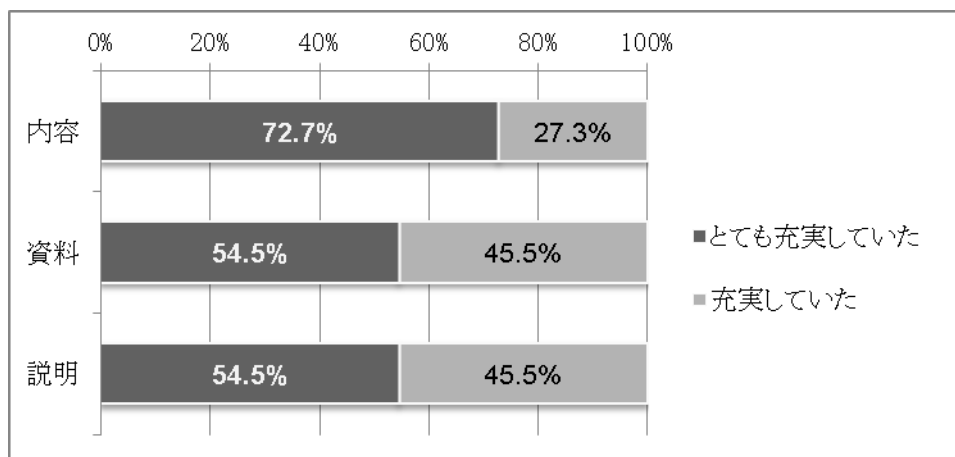
(3) 実施の成果

本学における教育について、高等教育のコンテキストから参加者に理解を促すため、2つの講演「玉川大学の教育－教育理念(建学の精神)の引き継ぎ手として－」そして「これからの大学に必要なこと」を設けた。これにより、専任教員としての業務に必要な、教学事項や学生指導、個人情報保護に関する事項等だけではなく、大学で働く教員に期待されていることが何かを伝えることができた。

また、今年度は新たに監査室による「玉川学園のコンプライアンス方針について」を設け、教育・研究機関に勤務する教職員として自覚を促すことができた。

上記の結果、受講者から提出された研修受講報告書では、研修内容、資料、説明のすべての項目において、「充実していた」よりも「とても充実していた」と回答する割合が上回った。特に内容面に関しては、72.7%とその結果は著しく、参加者のニーズに沿う充実した内容の研修を実施することができた。

＜報告書データ集計結果－内容、資料、説明について＞



なお、今回の研修に参加して良かった点として挙げられたコメントは、次のとおりである。

- ① 教育理念、教育信条について直接口頭でご教示いただけた。
- ② 日頃接することの少ない他学部の方と交流できた。
- ③ 学内全体の組織や情報共有の仕方が大まかに理解できた。
- ④ 資料、PP など充実していて、沢山の情報が整理しやすかった。
- ⑤ 大学の理念や方針、そしてシステム(特に教務関係)が事前に知れたことが有益であった。
- ⑥ 帰属意識が芽生えた。

その上で、改善希望として、次のようなコメントがあった。

- ① PC に実際に触れながら体験的に理解できる手立てがあればよかった。
- ② 4 月以降に説明を分けてほしい。
- ③ 所属する学部教員と交流機会があれば良かった。
- ④ もう少し早い時期にお伺いしたかった。
- ⑤ 将来もし英語による専門科目を増やすのであれば、研修会も英語メインのスライドを使って日本語メインで説明する、もしくは頻繁に英語で要点を交える、あるいは全て英語メインで進行する等、対応の準備が必要かもしれない。

今後に向けての検討課題も挙げられているが、総体的には本研修会の目的・到達目標は、達成できたと評価できる。また同時に、本研修会は新任教員同士の教育・研究活動に向けた良好な関係構築に役立つものであったと考えられる。

改善希望として挙げられたコメントを踏まえ、次年度の開催に向けた、本研修会の質向上に努めたい。

以上



参 考 資 料

参考資料 1. 大学 FD 委員会の議事内容

第 1 回大学 FD 委員会

- 日 時 : 平成 29 年 4 月 28 日 (金) 17 : 30～19 : 00
- 場 所 : 大学教育棟 2014 793A 会議室
- 議 案 : (1) 会議日程に関する件
(2) 今年度の FD 研修会等に関する件
- 報 告 : (1) 各学部 今年度 FD 活動計画および授業参観計画の提出について
(2) 「平成 28 年度 ファカルティ・ディベロップメント活動報告書」の配付方法について
(3) 大学教育再生加速プログラム (AP) 平成 28 年度事業報告および平成 29 年度事業計画について
(4) 平成 28 年度大学 I R コンソーシアム学生調査結果について
(5) 大学改革カンファレンス 2017 報告 - THE 世界大学ランキング日本版について
(6) 学生ポートフォリオの入力状況について
(7) 学生の入学後の知識・能力の変化について
(8) 他大学等提供のシンポジウム等および資料提供について

第 2 回大学 FD 委員会

- 日 時 : 平成 29 年 6 月 30 日 (金) 17 : 30～19 : 00
- 場 所 : 大学教育棟 2014 793A 会議室
- 議 案 : (1) 大学 FD 委員会主催 FD 研修会等に関する件
(2) 各学部の FD 活動計画に関する件
- 報 告 : (1) 授業参観計画について
(2) 私立大学情報教育協会主催研究発表会について
(3) SPOD フォーラム 2017 について

第 3 回大学 FD 委員会

- 日 時 : 平成 29 年 11 月 24 日 (金) 17 : 30～19 : 00
- 場 所 : 大学教育棟 2014 793A 会議室
- 議 案 : (1) 平成 30 年度新任教員研修会に関する件
(2) アクティブ・ラーニング ワークショップに関する件
- 報 告 : (1) 平成 30 年度 FDer 養成講座について
(2) 大学教育力研修について

第 4 回大学 FD 委員会

- 日 時 : 平成 30 年 1 月 26 日 (金) 17 : 30～18 : 30
- 場 所 : 大学教育棟 2014 793A 会議室
- 議 案 : (1) 大学教育力研修 分科会座長に関する件
- 報 告 : (1) 平成 30 年度 FDer 養成講座について
(2) 教職課程 FD・SD 研修会について
(3) 新任教員研修会 懇親会について

参考資料 2. 「授業評価アンケート」用紙

記入日	月	日	回答者学年	①1年	②2年	③3年	④4年	⑤その他
-----	---	---	-------	-----	-----	-----	-----	------

授業科目名	5	4	3	2	1
開講時限	4 時間以上	3 時間 ～ 4 時間未満	2 時間 ～ 3 時間未満	1 時間 ～ 2 時間未満	1 時間未満
曜日					
限					
担当教員名					

I. この授業に対するあなたの学修時間について

1	1回分の授業外の学修(予習、復習、課題など)にかけた時間	5	4	3	2	1
---	------------------------------	---	---	---	---	---

		5	4	3	2	1
		よく当てはまる	やや当てはまる	どちらともいえない	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない

II. この授業に対するあなたの取り組みについて

2	この授業に積極的に参加した。	5	4	3	2	1
3	この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	5	4	3	2	1
4	どのような自主的・発展的な学修をしましたか。 ☐ 発表の前にプレゼンテーションの練習をした。 ☐ 授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。 ☐ その他()					

III. この授業の進め方について

5	各回の授業のねらい・内容は明確であった。	5	4	3	2	1
6	教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	5	4	3	2	1
7	映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	5	4	3	2	1
8	教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	5	4	3	2	1

		5	4	3	2	1
		よく当てはまる	やや当てはまる	どちらともいえない	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない
IV. この授業を受けてみて						
9	新しい考え方・発想に触れた。	5	4	3	2	1
10	基本的知識が得られた。	5	4	3	2	1
11	多角的な視点から見る姿勢が身についた。	5	4	3	2	1
12	自分で調べ、考える姿勢が身についた。	5	4	3	2	1
13	科目のもつ学問的意義を読み取れた。	5	4	3	2	1
14	学問的興味をかきたてられた。	5	4	3	2	1

V. この授業を総合的に振り返って

15	授業全体の目標・内容が明確であった。	5	4	3	2	1
16	授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	5	4	3	2	1
17	この授業をほかの学生に薦めたい。	5	4	3	2	1

VI. その他

18	この授業の教室の大きさは適切であった。	5	4	3	2	1
19	この授業の受講者数は適切であった。	5	4	3	2	1

その他、意見、感想など自由に書いてください。

アンケートは以上です。ご協力ありがとうございました。

参考資料 3. 玉川大学FD委員会規程

(平成 15 年 4 月 1 日 制定)

(平成 21 年 4 月 1 日 改正)

(目的)

第1条 玉川大学（以下「本大学」という。）教員の、教育研究活動の向上・能力開発に関して恒常的に検討を行い、その質的充実を図ることを目的として、大学FD（ファカルティ・ディベロップメント）（以下「FD」という。）委員会（以下「本委員会」という。）を置く。

(組織)

第2条 本委員会は、委員長、委員、事務担当をもって構成する。

- 2 前項の委員長は教学部長とする。
- 3 委員長及び委員等は、毎年度当初、学長がこれを委嘱する。
- 4 委員長が必要と認めたときは副委員長を置くことができる。
- 5 本委員会には学部ごとの部会を設けることができる。
- 6 前項による部会は、各学部ごとに設け、部会のまとめ役及び委員は学部長が選任する。

(任期)

第3条 委員の任期は1か年とする。ただし、再任を妨げない。

(運営)

第4条 本委員会は、委員長が招集・開会し、議長となる。

- 2 委員長が必要と認めた場合は、委員以外の教職員の出席を求め、意見を聴取することができる。

(審議事項)

第5条 本委員会は、次の事項を審議する。

- (1) 教育研究活動改善の方策に関する事項
- (2) 初任者及び現任者の研修計画の立案・実施に関する事項
- (3) 学生による授業評価の実施、結果分析及びフィードバックに関する事項
- (4) FDに関する教員への各種コンサルティングに関する事項
- (5) 教員のFD活動の指針に関する冊子及びFD活動報告書の刊行
- (6) 部会からの報告・審議に関する事項
- (7) その他FDに関連する事項

(部会)

第6条 各部会は、本委員会に検討・実施事項を報告しなければならない。

(答申)

第7条 委員長は、本委員会の審議結果を学長に答申しなければならない。

(実施事項の決定)

第8条 前条の答申内容の実施については、大学部長会の議を経て学長が決定する。

(実施事項の運用)

第9条 前条により決定した実施事項に関する実際の運用に関しては、教務委員会及び教育研究活動等点検調査委員会との調整を図りながら検討、実施するものとする。

(事務主管)

第10条 本委員会に係る事務主管は、教学部教育学修支援課とする。

附 則

この規程は、平成15年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成21年4月1日から施行する。

平成 29 年度 ファカルティ・ディベロップメント活動報告書

玉川大学 大学 FD 委員会・大学院 FD 委員会

平成 30 年 5 月 発行

〒194-8610 東京都町田市玉川学園 6-1-1

平成 30 年 5 月発行

発行 玉川大学 大学 FD 委員会・大学院 FD 委員会

〒194-8610 東京都町田市玉川学園 6-1-1

tel : 042-739-8866 (教学部教育学修支援課)